

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.39

～特集 地図資料の活用～



地図資料を活用した博物館での学習活動（帝京大学総合博物館提供）

2018.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】地図資料の活用	2
●地図資料の活用 特別展「八王子と鉄道」と「百年の彩り」を中心に 八王子市郷土資料館 中村 明美	2
●瑞穂町が仕掛ける地域資料の見せるデジタル化と地域活性 瑞穂町教育委員会教育部図書館長兼郷土資料館・ 耕心館管理者 宮坂 勝利	4
●記憶画展示の可能性について 福生市郷土資料室 宮林 一昭・針谷 もえぎ	6
●特別展「絵図と航空写真から見る武蔵村山」から見えたこと 武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋 健樹	10
●研究・展示における絵図の活用 羽村市郷土博物館 河村 康博	12
●展示における地図・絵図の活用 「災害と多摩」展を事例に パルテノン多摩歴史ミュージアム 橋場 万里子	16
●展覧会における地図パネルの役割と製作について 江戸東京たてもの園 真下 祥幸	20
●「AR 多摩さんぽ」航空写真とAR(拡張現実)を活用した展示 帝京大学総合博物館 堀越 峰之	24
●地図資料から近現代の歴史とたどる 展示における地図や空中写真の活用 武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 合田 宇宏	26
会員館活動報告(順不同)	30
東村山ふるさと歴史館、小金井市文化財センター、集合住宅歴史館、府中市郷土の森博物館、調布市郷土博物館、青梅市郷土博物館、瑞穂町郷土資料館 けやき館、あきる野市五日市郷土館、清瀬市郷土博物館、東大和市立郷土博物館、東京農工大学科学博物館、檜原村郷土資料館、(公財)たましん地域文化財団、町田市立博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館、立川市歴史民俗資料館、国立天文台天文機器資料館、日野市郷土資料館、帝京大学総合博物館、くにたち郷土文化館、奥多摩水と緑のふれあい館、多摩六都科学館、羽村市郷土博物館、狛江市立古民家園(むいから民家園)、国立ハンセン病資料館、首都大学東京91年館、東京都立埋蔵文化財調査センター、江戸東京たてもの園、八王子市郷土資料館、福生市郷土資料室、パルテノン多摩歴史ミュージアム、コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	
東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿	53

地図資料の活用

特別展「八王子と鉄道」と「百年の彩り」を中心に

八王子市郷土資料館 中村 明美

■はじめに

八王子市郷土資料館では常設展示のほか、年間2回の特別展(図録を作成)と企画展を3回ほど開催している。近年の特別展のなかで地図資料を利用した特別展は「案内図に見る多摩陵・高尾と八王子」、「開発と観光の時代へ—昭和30～40年代の八王子の風景—」、「八王子の絵図1」、「八王子と鉄道」、「郷土へのまなざし—史跡・聖蹟と八王子—」、「八王子百年の彩り」(表1参照)があげられ、地形図のほか絵図・名所案内図・空中写真などの広い意味で地図資料を紹介してきた。また平成29年度八王子市は市制100周年・八王子市郷土資料館開館50周年を迎え、1階第1展示場の常設展示を入れ替え、特別展「八王子百年の彩り」(9月16日～11月26日)として開催し、地図資料を交えながら八王子の百年のあゆみを紹介した。これらの展示および展示図録に利用・掲載した地図資料の一部を紹介する。

開催年度	特別展	図録版	掲載地図 類点数	資料年代
平成18年度	案内図に見る多摩陵・高尾と八王子	A3版(横版)	33	江戸時代～昭和(戦前)
平成20年度	開発と観光の時代へ—昭和30～40年代の八王子の風景—	A4版	16 (空中写真9)	昭和30～40年代
平成23年度	八王子の絵図1	A1版 折りたたみ8枚組 A4ケース入り	10	中世～明治時代
平成23年度	八王子と鉄道	A4版	22	明治時代～昭和40年代
平成28年度	郷土へのまなざし—史跡・聖蹟と八王子—	A4版	21	明治時代～昭和40年代
平成29年度	八王子百年の彩り	A4版	15 (空中写真8)	明治時代～昭和40年代

表1 八王子市郷土資料館の地図資料を利用した展示

■八王子市の歴史的特色と地図資料

八王子は東西南北に主要な街道が交差し、甲州街道の宿場町として栄え、明治22年(1889)には甲武鉄道(新宿-八王子間)が開通し交通の要所として多様な鉄道(官設・私設鉄道・路面電車・ケーブルカー)の歴史がある。

また市内には寺社や城跡のほか多くの史跡名勝が存在することから、観光の八王子としての特色も濃い。市内西部に位置する高尾山は、現在でも参拝客のほかレクリエーション及び憩いの場として市外から多くの人を訪れる。幕末の高尾山略絵図をはじめとし、明治末期には写真絵葉書や八王子の史跡名勝案内書などが発行され始める。大正8年(1919)、東京府による史跡名勝天然記念物の調査が開始、大正11年には八王子史談会が結成され史跡調査や文化活動が盛んになっていった。こうした流れのなかで昭和2年(1927)に多摩陵が現在の八王子市域に造営され、全国から訪れる多くの参拝客のために、多摩陵・高尾山を中心とした史跡名勝案内図(鳥瞰図を含む)・案内書・絵葉書などが多種刊行された。太平洋戦争で焼失した八王子は戦後新たなまちづくりに取り組む。

幹線道路の整備のほか昭和30年以降「昭和の大合併」として周辺町村と合併し市域が拡大し、商業・工業・学園・観光都市として成長していく。丘陵地が開発され、昭和42年(1967)高尾山に直結する京王高尾線(京王御陵線跡の再利用)の開通などの要因により八王子は新たな成長をとげる。

■地図資料の活用

【資料の閲覧】 当館において八王子に関係する書籍及び地図資料を閲覧することができる。地図においては明治時代～平成までの1/2.5万・1/5万地形図・絵図・八王子市全図・昭和初期の大日本職業別明細図(複製)、住宅地図などが揃っている。

【八王子の市域】 八王子は明治5年(1872)に神奈川県に編入、明治22年(1889)に「八王子町」が誕生し、明治26年には三多摩(南・北・西)が東京府に移管される。大正元年(1912)、大字地番が改称され19から29町に新町名が施行され、大正6年(1917)9月1日に八王子町は市制施行し、「八王子市」となる。「八王子市全図」(周辺町村と合併前の旧市街地)は市制施行された大正6年当時のもの以外に、大正15年・昭和3年・同5年(資料1)・同10年・同12年発行のものを当館で所蔵している。資料1の八王子市全図は、町名一覧・地番・交通網・主要施設のほか、甲州街道には八王子駅まで延伸された武蔵中央電気鉄道(表2参照)の停留所名が記載され、昭和初期の八王子の交通網の発展のようすがわかる。裏面の「八王子及附近名所案内」は町名・面積・戸数人口・官公署学校・八王子織物・交通案内・商店街・東京からの交通略図・周辺行楽地の情報と写真が掲載されており、表裏2面で地図と市勢要覧を兼ねているため八王子の情報が凝縮されており、年代で情報が比較できる好資料である。

また昭和16年(1941)の小宮町をはじめに、同30年には周辺6か村(横山・元八王子・恩方・川口・加住・由井)、同34年(1959)浅川町、同39年由木村と合併し、八王子市は現在の市域となるため、市制施行当時の八王子市は旧市街地をさし、周辺町村は含まれない。平成29年度特別展「百年の彩り」では、100年間の市域の拡大のようすを地図で紹介し、展示図録においては明治43年(1910)の八王子町全図と市制施行時の八王子市全図を比較できるよう紹介し、ほか昭和の町村合併や戦後の土地区画整理事業実施図なども掲載した。

【鉄道計画・路線図】 八王子の鉄道の歴史は明治時代から昭和初期にかけて、現在のJR線となる中央線・横浜線・八高線が開通(表2参照)、その後蒸気機関車から電化への工事が行われた。私鉄においては京王電気軌道(現・京王電鉄)が新宿-八王子間を全線開通させたほか、昭和初期に高尾山のケーブルカー・市街地と高尾山を結ぶ路面電車・京王御陵線が開通した。不要不急線として廃線になったものや駅名の変更や計画で終わった幻の鉄道があるなど、八王子の交通網の歴史は複雑である。平成23年度特別展「八王子と鉄道」では鉄

道関係の線路図・地形図・名所案内図・沿線案内図・位置図など（資料2参照）を国鉄・JR編と私鉄編で展示期間を2期にわけ紹介した。

そのなかから観光案内図として描かれ鉄道路線と名所案内を兼ねた京王電車の鳥瞰図を紹介する。大正12年（1923）の「高尾山名所図会」（日本名所図会社発行）は鳥瞰図の名手として有名な吉田初三郎の弟子と伝わる金子常光によるものである。金子常光の作品はほかに大正13年「京王電気軌道 玉南電気軌道沿線案内」（資料3）、昭和3年「武州高尾山案内」（高尾登山鉄道発行）があげられるが、吉田初三郎の作品とは異なるタッチでの仕上がりになっている。

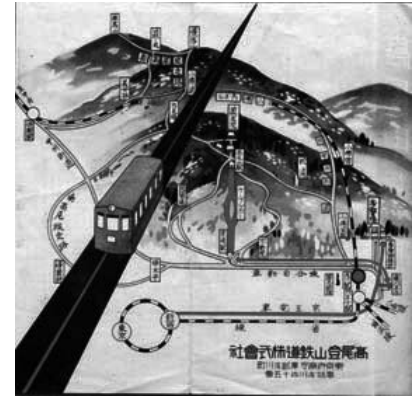
京王電気軌道が吉田初三郎に依頼した昭和3年と5年の鳥瞰図「京王電車沿線名所図会」（資料4）は構図的な完成度が高く色彩的に華やかである。路線図の駅名のほか周辺の史跡名勝案内にも重点をおき、大胆なデフォルメにより京王閣や高尾山・多摩陵といった当時の人気の観光地を中心に描いている。2枚を比較することで楽しさが増し、鉄道の変遷も理解しやすい。京王電鉄は戦前から沿線の観光案内や史跡めぐりに力を入れており、多種多様な「沿線案内図」が刊行され収蔵資料数も多い。しかしこのような案内図には発行年が記載されていないものが多く、駅名・施設名や史跡名勝地などから年代を推測しなければならないため、資料の年代の特定が今後の課題となる。

■さいごに

1枚の地図資料から多くの情報が読み取れ、地図は閲覧頻度が高い資料である。しかし大小様々な大きさから、展示や図録掲載の場合見せるための工夫が必要となる。図録に掲載する際、A2版見開きで掲載や、大判で印刷し折りたたみ箱に収納するなど資料を見やすくするための工夫も必要だろう。地図に掲載されている情報を地図以外の資料を加えることにより、今後よりよい資料の活用方法と展示において理解が深まる工夫をしていく必要性を感じている。



資料1 八王子市全図 昭和5年 1/2,500 530×782mm



資料2 高尾山御案内 昭和12年頃 148×130mm

開催年度	開業年度	西暦	鉄道名
国鉄・JR	明治 22 年	1889	甲武鉄道（新宿 - 八王子間）
	明治 34 年	1901	官設中央線（八王子 - 上野原間）
	明治 41 年	1908	横浜鉄道（東神奈川 - 八王子間）
	明治 44 年	1911	中央線の全通（昌平橋 - 名古屋間）
	昭和 6 年	1931	八高南線（八王子 - 東飯能間）
私鉄	昭和 9 年	1934	八高北線（小川町 - 寄居）が開通し、八高線の全通
	大正 5 年	1916	京王電気軌道（新宿 - 府中間）
	大正 14 年	1925	玉南電気鉄道（府中 - 東八王子間）の設立
	昭和 2 年	1927	高尾登山鉄道（ケーブルカー）
	昭和 3 年	1928	京王電気軌道が新宿 - 東八王子間を直通運転
	昭和 4 年	1929	武蔵中央電気鉄道（浅川 - 追分間）
	昭和 5 年	1930	中央線（東京 - 八王子間）が電化
	昭和 6 年	1931	京王御陵線（北野 - 御陵前間）
昭和 42 年	1967	京王高尾線（北野 - 高尾山口間）	

表2 八王子の主な鉄道の開業年



資料3 京王電気軌道 玉南電気軌道沿線案内 金子常光画 大正13年 180×760mm



資料4 京王電車沿線名所図会 昭和5年 吉田初三郎画 178×760mm

瑞穂町が仕掛ける地域資料の見せるデジタル化と地域活性

瑞穂町教育委員会教育部図書館長兼郷土資料館・耕心館管理者 宮坂 勝利

瑞穂町は、狭山丘陵の西端に位置する人口約3万3,000人の町で、江戸時代には青梅街道と日光街道が交差する宿場町として栄え、明治以降は養蚕業や茶業が発達しました。

戦後は製造業が集積する工業地域が形成される一方、在日米軍と航空自衛隊が所在する横田基地を抱える“基地の町”としても歩んでおり、近年は東京都内随一のシクラメン栽培地としても有名です。平成26年11月にオープンした郷土資料館「けやき館」は開館以来順調に来館者を増やし続け、平成30年1月には11万人を突破し、大勢の方々にご利用いただいています。

「見せるデジタル化」のきっかけ

瑞穂町では、これまで発刊してきた刊行物が残り少なくなってきたことを契機に、貴重な資料を未来に残していこうと平成27年から瑞穂町図書館を中心に、町刊行物等の地域資料のデジタルアーカイブ化を助成金等を活用して進めてきました。同年11月には町刊行物等の地域資料デジタル化及び、隣接する横田基地の関係者やこれからの国際化に対応すべく、広く当町を知っていただきたいという思いから英語の翻訳データも公開しました。

この施策を進めていく中で「地域資料をインターネットに公開したものの、もっと活用を促進できないものか」とデジタルアーカイブのさらなる活用促進を模索していたところ、注目したのが郷土資料館とのコラボレーションでした。

瑞穂町郷土資料館「けやき館」は、平成26年11月に図書館内にあった郷土資料館を移転する形で新設され、幸い図書館と郷土資料館を同じ部署で運営しているため、地域資料のデジタルアーカイブ化も双方が協力してスムーズに行うことができ、郷土資料館の展示物と連動させるというアイデアも自然に出てきました。

郷土資料館の更なる活用

瑞穂町郷土資料館「けやき館」は、「瑞穂の自然と歴史」をテーマに、狭山丘陵雑木林のジオラマや瑞穂町産の「多摩だるま」「村山大島紬」「東京狭山茶」、囲炉裏のある民家の復元コーナーなどの展示物を常設。企画展示室や体験学習室も用意されています。

その郷土資料館の“目玉”とも言えるのが、館内ガイダンスホール床面に配置されている縮尺1,000分の1の町全域航空写真「バーズアイ瑞穂」です。

「バーズアイ瑞穂」は、郷土資料館の開館以来、町民の皆様に親しまれてきました。その一方でVR（仮想現実）/AR（拡張現実）のスマートフォンアプリが流行するなど、カメラで撮影した現実の画像とデジタルコンテンツを組み合わせる技術も身近になりました。そこでスマートフォンやタブレットを介し、バーズアイ瑞穂の航空写真とデジタルアーカイブを連動させることはできないかという検討をはじめました。

当初、バーズアイ瑞穂にQRコードを配置してスマートフォンやタブレットで読み取り、インターネット上のデジタルアーカイブへ誘導するという方法を検討しました。しかし、バーズアイ瑞穂上にQRコードを配置すると、写真の一部が隠れてしまい、それでは町全域を鳥瞰できる航空写真が台無しになってしまいます。次に航空写真にICチップを埋め込む方法も検討しましたが、スマートフォンやタブレットをかざして読み込ませるのは、操作性が良いとは言えず、仕込むのも現実的ではありませんでした。このような中、いろいろな策を検討し登場したのが被写体認識基盤サービスです。

被写体認識基盤サービスとは、スマートフォンやタブレットのカメラで撮影した画像を認識し、被写体そのものを入力情報として、任意のアクションが行えるのですが、QRコードのようなマーカを必要とせず、印刷物や商品パッケージ、街なかのランドマークや看板など、あらゆるものを認識できます。

活用事例

バーズアイ瑞穂や常設展示物を撮影すると、関連したデジタルアーカイブに誘導するシステムを構築し、また、貸出用タブレットで稼動する「瑞穂町探検アプリ」を開発しました。このアプリを起動して、バーズアイ瑞穂や常設展示物などの対象にカメラを向けてシャッターを押すと、撮影した画像の内容に関連するデジタルアーカイブの情報が一覧表示され、インターネット上で公開されているページへアクセスできるようになっています。

関連ページへ誘導するだけではなく、例えば、瑞穂町の中心駅であるJR箱根ヶ崎駅を撮影すると1970年代に運転を終了した蒸気機関の走行音、町立小中学校を撮影すると各校の校歌が聴けるといった工夫も取り入れました。見るだけではなく、耳からも感じるという五感に響くところが好評です。

また、今回の取り組みは、図書館や郷土資料館の職員にも好影響を与えており地元の伝統産業や、狭山丘陵をはじめとした自然のことなど、地域のことを再認識するきっかけになり、職員の知識は確実にアップしました。

今後の発展性

現在は郷土資料館の館内利用に限定されており、瑞穂町探検アプリがインストールされているのは、館内貸出用タブレットですが、今後のサービス拡大として、瑞穂町探検アプリを、郷土資料館だけでなく、一般のスマートフォンやタブレットでも利用できるように配布する予定です。こうすることで、郷土資料館の館内だけではなく、町内に点在する文化財や見どころにも対応させることができ、現地を訪問した人が、スマートフォンやタブレットに昔の写真を表示したり、由来や説明を閲覧したりできるようになります。

瑞穂町では「みずほきらめき回廊」を設定し、町内をゾーニ

ングして各地域の観光資源を結ぶ回遊性のあるルートの整備を進めています。その一環として瑞穂町探検アプリを活用することで町内の町歩きに繋がります。

また、デジタルアーカイブを含む被写体認識基盤サービスとアプリの多言語化も重要です。

瑞穂町は米国空軍横田基地に隣接しており、良き隣人として交流を続けています。瑞穂町探検アプリを英語化し、デジタルアーカイブの翻訳化を強化することで、基地内外の米軍兵士とその家族にも過去から現在までの瑞穂を知っていただけるものと考えています。

多言語化は2020年の東京オリンピックに向けた国際理解・国際交流を推進するためにも、非常に有効な取り組みだと考えています。

地域資料の重要性

地域資料には、その自治体にしかない貴重な宝がいっぱいあります。キラコンテンツの発掘こそが、他自治体との差別化であり、これからの資料館には大切なのだと思います。今回のデジタル化をきっかけに瑞穂町が誇れる地域資料の収集が数多く集まってきました。

「自然の宝庫である狭山丘陵に関する動植物写真や文献」「瑞穂町にお住まいだったミュージシャン大瀧詠一氏に関する資料群」「米国空軍横田基地に関する資料群」等々、瑞穂町オリジナルの資料が収集されてきました。これら瑞穂町にしかない地域資料をデジタル化し、それを核とした取り組みを拡げていくことで、地域活性化までつなげていきたいと考えています。

知の拠点としての図書館・資料館

地域資料の重要性を再認識することで、わが自治体の強みやアピールポイントを再発見できるはずです。そしてデジタル化して終わりではなく、これはひとつの通過点であります。図書館と資料館はもとより、住民、企業等すべてと繋がることで、さらなる効果が生まれてきます。企画課でもない、観光課でもない、図書館・郷土資料館だから仕掛けることができる地域活性化策を、自らが企画し仕掛けていくべき時代だと思えます。



瑞穂町郷土資料館「けやき館」全景

■瑞穂町探索アプリの利用方法



○いつも賑わう資料館床面の町内航空写真「バズアイ瑞穂」



○「バズアイ瑞穂」の気になる場所に向けてシャッターマークをタップ



○撮影した場所に応じて、その箇所の昔の写真や解説のほかに、過去に走っていた蒸気機関車の走行音や町立小中学校の校歌が聴けるなど、さまざまな関連情報が表示される



○さらに詳しく調べることができるように地域資料も表示できる

記憶画展示の可能性について

福生市郷土資料室 宮林 一昭・針谷 もえぎ

■はじめに

福生市郷土資料室では、平成29年9月23日から11月26日まで、「福生むかし絵Ⅱ」を開催しました。これは平成27年度に行った記憶画の展示の2回目にあたるものです。

記憶画とは、昔の町並みや生活風景などを正確な記憶に基づいて描いた絵画であり、これらの情景に関する写真や地図などの資料が残されていない場合には、それを補う歴史資料として注目を集めています。今回展示した記憶画は、市内在住の窪田成司氏が描いたものです。郷土資料室での記憶画の発掘や展示の経過について報告します。

■記憶画との出会い

私が窪田成司氏の描く「記憶画」を初見したのは、平成26年に地域の篤志家の協力の下に自費出版された画集「福生永田絵図」を手にした時でした。

そこには昭和10年代の福生の様子が、古き良き時代を偲ばせるあたたかな画風で描かれていました。良い絵だとは思いますがやや機械的に読み進めていましたが、途中であることが気になり最初から見直しました。

約30点の絵には多くの家屋が描き込まれていましたが、それらの大きさや屋根の色、窓や戸口の位置、庭木の樹種などの細かい点について、それぞれ異なる描き方をされていたのです。記憶画の場合、どうしても詳細については曖昧にならざるを得ず、こういった細部については等質に描かれることが多いように思います。しかし、窪田氏の絵画はそのようには思えず、その点がとても気になりました。そこで早速取材を申し込み、直接この疑問をぶつけました。すると窪田氏は「これらの絵は自分の記憶に基づいて描いており、記憶はカラー映像として頭に浮かんでくる。思い出せるものはなるべく細かく描いている」と事も無げに答えたのです。そこで私は検証の意味も含めて、「もっと広範囲に、例えば街並みのように連続した絵も描けますか」と尋ねたところ、「自分が育った地域内なら描けるので、今度一枚描いてみましょう」と二つ返事で請け負ってくれました。

これをもって完成したのが、写真の「宿橋通り家並絵図」です。この絵巻は昭和10年代、宿橋通りが福生の中心として栄えていた時代の街並みを、道の中央を視点としてその南側、北

側に分けて描いた2本の絵巻です。両側に並ぶ住宅や商店、銀行や郵便局などの建造物が、窪田氏のこれまでの絵画同様、それぞれの大きさや作り、色彩や看板の文字までもが詳細に書き込まれています。そしてこの絵巻について、古写真や住人の証言を基に検証をしたところ、予想通りほぼ事実と合致したものであり、やはり氏は詳細な再現力のある映像記憶の持ち主であることを確信するに至りました。そうであれば、窪田氏の描いた絵画は貴重な歴史資料であり、これをこのままにしてはいけないという強い思いを抱きました。

そこで私は窪田氏に、これらの絵画は記憶画という性質のものであること、そしてユネスコの世界記憶遺産に登録された山本作兵衛氏の炭鉱記録画を例にあげて説明し、窪田氏の記憶が郷土の歴史資料として大変貴重であり、公共の財産として未来に伝えるべきものであること、そのために今後も可能な限り記憶画の製作につとめて欲しいことをお願いしました。

窪田氏は、私の性急とも言える依頼に対していやな顔をすることもなく、それから新たな記憶画の製作に着手してくださいました。製作された記憶画の点数は既に50点を超え、86歳の今も、変わらぬ熱意で創作に取り組んでおられます。

■展示内容

福生市郷土資料室では、早速、平成27年度に窪田氏の記憶画を紹介するための企画展示を行いました。その2回目にあたる今回の展示では、特別展示として図録を作成するとともに、前回よりも多くの記憶画を公開することになりました。市内永田地区を中心とした福生のむかしの風景を描いた「永田絵図」シリーズ45点と、宿橋通り沿いの家や商店を描いた「宿橋通り家並絵図」や、祭りの様子を描いた「御神輿巡行絵図」などの絵巻6点など、合わせて56点を前期と後期の2回にわけて展示しました。

永田絵図

「永田絵図」は1枚がB4くらいの大きさの水彩紙に描かれたシリーズで、市内永田地区をはじめとして多摩川沿いの北田園地区、その東側のはげ上にある中福生地区、玉川上水沿いの風景などが描かれています。これを、描かれている地区や内容によっていくつかに分類して展示しました。



宿橋通り家並絵図 南側

永田地区は多摩川の永田橋の北側にあり、多摩川と玉川上水に挟まれた江戸時代以来の集落で、その中を宿通りと福生駅方面へ分岐する宿橋通りが通っています。展示では、集落北側の宮本橋の絵から南側の永田橋近くまで宿通りに沿って記憶画を順番に並べ、見学者が宿通りを北から南へ進んでいるかのように鑑賞できるように配置しました。また、かつては水田地帯だった北田園地区の記憶画には、用水路やその分岐点が描かれていますが、これも水路の上流から下流に向かって進むように配置しました。この他にも水車や砂利線などを描いた記憶画がありますが、これらはテーマごとにまとめて、関連した記憶画を一度に見ることができるよう配置しました。

宿橋通り家並絵図

窪田氏の絵巻は長いもので約4mあり、展示ケースのスペースや配置の問題から、すべての絵巻を一度に広げることができませんでした。そのため、それぞれに全面展示と部分展示の期間を割り当てて、常時どちらかの状態で見られるように工夫しました。

このうち、「宿橋通り家並絵図」は展示の中心となる絵巻なので、全期間で全面展示をすることにしました。この絵巻に描かれた宿橋通りは、青梅鉄道の福生駅と多摩川に架かる永田橋を結ぶ通りで、当時は銀行や郵便局など街の主要な機関が建ち並ぶ街のメインストリートでもありました。絵巻には通りの北側と南側の家並みを描いた2巻があり、通りの端にある玉川上水宿橋と反対側の福生駅方面への分岐点の間が描かれています。2つの絵巻の地部どうしを合わせて並べると、通りを中央にして左右に両側の家並みを見ることができます。また、縮尺が合っているので玉川上水や通りの中央付近にある堂川の位置が南北の絵巻でぴったりと合い、この家の前にはこの家があるという景観も再現することができます。

実際の展示でもこの景観を見もらうために、あえて絵巻の地部どうしを合わせて並べ、展示室中央にある島型のケースの中に展示し、周囲から見られるようにしました。ケースの外側が絵巻の天部となっているので、一見すると、天地を逆に展示しているように見えますが、絵巻と絵巻の間の隙間を宿橋通りと見立てて眺めると、通りを歩いているような雰囲気味わえるように工夫しました。

現地比定図と現況写真

窪田氏の描いた記憶画にはあたたかな色使いと独特の雰囲気があり、そのまま絵画として鑑賞することもできます。しかし、郷土資料室の展示としては、絵画として見せるのではなく、かつての福生の風景を忠実に再現している歴史資料の一つとし



永田絵図 T字路 道しるべ(しるし石)



展示風景



「宿橋通り家並絵図」の展示



ととらえ、歴史的意義付けをもって展示を行うことにしました。そのため、絵図や古写真の展示と同じように、描かれた場所を記した現地比定図とその場所の現況写真もあわせて展示しました。これには、絵に描かれている場所がどこなのか明らかにし、そこが現在どのように変化しているのか、あるいは変化していないのかわかるものを一緒に展示することで、むかしと現在の比較をしてもらおうというねらいがあります。

現地比定図のベースとなる地図には、昭和3年(1928)に福生村熊川村在郷軍人会が発行した5千分の1「福生村熊川村全図」を使用しました。この地図には一筆ごとに当時の地番が記載され、道路や水路もはっきり記されているので、場所を細かく比定して地図に落とししていくことができます。また、当館で所蔵している地図資料のなかでは、記憶画で想定された昭和10時代に年代が最も近い地図にあたります。

絵には、その後の区画整理でなくなってしまった道路や水路、廃線になった砂利線など、現在はなくなってしまったものが描かれています。これらの場所は、むかしの地図にしか記されていない情報であり、年代の近い地図ならば当時の状況により近い状態が現われています。そのため、この昭和3年の地図を土台にして、新設された道路や橋などの新しい情報を書き加えました。

現況写真については、この現地比定図をもとにして、できるだけ絵と同じアングルになるように撮影しました。場所によっては、かつては田んぼや畑だったところに住宅地や新設の道路ができるなど、周囲の景観が変わってしまっているために見渡せなくなったところや、建物や樹木の陰になって見えなくなってしまった景色もあり、これを補うために、方向や遠近、見え方を考えるなどの工夫をして撮影を行いました。

実際の展示では、A4サイズの紙に各地点の現況写真を上部に、記憶画を下部に印字したものを壁一面に並べ、その近くに

パネルにした現地比定図を掲示しました。実物の記憶画の脇に現況写真と現地比定図を並べる案もありましたが、見ていて煩雑に感じられることや絵そのものも鑑賞してほしいため、あえて一緒には展示せず、現状写真と現地比定図のみまとめて掲示しました。

■記憶画と現況写真、現地比定図からみえてきたもの

記憶画と現況写真を比較して、一番はっきりしたのは街の景観の劇的な変化です。昭和初期には水田や田畑の多い農村地帯であったところが住宅地へと変わっていったことは、これまでも情報としては理解されてきましたが、それが視覚的にも明確になったといえます。

また、記憶画と古い地図をあわせてみることで、当時の水田や畑の分布状況、道路や水路の状況なども明らかになりました。例えば宿橋通りについては、昭和36年に福生駅と永田橋を直線で結ぶ都道165号線が完成したため、街のメインストリートではなくなり、現在は静かな住宅街となっています。この都道165号線の付近を福生駅の方から描いた記憶画で見ると、畑の中をうねるように細い道があり、何軒かの家が点々と建っていて遠くの方に永田橋が見えます。現地比定図で見ると、かつてはこの辺りに道がなく、福生駅方向から永田橋へ向かうためには北側へやや迂回するような形で伸びる宿橋通りを通るか、畑の中の細い道をくねるようにたどっていくかしかないということがわかります。現在の宿橋通りは、都道165号線があるために福生駅から永田橋へ向かうには遠回りとなっていますが、当時は他に道がないため、最短で使いやすい道であったことがわかります。



福生むかし絵の現地比定図

■おわりに

今回の記憶画の展示をみた来館者からは、懐かしいという感想が聞かれました。とくに記憶画の舞台となった永田地区の人たちからは、「ここは私の家なんです」、「ここはよく知っているところです」などという声も寄せられました。また、当時を知らない若い世代の来館者からは、現況写真から記憶画や現地比定図を照らし合わせて、いま知っているこの場所のむかしの姿はこんなふうだったんだという感想もありました。一方で市外の人には、自分の住んでいたところもむかしはこうだったという懐かしさを感じていただけたように思われます。現地比定図については、地図という性質上、地域の人や土地勘のある人の方が楽しんでいただけたようです。

もう一つ、記憶画に描かれた場所を地図に落としていてわかったのは、窪田氏の記憶の正確さでした。現地比定をする作業では、絵のアングルにあわせて場所や方向を地図に記していきましたが、絵にある風景と地図にある道路や用水路などの位置に齟齬がみられず、改めて窪田氏の能力の素晴らしさを認識することとなりました。

今回の展示では、郷土資料室という立場から、記憶画を地域の歴史を語る資料として展示しました。記憶画を歴史資料の一つとしてとらえ、古写真や絵図のように利用することで、新たな歴史展示の可能性も広がるのではないのでしょうか。

(「記憶画との出会い」については宮林一昭が、その他については、針谷もえぎが執筆しました。)



永田絵図 新屋敷 (あやしき)

手前が福生駅方面、奥が多摩川で、「渡し」とあるところが永田橋にあたります。畑の中に細い道がありますが、現在はこの場所に都道165号線が通っています。



北田園 2丁目付近



23 永田絵図 北田園

現在の北田園地区は住宅地となっています。写真中央の左右の通りが田園通りです。車堀はこの手前あたりにありましたが、現在は暗渠あんきよになっています。

現況写真のパネル



現況写真の展示

特別展「絵図と航空写真から見る武蔵村山」から見たこと

武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋 健樹

■はじめに

地図：地球表面の一部または全部を一定の割合で縮小し、記号・文字などを用いて平面上に表した図

絵図：近世以前に作られた建物・庭・土地などの平面図、地図類の総称

航空写真：飛行中の航空機から撮影した写真で、地図製作のための測量、地形の調査などに利用

鳥瞰図：地図の技法および図法の一つで、上空から斜めに見下ろしたような形式のもの。俯瞰図、パノラマ図。

とインターネット検索では概ねこのように表記されています。多少乱暴ですが、大枠でとらえるならば、全て地図の範囲といえるでしょう。

■特別展「絵図と航空写真から見る武蔵村山」

平成29年10月7日から12月10日の間、歴史民俗資料館では、常設展示室と通路を利用して、武蔵村山市の変遷を「絵図」や「地図」・「航空写真」・「パノラマ写真」等で紹介しました。概要は以下のとおりです。

1「村絵図にみる江戸時代の武蔵村山」

＊村山四ヶ村の絵図を模式図とともに紹介

2「明治・大正時代の武蔵村山」

＊5万分の一の地図を用いて紹介

3「航空写真から見る武蔵村山」

＊昭和22年（1947）米軍撮影航空写真

＊昭和30年（1955）町制施行記念航空写真

＊昭和45年（1970）市制施行記念航空写真

＊昭和61年（1986）市制施行15周年記念航空写真

＊平成22年（2010）市制施行40周年記念航空写真の

5枚の大形航空写真で武蔵村山市域全体の様子を紹介

4「航空写真から見る各地域」

※「中藤・神明地区」「本町・中央地区」「三ツ木・岸・中原地区」「学園・大南地区」「榎・三ツ藤・残堀地区」「伊奈平地区・米軍横田基地周辺」の6地区に武蔵村山市域を分けて、航空写真を拡大し、各地域を紹介

5「東京都水道局学園配水所からみた武蔵村山」

※水道局の許可を得て定点撮影を行っている新青梅街道から狭山丘陵周辺の様子を、写真を合成してパノラマ的に紹介

6 武蔵村山市谷津自治会膳椀資料と古い祭礼写真

※昭和27年以降の祭礼風景の写真とともに谷津自治会の膳椀資料を寄贈いただいたことから、当時を振り返る意味でコーナーを設けて展示

■展示のきっかけと狙い

平成23年の「武蔵村山市立歴史民俗資料館30周年」を記念して航空写真を展示した際、見学された方々から「ぜひ冊



特別展示風景（部分）



航空写真展示風景（部分）



拡大航空写真展示風景

子にまとめてほしい」との要望が多数ありました。さらに、小学校児童などの「宿題」に、「自分の住んでいる地域の成り立ち（村の時代や町の時代）を調べる」といった項目が多くなり、資料館の窓口で質問される回数が増えたことも、この展示を企画したきっかけです。

さらに、2020年（平成天皇の退位決定で平成32年でなくなったので西暦としました）、武蔵村山市は市政施行50周年を迎えます。市制施行後の50年を振り返ることとこの50年を写真等で記録することを目的に、平成29年度当初から、市民の皆様へ「古写真募集」をお願いしてきました。この展示が「古写真」収集のきっかけになることも期待していました。

鳥瞰図的な要素を持つ航空写真は一般的には見る機会が少なく、江戸時代の絵図に至ってはほとんど目にする資料ではない。これらの写真や絵図を出来る限り“ありのまま”で見せていただき、ご自分が住んでいる地域や我が家周辺の移り変わりに眼を向けていただき、そこから武蔵村山市の移り変わりを理解していただき、武蔵村山市の持つ地形的・地域の特徴に気が付いていただき、今後の武蔵村山市について考えるきっかけにしていいただければ、が一つの狙いです。谷津自治会資料についても、民俗資料と関連する祭の古い写真を組み合わせることによって、以前の谷津地区の様子を聞き取りできる機会が出来ればと考えました。

さらに、航空写真を含めて定期的な市内風景等を写真や画像で記録することが、文字記録だけではない立体的な地域保存に繋がることを知っていただき、その作業の継続を確立するとともに、市を挙げて資料及び作業の大切さを理解していただくことがもう一つの狙いです。

■見学された方々の様子

今までの展示においては中心となる資料があり、そのものを見に来る方がほとんどで、“すごいね”、“きれいだね”、“使い方が判らない”などの反応が多いように感じていたのですが、今回の展示は見学される方の感想の声が聞こえません。ほとんどの方がじっと航空写真や絵図に見入っていて、声を出さずにお帰りになる方が多いように感じました。夫婦で来られる方などは、5～10分程度間があつてから、“アー我が家はここだよ”、“へーこの辺は昔はこんなだったの!”、“家が建つようになったのは結構遅いんだ”などの反応を示されていました。

宿題をかかえた小学生がお母さんと来館された際は、“よかった、これで宿題できるね!”と喜んでおられました。聞いてみると、やはり「住んでいるところの昔の様子や昔話などを調べる」宿題とのことで、「特別展解説書」と「武蔵村山の昔語り」を購入されて行かれました。

「特別展解説書」につきましても、展示開催当初は購入される方が少なかったのですが、期間中ごろから少しずつ増えて行って、展示が終了した後も関わらず今でも購入される方が絶えません。なかには、“生徒たちの調べ学習用に”との意向で、まとまった部数を購入された高等学校の校長先生もおられるほどでした。鉄道マニアに支持された「武蔵村山の軽便鉄道」は別格として、このような反応は珍しいことです。展示資料のもつ「一度では気が付かなかった事柄に、二度三度と見ることによって気づく」資料的特異性が、影響しているのではないのでしょうか。

■まとめ

今回の特別展については、実際のところ期待したほどの大反響とはならなかったものの、地道な資料館啓蒙活動としてはある程度の成果があったと考えています。

欲をいえば、「若い市役所職員」に見ていただきたかった! パソコンの普及と嘱託職員の多用から、外に出ることの少なくなった職員にとって、航空写真などは地名なり場所なりを立地的に確認するいい機会であったと思います

「榎～残堀地区」拡大航空写真 -日産自動車村山工場の変遷-



昭和22年撮影



昭和45年撮影



平成22年撮影

今回の展示において、一番心を砕いたのは「加工しすぎないこと」でした。写真に色彩を入れることや写真上に地名を入れるなどの加工は、かえって航空写真などを見づらくし、見学される方が情報を正確に捉えられない可能性が生まれると判断したからです。

さらに航空写真の拡大についても、A3版程度に抑えました。拡大自体は家屋の位置や配置が判るくらいまでは可能でしたが、自分の家や知り合いの家を確認できた満足だけで終わってしまい、見学する方の市域若しくは地域全体への意識が薄くなることを恐れて、拡大は控えました。

博物館・資料館等において、史料保存が最優先であることは言うまでもありません。私個人としては、地域資料を公開し活用を図る必要性は否定しませんが、なるべくシンプルに活用すべきであると思っています。資料を活用する主体者は、見学者であり市民の方々であるべきです。“よかったね”で終わる展示は資料を活用したことにはならないのではないのでしょうか。

研究・展示における絵図の活用

羽村市郷土博物館 河村 康博

1 はじめに

平成27年度の特別展「開館30周年記念事業 玉川上水羽村堰～今に生きる先人の知恵と工夫～」は、当館における玉川上水、特に羽村堰に関する研究の成果を、多くの市民に還元することをひとつの目的として開催した。

本稿では、当館における絵図資料活用の具体的事例について、この特別展の内容に基づきつつ、その後の成果を含めて紹介したい。

2 展示企画の視点

(1) 羽村堰研究における着眼点

玉川上水については、開削当初の公式な記録はほとんど確認されていない。したがって、文献史料によって上水開削計画の内容を知ることは難しいとされ、例えば、羽村を取水地点に選定した理由といった基本的な事項さえ、研究の対象とされてこなかった。

一方、羽村堰に関しては、東京都水道歴史館の所蔵する『上水記』第二巻⁽¹⁾をはじめ、江戸中期から明治期にかけて作成された、いわゆる絵図資料が多数存在している⁽²⁾。これらの絵図を比較していくと、技術的内容の伝達を目的としたと思われるものが多いこと、また、作成の年代が異なっても、共通のルール(要素)をもっていることに気づく。

土木・建築などの技術に関する情報を他者と共有しようとする場合、設計図や管理図などの図面が重要な役割を担う。こ

うした図面は、その分野や現場に共通のルールをもって描かれており、これを知ることがその図面から情報を引き出す前提となる。

そこで、当館では、羽村堰についても絵図の共通ルールを確認することで、未知の情報にアプローチできるのではないかと考え、研究を進めてきた。

(2) 研究の成果

各絵図を比較検討していくと、そこには羽村堰の構成の変化と機能の維持についての情報が含まれている、ということがわかってきた。

一番詳細かつ正確と思われる『上水記』の第二巻を細かく調べると、羽村堰は「水制」と呼ばれる、牛枠・三角枠などの枠類や蛇籠など、本来治水のために用いられる工作物で構成されていたことがわかる。その機能を確認するため、土工学、地学、地理学、水文学などの知見を援用して検討すると、木と竹と石でできた羽村堰には、刻々と変化する多摩川の状況に合わせて、取水堰として求められる様々な機能を、同時並行的に実現するための工夫が備わっていたことが読み取れる。

さらに、読み取った内容を他の絵図に当てはめると、単に絵として見ていた時には理解できなかった事柄が、手に取るように把握できていくのである。

また、その上であらためて「御用留」など水番人の管理記録に目を通すと、当時の人々の息吹が感じられる、いきいきとし

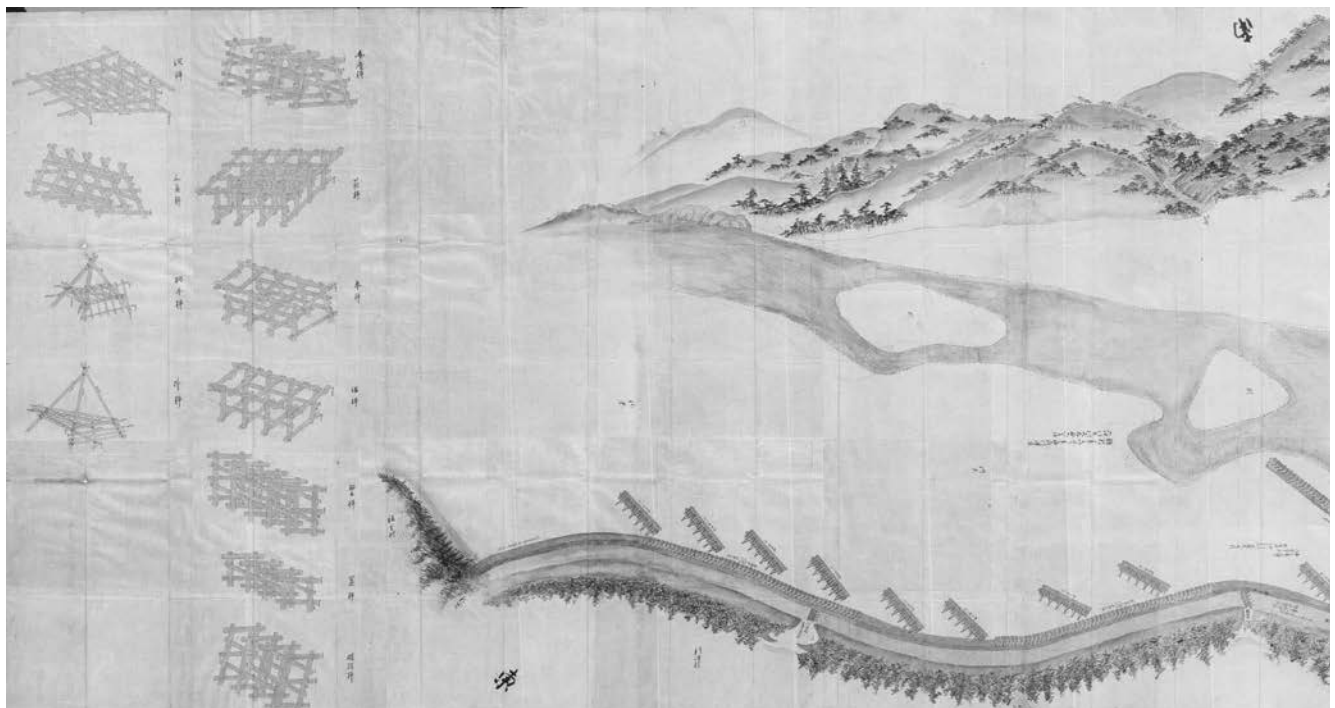


写真1 『上水記』第二巻 東京都水道歴史館所蔵

た技術記録であることが実感できる。

こうした研究の結果、各絵図からは、羽村堰について次のようなことが読み取れた。

- *平水時の効率的な取水と洪水時の水勢の拡散という相反する機能を両立させていること
 - *洪水に対する三段構えの安全装置が組み込まれていると考えられること
 - *よく知られた投渡(堰)は、その最終的な安全装置であること
 - *堰の構築技術の背景には、いわゆる信玄堤などとも共通する伝統的「治水」思想があること⁽³⁾
- ここに、現代の科学的知見を加えると、次のようなことも分かってくる。
- *武蔵野台地上の尾根筋に水路を開削するために、工事・管理の両面で最適の取水地点であると考えられること
 - *計画配水域へ永続的に十分な水を供給できる、標高と流下水量のバランスが取れた地点であること
 - *堰の基本形態は河川地形に合致した湾曲斜め堰であり、その合理性は工学的に検証されていること
 - *洪水後も砂礫堆が水門前に堆積しにくく、管理しやすい河川地形であること
 - *さまざまな要件に対して最適化が検討された取水地点の選定であると考えられること

(3) 展示企画へ

こうした成果を、広く市民に還元するための展示企画にあたっては、「すばらしいことだから展示する」というような館の側の自己満足のなものにならないよう、対象とする市民層をグループ핑し、満足度を高めることを意識して計画した。

具体的には、文字パネルばかりの「立体的学術論文」にしないため、そもそもの柱である絵図を視覚的に多用し、私たちのたどった「絵図から読み解く、未知の情報へのアプローチ」を来館者にも追体験してもらうことで、知的満足度を充足し、知識のお土産を持ち帰ってもらうことをコンセプトとした。

3 展示での表現

(1) メインの史料を展示しない

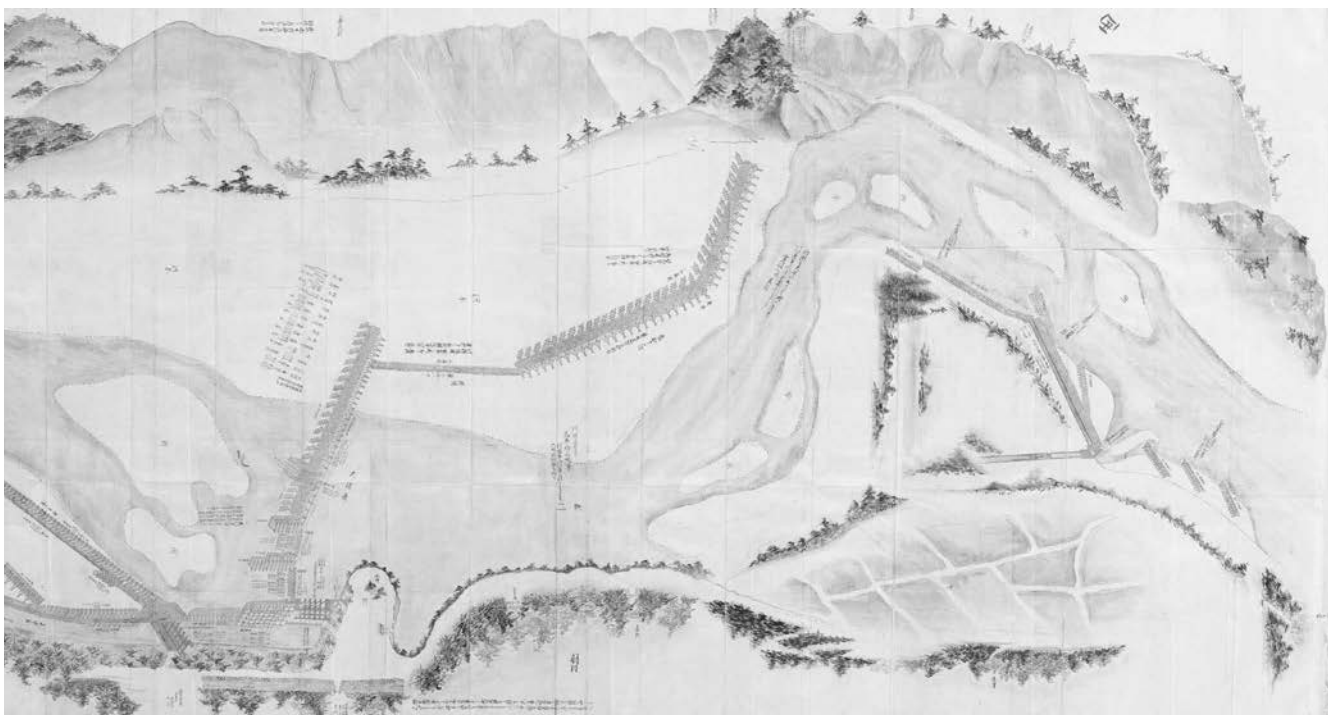
展示の基本構成としては、『上水記』第二巻の全体を示しつつ、各部分をそれぞれクローズアップして機能・役割を解説し、さらに、他の絵図との比較による羽村堰の変遷、古文書等によるそれらの傍証と管理の実態等、というように設定した。

実は、この企画の最大の課題は、中心的史料となる『上水記』第二巻の原資料は展示しない、という点にあった。

『上水記』第二巻は5mを超える大きなものであり、技術的にも長期の展示が難しいこと、また、同時期に所蔵元でも展示予定があったため、初期段階で、実物は出さない、というように腹をくくってしまっていたのである。

実際の展示では、二巻全体を3.5mに縮小した、それでも当館の企画展コーナーの一面をいっぱいにするサイズの写真パネルにして展示し、堰各部分の拡大も解像度ぎりぎりの大きさにしてパネル化するとともに、枠類が込み入ってわかりにくい部分は、パース的なイラストを起こすなど、「何がどうなっているのか」がわかることに留意した。

また、公的な展示は初めてとなる、長さが2mを超える個人蔵の絵図などにより、できるだけ絵図の魅力や迫力を体感していただけるように工夫した。



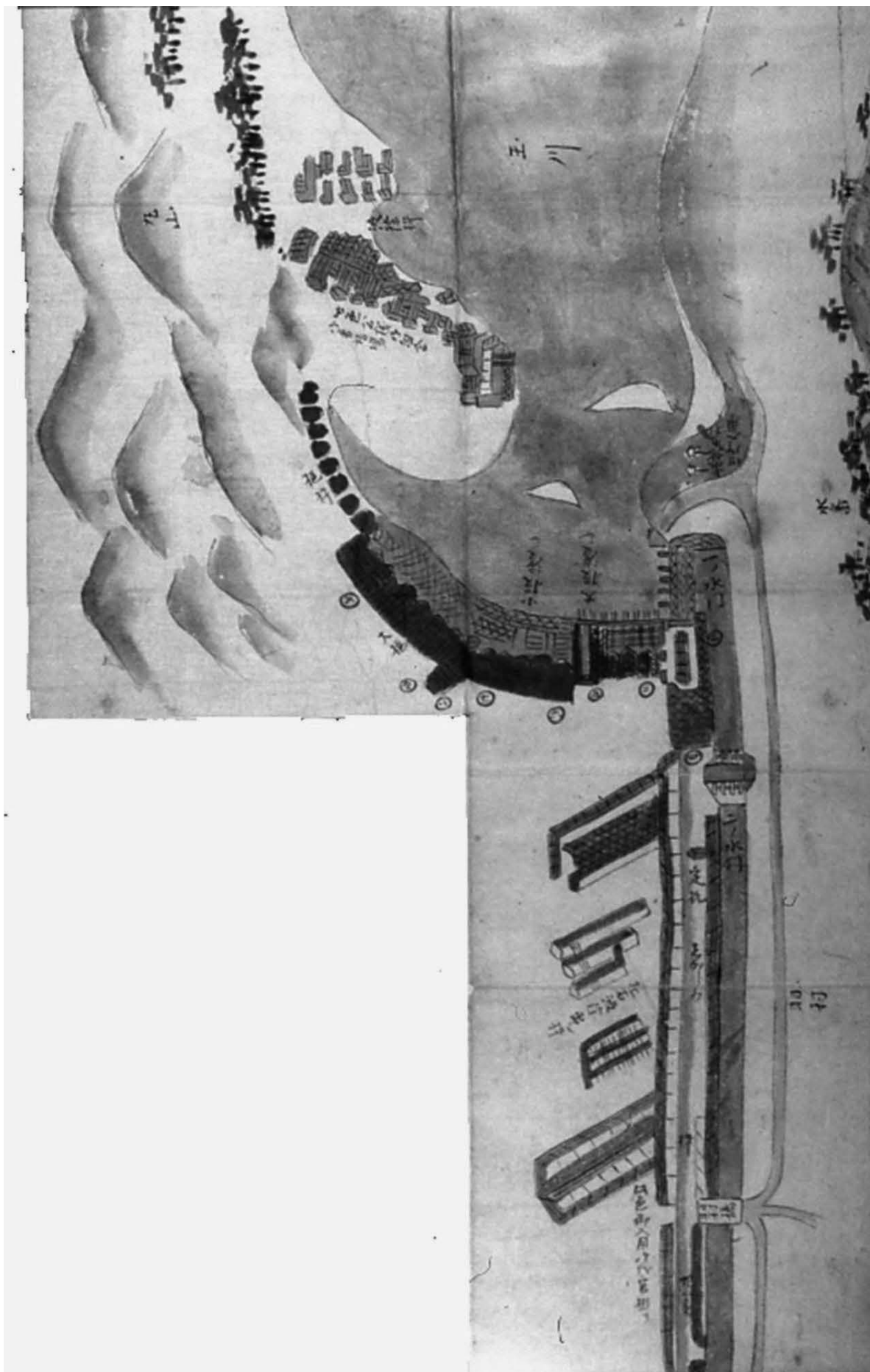


写真2 『玉川上水絵図』江戸時代 個人蔵

(2) 構成の縦軸と横軸

展示では、「部分のクローズアップ」による機能解説を横軸に、「部分の時間的変遷」を縦軸にとって羽村堰を全体的かつ立体的に把握してもらうことも意図した。このために、明治初期の写真なども多用した。

特に水門部分については、絵図を読み解くことによって、写真からも新たな情報が得られる例として、よく知られた写真に、実は通船用の通路が写っていたことが、絵図との対比で判明したケースを展示・解説し、史料を新鮮な目で、多角的に捉えることの重要性などもあわせて示した。

(3) 二次元の絵図から三次元動態模型へ

写真・文書・動画など二次元的表現ではいまひとつ理解がされにくい、投渡の構造と機能について、『上水記』を基に実際に水を流して堰を払う「流水模型」を製作し、実演を通して立体的な理解を促した。



写真3 投渡実演用流水模型

4おわりに

羽村堰の機能や特性を絵図から確認する中で感じられるのは、作成した人々の自然に対する客観性と、それにもとづく評価・選別の視線であり、そこには現在の技術とその思想に通じるものがある。

本稿では、絵図を技術の記録としてあらためて見直してみた場合に、これまでとは違った情報が得られることがあるという事例として、当館の取り組みを紹介した。

※平成27年度特別展「開館30周年記念事業 玉川上水羽村堰～今に生きる先人の知恵と工夫～」

開催期間 平成27年8月15日(土)～12月23日(水・祝)

※本号の特集テーマである「地図」については、「地表の諸物体・現象を一定の約束に基づいて縮尺し、記号・文字を用いて平面上に表現した図」(『広辞苑』第四版)とされている。本稿では、近代的な測量技術に基づかない、日本の伝統的な描画図法によって描かれた「地図」を「絵図」と表記した。

註

- (1) 石野遠江守広通編 『上水記』寛政三年(1791) 東京都水道歴史館所蔵
- (2) 絵図の詳細については、次の図録を参照されたい
羽村市郷土博物館『特別展 玉川上水羽村堰～今に生きる先人の知恵と工夫』平成27年(2015)
- (3) この部分は、いわゆる「甲州流」との関連を指摘するものではない。治水の主な担い手は河川周辺地域の農民であり、各河川の特徴を踏まえた経験知は保有していても、「流儀」といえるほどに練られた技術体系や、「流派」と呼ぶべき専門組織は存在しなかったと考えられる。大規模工事等では専門的技術を持った人々が指導的立場で関与したと考えられるが、現在のところ流派と呼ぶべき組織体系は確認できていない。

展示における地図・絵図の活用

「災害と多摩」展を事例に

パルテノン多摩歴史ミュージアム 橋場 万里子

はじめに

多摩市は、市域の6割が多摩ニュータウン開発による大造成を経た場所である。市内を流れる多摩川の支流・大栗川・乞田川は工事により、大きく流路が変化した。開発による地形変化は、どのような地域でも経験することではあるが、多摩ニュータウンの場合はそれが広域でおこなわれたため、開発前の歴史と地理的な情報を結び付けることが、ほかの地域に比べて難しいように思われる。

しかし、例えば、開発前とほぼ同じ場所に戻された石仏や、開発を免れ現存する関東大震災の土砂崩れの現場など、多摩ニュータウン内であっても、開発前の地形を確認することは不可能ではない。

多摩ニュータウンにおいて開発前の歴史・地理学的なアプローチをおこなうことは可能である。しかし、そのためには、他地域よりもいっそう、地形的な確認の手続き、つまり「地形的な史料批判」を経ることが必須である。その助けとなるのが、現存する古い地図や絵図である。

2017年3月3日より7月23日にかけてパルテノン多摩歴史ミュージアムにて実施した特別展「災害と多摩～多摩丘陵の自然災害と多摩ニュータウン開発～」では、多摩市と多摩ニュータウン地域を対象に、過去の災害の史料を展示した。災害は地形と密接にかかわっているため、災害史を振り返るには、その当時の地形も併せて振り返らなくてはならない。そのため、本展示では、従来以上に、地図と絵図を多く用いる展示となった。本稿では、「災害と多摩」展を通しておこなった地図と絵図の活用例についてご紹介したい。

I. 災害と多摩展の概要

「災害と多摩」展は、かつて多摩でおこった災害を取り上げた展示である。展示構成は以下の通りであった。

第1会場 多摩の災害

- 1章 開発前の地形と災害Ⅰ 地震と土砂災害
- 2章 開発前の地形と災害Ⅱ 水害とその他の災害
- 3章 さまざまな防災
- 4章 多摩ニュータウン開発と地形改変

第2会場 東日本大震災と多摩の人々

このうち、開発前の災害を扱ったのが1・2章で、3章では防災の工夫を、4章では多摩ニュータウン開発による地形の変化と災害の関係を扱った。

II. 災害と多摩展での絵図・地図の活用

ここでは、各章にて扱った地図・絵図類の展示事例を紹介してみたい。

1. 被害の可視化～関東大震災の被害図について～

関東大震災では、東京市内の被害が大きく、さまざまな種類の被害状況を示す地図が作成された。多摩市教育委員会には、火元・飛び火・火の流れなどを示した「大正十二年九月東京大火災動態略図」や、「関東震災要図」（絵葉書）、「横浜付近火災地域並警備救護避難者集合図」（絵葉書）など、関東大震災関連の東京市内の地図や絵葉書が所蔵されていた。そこで、これらの資料の一部を1章の展示で紹介した。

一方、多摩地域では大きな被害があったものの、人的被害は東京市内より軽かったこともあり、東京市内に比して史料は少ない。吉田初三郎の「関東震災全地域鳥瞰図絵」は取材をもとに描かれたもので、多摩地域の一部も描かれている。しかし、被害の詳細まではわからない。



展示風景

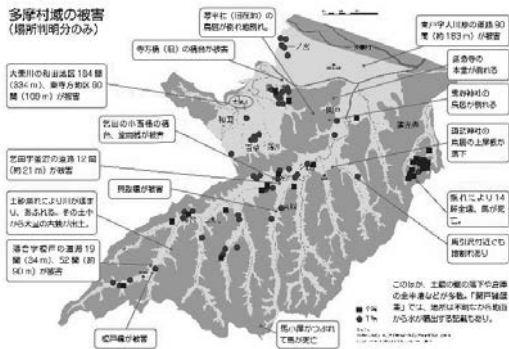
そこで、本展示にあたり、多摩市域（当時は多摩村）の被害状況についての作図をおこなうことにした。多摩市域の関東大震災における被害については、『多摩市史 通史編Ⅱ』で作成された地図がある。全壊・半壊の被害状況の申告書である「罹災申告書」をもとに、そのポイントを白地図に落として作図されたものである。そのため、地形との関連性や罹災申告書に記された以外の被害状況は特に落とし込まれてはいない。

そこで、本展での作図にあたっては、地形と被害地点の関係を可視化するとともに、現段階で判明している被害の全体像を示すことを目指した。2014年実施の企画展「谷戸のわき水とふしぎな生き物」展で作成された丘と谷が色分けされた図を下に敷き、加えて、関東大震災当時の状況を描いた手記や、聞き取り調査で判明した地名、さらに橋梁や道路の修復報告などに記載のあった被災箇所を追加した。

その結果、全・半壊箇所は、建物のある集落部分に集中していることが明確になった。さらに、集落のある谷戸だけではなく、丘陵上の寺社にも被害が生じていたことも分かった。従来より詳しい被害状況とともに、丘陵地のどの部分で被害があったかを示すことができたのはひとつの成果といえるだろう。

しかし、今回作成した地図は、あくまで現在残されている記録から作成したものであり、決して網羅的なものではない。

地図に示されている被害状況についても、建造物の有無や強度で変わり、揺れの大きさや地盤の強弱だけを反映しているわけでもない。そのため、パネルのタイトル横に言葉を加え、情報が限定的であることを示し、見る側にも注意を促すようにした。



多摩村の関東大震災被害地図パネル (場所判明分のみ)

2.水害の記録として～洪水にかかわる絵図類～

災害に関する史料の中では、水害に関する絵図類がもっとも豊富であった。多摩市域は多摩川に接している上、大栗川・乞田川が市域を通っており、かつては複雑に蛇行する川底の浅い河川でもあった。そのため水害が頻繁に起こり、多くの絵図や記録類が残されたのである。ここでは、おもに2章・3章の展示で扱った絵図の一部を紹介する。

①水害による権利争い

～水害による村の位置変動と、権利争いを示した絵図～

青柳村(現・国立市)はかつて多摩市の一ノ宮・関戸近くに存在したとされるが、万治2年(1659)の多摩川の洪水により流失したという。村は北岸に移転したものの多摩川への権利を残していたため、延宝9年(1681)に青柳村と関戸村の間で争論があった。その際につくられた絵図「青柳村関戸村川境図」(多摩市教育委員会蔵)は現存しており、本展示にて展示した。

2014年～2015年にかけておこなわれた別担当者による企画展「絵図で見る多摩の村々」では、この絵図の現地比定をおこない、航空斜写真に当該地区をマーキングしていた。本展示ではこのマーキングされた写真を活用し、絵図と現在の場所を比較できるようにした。



青柳村関戸村川境図の展示風景

②水害の被害状況が分かる絵図

水害では、堤防が壊れ、新たな流路(新川)が登場し、村の境界線が不明確になることがある。こうしたことを語る絵図も多い。たとえば、以下の写真の享保10年(1725)「多摩川新川出来二付御田地請川原之図」(多摩市教育委員会蔵)には、享保8年(1723)の洪水でできた新たな流路(新川)と川欠けになった場所が示されている。

江戸時代最大の洪水と言われる寛保2年(1742)の洪水に関しても、少なくとも5点の絵図が残されており、新川の位置と、堤防が切れた箇所が示される。

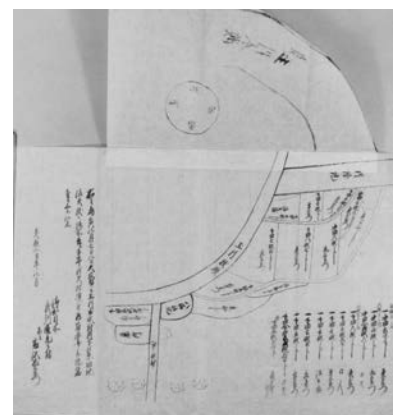
洪水の際には、地境が不明確になることが多く、地境を決めなおした絵図や、地境を再確認するための目印が描かれた絵図なども作成されている。本展示ではこれらの史料を、水害で生じるさまざまな影響の記録として展示した。



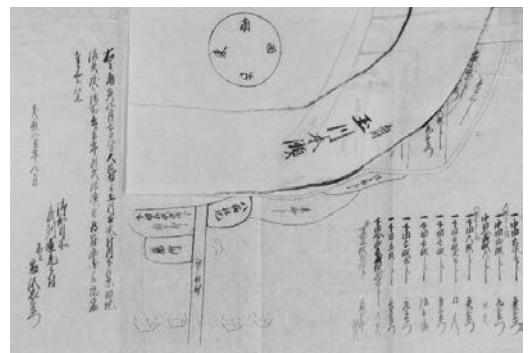
多摩川新川出来二付御田地請川原之図 (多摩市教育委員会蔵)

③洪水前と後の違いを記録した絵図

国文学研究資料館富沢家文書には、多摩川の洪水による流路の変化を記録し、上下に紙を重ねて洪水前と洪水後を見比べられる絵図が数点残されている。これらの絵図により、どのように川が浸食したのかがかなり具体的に判明する。このような記録は、洪水の様子を具体的に把握する上で重要だろう。



(上:洪水前、下:洪水後) 多摩川洪水被害の図 慶応2年8月 人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵

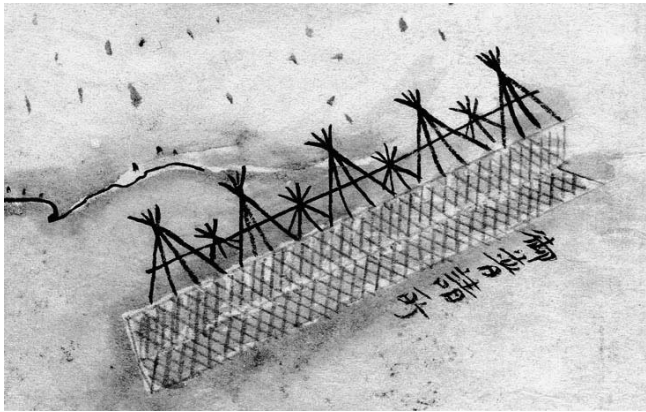


④水防設備に関する絵図など

3章では防災の工夫について扱い、そのなかで、水防施設が描かれている絵図を紹介した。

水防の方法については、文字史料にも出てくるものの、実際にそれらがどのような姿で設置されていたのかに関しては、絵図のほうが情報量も多い。絵図のなかには、蛇籠や牛柵(川庫)などの水防施設が描かれたものもある。水防施設の呼称は地域によって異なることもあり、その姿を視覚的に確認できる絵図情報は重要である。

当館所蔵「玉川鮎漁鵜飼図」(明治16年)の川岸付近には、写真のような図像が描かれていた。多摩市域の史料では、川倉(川庫)と呼ばれる牛柵の一種を設置することが多く、展示ではこの図も川倉の図像の可能性を紹介した。



川倉か(玉川鮎漁鵜飼図 明治16年/当館所蔵)

4.地形変化を示す絵図・地図

冒頭に記したように、多摩ニュータウン区域の最大の課題は大規模な地形変化である。そこで、4章では多摩ニュータウン開発による地形変化にかかわる資料を扱った。

多摩市域が経験した大規模な地形変化は、①大栗川・乞田川の河川改修と②多摩ニュータウン開発である。①では、蛇行していた河川の流路が軒並み直線化した。②では土地利用形態や高低差も大きく変化している。

①戦前の流路変更～航空写真の併用～

大栗川は、戦前と戦後にそれぞれ河川改修をおこなっている。戦前におこなわれたのは昭和13年(1938)より昭和22年(1947)頃まで実施された下流部(多摩村連光寺・関戸・東寺方区域)の改修である。度重なる水害のために大栗川河川改修の話が持ち上がり、多摩村の一部負担のもと、東京府が土地買収をおこない、直線的な流路に変更した。東京都公文書館には、この件に関する昭和13年の申請書や設計図などの史料が残されており、その計画と実施内容を知ることができる。また、昭和19年(1944)からは国土地理院所蔵の空中写真が残っており、空中写真との照合が可能になる。

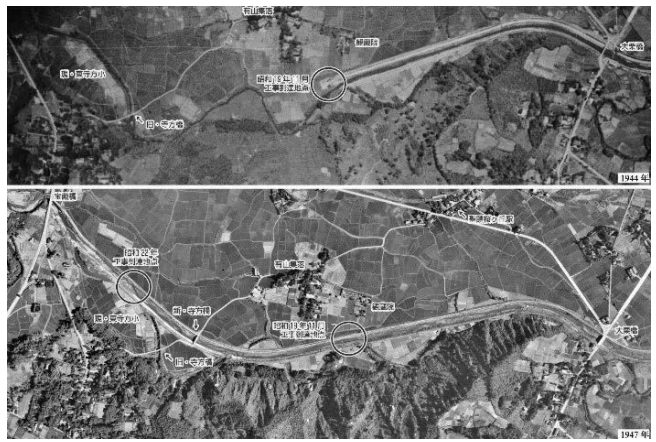
国土地理院の空中写真をみると、昭和19年(上)と昭和22年(下)の工事地点の変化は明らかで、19年から22年の間に一気に河川改修がすすめられたことがわかる。

これらの写真では、旧流路の位置も確認することができる。こうした旧流路の位置は、絵図や地図には描かれなかったり、

描かれていても読み取りにくいことがある。航空写真を併用することで、地図・絵図に描かれなかった地形情報もつかむことが可能になる。

江戸時代・明治時代に頻繁に起こった大栗川の洪水は、河川改修前の蛇行する流路でおこったものである。現在では、直線化による急な増水という新たなリスクはあるものの洪水の頻度は減った。同じ地域の洪水について語る場合でも、河川の形状や洪水を起こすメカニズムは変化しているのである。河川改修以前の史料を扱う際には、この河川の変化を押さえておくことが必須である。

工事期の空中写真は旧流路と現流路の位置関係を知ることができる大変有用な資料で、地形変化の基準資料といえるかもしれない。



国土地理院データベースより空中写真 昭和19年(上) 昭和22年(下)

②多摩ニュータウン開発時の流路変更～工事記録の併用～

戦前の大栗川の工事は昭和22～23年頃でいったん落ち着き、その後昭和40年代まで流路の改修はおこなわれていない。

動きがあったのは、多摩ニュータウン開発の計画決定後の昭和42年(1967)頃からである。この過程については、京浜河川事務所の史料が国立公文書館に所蔵されており、たどることができる。

河川改修は、昭和44年(1969)より15年以上継続され、多摩ニュータウン開発中に河川の流路が順次変化した。どの部分がいつ改修されたか、という河川改修の時期については、工事記録を併用すれば照合可能である。

③開発中の一時建造物「防災調整池」

多摩ニュータウン開発中においては、河川改修前に住宅開発が行われざるを得ない場所があった。そこで土砂の流入防止や水量調整のため、防災調整池が建造された。この防災調整池は開発時の一時的なもので、現在は残っていない。しかし、開発途中に一時的に作られた建造物にも意味や位置づけがある。

ひとつはその時期のメルクマールとしての位置づけである。年代不明の写真・航空写真・地図などが出てきた場合、一時的建造物の存在から、ある程度年代の推定が可能となる場合がある。そのような手掛かりとしても一時的建造物の把握は重

要である。

もうひとつは、一時期であっても存在していたものは、その後の土地の形や使われ方などに何らかの影響を及ぼす場合があるということである。多摩ニュータウン開発の場合は詳細な工事記録が書籍化されており、どの地域に一時的建造物が作られたのか、という情報もたどりやすい。多摩ニュータウンに限らず、歴史をさかのぼる上で、過去の土地への人工改変の記録は、地形への史料批判をおこなうために欠かせない。意識的に記録化しておくことが重要であろう。

④新たに作り上げられた地形の確認～盛土マップ～

多摩ニュータウンでは、盛土・切土による大造成が大規模に行われ、土地の高低差は大きく変化した。

盛土については東京都による盛土マップが東京都内全域分作られており、ホームページでも公開されている。本展示でもこの盛土マップを展示した。

一般的に、盛土に対しては「土が盛られている」という事実には漠然とした不安を持つ人が多い。多摩ニュータウンのような大規模造成の盛土はそれなりの安全策が施されており、多摩ニュータウン開発途中に行われた報告書（多摩ニュータウン造成施設等震災予防対策に関する調査研究報告書）でも、「不確定な要素の残ることの避けられないのが土構造物のつねである」としながらも、「余程の悪条件が重ならない限り」「他に先がけて致命的な破壊状態を呈するおそれの少ないことが確かめられた」としている。

盛土マップだけの単独展示では、情報不足と思われたので、展示にあたっては、上記の報告書を引用したパネルを作り、並置した。一方で、絶対的な安全を保障するものではないので、「絶対に安全な場所というものはありません。その土地の成り立ちを知り、日常的に周辺を観察して異変に気付くことが重要」という言葉も付け加えることとした。

盛土に限らず、災害や安全に関する情報は、隠さず、煽りすぎず、安心させすぎず、というバランスを取りながらの展示が必要と感じている。こうしたテーマの地図については、よく情報を補完しながら展示をおこなう必要があるのだろう。

土地の高低差の変化の把握は、歴史的な探索を進めるうえでも重要である。埼玉大学の谷謙二研究室による「今昔マップ」「Web地形断面図メーカー」などは土地の変化を知る大変便利なツールであり、これらの併用も有効だろう。

Ⅲ. 絵図・地図展示の意義と留意点

以上、雑駁ながら絵図・地図を用いた展示事例の紹介をおこなった。これらの絵図・地図を展示したことの意義や留意点をここで述べておきたい。

①歴史資料を読み解くための基礎資料としての地図

地図・絵図は、その土地の変化をするための基礎となる史料である。特に地域博物館では、展示で扱っている内容が「どの場所」であったかは、特に問われやすい事項であると思われる。

多摩市のように地形変化が大きい場所ではなおさら、各年

代の地形を確認したうえで、史料を読み解いていく必要がある。それらを可能とするのが絵図・地図であろう。本展示でこれらの基礎資料を展示し、図録にまとめることができたのは、一定の成果であると考えている。

②地図・絵図で示せること・示せないこと

しかし、地図・絵図にも限界がある。まず、情報は網羅的ではなく限定的である。このことは来館者にも理解していただく必要があるだろう。

特に災害に関しては、「被害があった場所=危険」といった感想を抱かれてしまうことがある。限定的な情報にもかかわらずそのような印象が先行してしまうことには危惧を覚える。災害の被害には、根本的な地質のほかにも微地形や建物の強度や、社会状況などもかかわっており、危険性は一概に言えない部分も多い。また、微地形は変化する。聞き取り調査でも、道路工事により道路の位置が上がったため、敷地内に水が流れ込むようになったなど、細かな地形改変によって、新たな災害が生じた事例などもあった。

災害は地質など土地の根本的な特性によって起こるが、その他のさまざまな要件も絡んでくる。その特性を正しくつかむためには、より高度な専門的な訓練と、細やかな情報収集が必要である。限定的な情報源である絵図や地図を、いかに誤解を与えずに、リテラシーを持ちつつ見ていただけるようにするかが重要であると感じる。

また、絵図・地図には個人情報なども含まれる。それをどの程度まで出してよいかのバランスも難しいところであろう。

災害についての情報へのアクセスはオープンにすべきであるが、展示で不特定多数に見られる場に出す場合に、どこまで出せるか、どのような影響があるかという点も併せて考え、配慮していくことが必要である。

③ほかの資料の複合的アプローチ

限定的な史料である絵図・地図を扱うには、それを補完するものとして、文字史料、工事記録や航空写真、インターネットの便利なツールなどがある。これらを組み合わせることにより、より精度の高い情報を提示することができるようになる。絵図・地図は、積極的に他種類の資料を併用し、複合的なアプローチをおこなってこそ、生きてくる史料と考えられる。

おわりに

以上、いろいろな課題や留意点はあるものの、本展示では、可能な範囲で絵図・地図の公開を進め、多摩ニュータウンの地形変化に必要な資料も多少は整理することができた。今後はさらにそれらの情報を蓄積・整理し、変貌の多い地域における「地形的な史料批判」を容易にすることで、大造成地における造成前後の歴史の連続性を保つようになりたいと考えている。

展覧会における地図パネルの役割と製作について

江戸東京たてもの園 真下 祥幸

■はじめに

歴史系博物館の展示の主体が、その当時に作られた資料であることはいうまでもない。文献や絵画、生活用品に至るまで、さまざまな資料があるが、なかでも地域の情報を伝えやすい絵図や地図は、重要な展示資料のひとつといえるだろう。

絵図の形態も様ではなく、たとえば武蔵国といった一国を単位として作成された国絵図、あるいは多摩郡というような郡を単位として郡内の村などを描き込んだ郡絵図がある。加えて、村絵図のように村内の屋敷・田畑をはじめ、村共有の建造物などがわかるものもある。水論や境論など近隣村々との争いの際に作成されることが多かった裁許絵図は、権利関係の情報が豊富なため、地域を語る展覧会ではよく使用されている。また、江戸の都市部を語る際には、観光案内を目的とした名所図や切絵図などが利用されている。

これらの地絵図は、制作時の状況やその背景を示すものとしては有益だが、現代の地図のように、統一的な実測基準もなく、縮尺などもまちまちに作成されたものであるため、正確な情報を伝えてくれるものではない。たとえば、同じ村を描いた村絵図でも、制作者によって村落の規模や形が異なったものになってしまうのである。

したがって、現在の地図表記に慣れている来園者に、江戸時代の絵図を理解してもらうことは、相当な努力を要することになるのである。そこで補助資料として、地形の概要や分布状況などを示すために必要となるのが地図パネルである。

本稿では、武蔵野の新田開発を取り上げた展覧会で、新田の概況を示すために制作した地図パネルについて、その手順を具体的に述べていきたい。

■展覧会の概要

江戸東京たてもの園では、平成29年2月7日より5月7日まで、「川崎平右衛門—武蔵野新田開発の立役者—」展を開催した。その際、武蔵野新田の概要を示すために、地図パネル「武蔵国4郡の村落分布一覧図」を制作した。

本展覧会は、江戸時代中期に武蔵野新田の安定に尽力した川崎平右衛門という人物に焦点を絞り、その事績を検証するというものである。まず、簡単に武蔵野新田の開発と平右衛門との関係について触れておく。武蔵野新田は、主に江戸時代中期の享保年間から元文年間にかけて、開発された新田であり、幕府の享保の改革における財政増収策の一環として実施された。この開発の責任者として抜擢されたのが町奉行の大岡忠相である。大岡は、町奉行を兼務したまま「関東地方御用」という役職を拝命し、江戸周辺の開発にあたった。当時の武蔵野一帯は水利が悪く、人が生活しづらい環境であったため、村落共同体などが共同で利用する入会地などが多かったほか、未開拓の土地も非常に多くあったとされる。大岡は、配下の代官らに武蔵野の開発を行なわせたものの、開墾後の経営を安

定させるには至らず、荒廃化も見られるようになった。

そこで元文4(1739)年に、当時、多摩郡押立村(現府中市)の名主であった川崎平右衛門を「新田世話役」として登用し、新田経営にあたらせたのである。

平右衛門は就任早々に新田を巡検し、武蔵野新田の実態を調べたとされる。その後、関野新田(現小金井市)と高倉新田(現埼玉県鶴ヶ島市)の2箇所に陣屋を設置し、陣屋間や江戸とを行き来しながら新田経営の安定化を進めた。

これが平右衛門と武蔵野新田の関係である。



展示室概況写真

展示にあたっては、資料が武蔵野新田開発期の古文書に偏ってしまうため、享保期からはだいぶ後のものになるが、安政3年(1856)製作の、彩色がなされた「武蔵国全図」を展示し、ビジュアル化をはかった。この「武蔵国全図」には、武蔵国、すなわち現在の東京都と埼玉県にあった村々が記載され、安政段階で新田村として扱われていた村々には●が付されている。武蔵国では、武蔵野新田開発以降、大規模な新田開発は行なわれなかったため、この一次資料を展示することにより、武蔵野新田として開発された村々がどのような地域に分布していたかをおおむね示すことができた。

しかし、「武蔵国全図」は武蔵国全体の村々を1m強ほどの範囲に記したもので、また縮尺・方位、村などの位置関係が正確ではないため、実際の距離感などを伝えることは難しい。そこで採用したのが、簡易測量で作成された近代の迅速測図の上に、武蔵野新田の開発状況の情報を『新編武蔵風土記稿』(後述)という地誌から抽出して載せるという方法である。来園者にとって情報過多にならず、わかりやすく伝えるにはどうすべきか、どの程度の情報を示すのかを検討し、次の3点に絞ることとした。

- ①江戸時代中期に、武蔵国多摩郡を中心として入間郡・新座郡・高麗郡の4郡にわたって広域に開発された「武蔵野新田」の全体像を、一目でわかるようにする。

- ②平右衛門が、武蔵野新田の再建とその後の支配の拠点とした2つの陣屋の位置と新田の位置関係を確認する。
- ③武蔵野新田の範囲を明らかにし、開発以前より成立していた古村、新しく立村した村立新田、古村が開発を行なって新たに新田を加えた持添新田とを区別する。

以上を反映させたものが、「武蔵国4郡の村落分布一覧図」という地図パネルであった。

■新田情報の抽出

まず、はじめに行なったのがパネル化する地図の作成であり、武蔵野新田とされる村々の比定から始めた。詳細は後述するが、武蔵野新田の開発には遅速があり、開発後に行なわれた検地の時期も異なることから、新田開発期に作成された古文書などには「武蔵野新田八十二か村」という文字はあるものの、正確に何か村あるのか、カウントすることはできない。

この82という数については、時代が下った天保元(1830)年に上程された『新編武蔵風土記稿』巻四十の項に、享保年間新墾の事を命ぜられしかば、遠近となくこれを望める農民等、公に願ひて開墾を促せしに、日をつみ年を累ねその功遂に成て、新田八十二村を開けり、その区別は多摩郡に属するもの四十村、新座郡に属するもの四村、入間郡に属するもの十九村、高麗郡に属する者十九村なり、

との記載が見られる。このことから、天保初年には、武蔵野新田は82か村として捉えられていたことがわかる。しかし、この数は、入植者が居を構え、村役人や寺院が新たに置かれた独立した新田村、すなわち村立新田といわれる村の数である。

一方で、この『新編武蔵風土記稿』には、村立新田以外の新田の記載も確認できる。それは、新田開発以前からあった古村が、周辺の地を切り拓き、そのまま古村の高に組み込んだとされる新田である。このような場合、村名の記載は「○○新田」とはされず、「○○村附持添新田」となっている。このことから武蔵野新田とは、村立新田と持添新田とを合わせたものと考えることができる。

ところが、持添新田の記載は享保以前に始まり、明和年間(1764—1772)まで見られた。そのため、武蔵野新田開発期の持添新田を確定するには、新田検地が行なわれた年次を調べる必要が生じた。また、先述した村立新田についても、「○○新田」と記載された村のすべてが、享保期に開墾された武蔵野新田であったわけではないため、より詳細な確認が必要となった。

加えて、地図には、持添新田を持たない古村も明示して、2つの形態の異なる新田と比較をすることを構想していたため、武蔵野新田の開発が進められた多摩郡を含む4郡の村すべてを対象に、情報を集めることとした。

その作業としては、まず武蔵野新田の範囲とされる多摩・新座・入間・高麗の4郡の村々一村ごとに、郡名・領・村名・本田検地年と検地奉行名をデータベース化した。さらに、村名に「附持添新田」と記載されている場合には、附けたりがなされる持添新田のほうの検地年と検地奉行名もデータベース化した。なお、享保期の武蔵野新田開発では、私領の持添新

田であっても、新たに開墾された新田分については幕府領とする規定されていたので、データベース化にあたっては支配代官も入力し、それが幕府代官であるか否か(領主の私的新田開発)の確認を行なった。

これらのデータを1レコードにまとめ、村立新田と持添新田を持つ古村、おのおのに検地年順に並び替え(ソート)、武蔵野新田に該当する村を抽出した。このときに問題となるのは、いつからいつまでに開かれた村が武蔵野新田なのか、ということである。

新田種別	領	村名	村名(別表参照)	検地年(別表)	領	領主(別表)	領主	領主	領主	領主	領主	備考
新田種別	幕府領	持添新田										村立新田(個人私領)の 持添新田(幕府領)との 区別が不明
新田種別	幕府領	持添新田	持添新田	1781	持添新田	持添新田	持添新田	持添新田	持添新田	持添新田	持添新田	持添新田

集計データ1

郡名	領	村名	村名(別表参照)	検地年(別表)	領	領主(別表)	領主	領主	領主	領主	備考
多摩郡	幕府領	持添新田									
新座郡	幕府領	持添新田									
入間郡	幕府領	持添新田									
高麗郡	幕府領	持添新田									

集計データ2

これについては、上限は武蔵野の村々に開発地の割渡しが行なわれた享保8(1723)年が適当と考えられる。では、下限についてはどうか。狭義では、武蔵野新田開発を主導した大岡忠相が「地方御用」を辞任した延享2(1745)年までが適当であろう。しかし、ここでは、川崎平右衛門が勘定所の支配勘定に就任して(武士身分に身乗り)、武蔵野新田の役儀から離れた後に、彼の新田政策を引き継いだ伊奈氏が実施した宝暦年間(1751—1764)の検地までと少し幅を広く取った。

データ化の基礎史料は、もっぱら時間的制約から『新編武蔵風土記稿』のみとなった。それゆえ、持添新田の記載がありながらも検地年や検地奉行などが記されていない村については、享保期に開発されたと特定できないため、対象外とした。この点は、今後、地域に残された古文書類を丁寧に調査し、補い特定していく必要がある。

■基本地図

次に、このようにして確定した村を、地図上に落とす作業となる。ここで利用したのが「迅速測図」である。

明治前期に作成された本図は、地形や表記などの精度は現在の地図に比べて劣るとされるが、近世の絵図に比べれば格段に使いやすい。それは、縮尺や方位などの問題に限らない。近世の村落名や字名が、そのまま今の町名につながっている地域は少なく、現行の地名から村落名を落とすことが難しくなってきた昨今、明治13年(1880)から15年にかけて明治政府によって作成された「迅速測図」の情報は有益である。明治10年代は、農村部ではまだ近世村落の情報が残っている時期で、その地名特定には最も適していると思われる。

「迅速測図」については、農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)のホームページにある「歴史的農業環境閲覧システム」の頁から閲覧できる「関東平野迅速測図」(<http://habs.dc.affrc.go.jp/>)を下図として使用することとした。必要な範囲の画像をコピーし、ドローソフト上に下地のレイヤーを作り、そこに合成して貼り付けることで、武蔵野新田の範囲の下図を作成した。

次いで、『新編武蔵風土記稿』から抽出した村立新田・持添新田を持つ古村・持たない古村、それぞれを地図上に落とす作業となる。

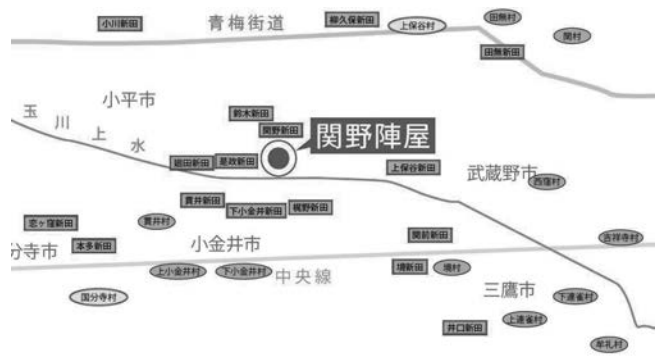
「関東平野迅速測図」に記されている村名を一村ずつ探し出し、新たなレイヤー上に村名を記していった。その際、武蔵野新田が一目でわかるように色分けをした。展示会の趣旨からして最も重視すべき村立新田は、村名を四角で囲み、背景をピンク色とした。持添新田を持つ古村は、二重楕円で囲み、背景を黄色とした。最後に、新田の開発をしなかった古村だが、これは楕円で囲み、背景を水色とした。

その際、文字を置く場所は村落の居住地が固まっている部分とし、屋敷が散在している村の場合は、下図の村名の上に載せるようにした。

もう一点、地図に落とすべき重要な情報が、陣屋の位置であった。川崎平右衛門は武蔵野新田を、南武蔵野新田と北武蔵野新田に分け、おのおのの中心に陣屋を設置した。南武蔵野新田に置かれたのが、関野陣屋(現小金井市)地内の関野陣屋であり、北武蔵野新田は高倉新田地内(現埼玉県鶴ヶ島市)の三角原陣屋である。陣屋の位置は、すでに各自治体により案内板等が立てられていることもあって、容易に地図上に落とすことができた。

平右衛門は、2つの陣屋と大岡忠相らのいる江戸とを行き来しており、新田運営を円滑化するため、各陣屋には名主時代からの知古である人物を手代として置いた。そして自身は、江戸に近い関野陣屋のほうに居住し、そこを拠点として三角原陣屋と江戸との間を往復していたとされる。両陣屋間は、直線距離にして約27kmほど離れていた。

地図パネル「武蔵国4郡の村落分布一覧図」の制作は、武蔵野新田の分布を示すことが主目的であるので、この目的から必要な情報は以上ですべてである。しかし、これだけでは来園者には非常に不案内な図となるため、以下の3点の補助的情報も地図に入れ込むこととした。



「武蔵国4郡の村落分布一覧図」(部分)

一点目として、本図に掲載される情報が村落名だけでは距離感が掴みにくいことから、各陣屋を中心に10km・15km・20kmの同心円を付すことにより、陣屋間および陣屋と新田村々との距離を把握しやすいようにした。

二点目としては、現在の行政区分に慣れている来園者に参考となるように、現在の市町村名を薄字で付記し、江戸時代の村落が現在のどの行政区にあたるかを示した。境界については、東京都と埼玉県の都県境のみを引き、市町村境は煩雑さを避け、名称のみにとどめた。

三点目として、江戸の都市部およびその後背地の物流は河川が主流だったことから、多摩川・玉川上水・入間川などの主要河川を表記し、さらに来園者には多摩地域在住者が多いと思われることから、青梅街道と例外的に中央線とを記載した。

これらのデータを一枚の地図上に載せ、最後に下図を外して、色分けした新田と古村、および陣屋の位置を一覧できる図を完成させた。

■パネルの製作と展示での反応

こうして地図ができると、いよいよパネル化へ向けての検討となる。展示室の規模はおよそ10m×20mの広さである。本パネルは、川崎平右衛門が武蔵野新田政策を推し進めた範囲を具体的に示すためのもので、その全体像の可視化をも意図していたことから、極力大きく作成したいと考えた。

パネルの大きさは、来園者の立ち位置から移動せずに一覧できる視界の最大を意識した。上限は、視点150cmの人物がパネルから約80cm離れ、そこから見上げて支障がない高さとして視点より80cmほど上までなら可能であると判断して、パネルの上枠が床より230cmとした。下限は、多摩地域に関係の深い関野陣屋の位置がパネル全体の半分よりやや下にあるため、陣屋とその周辺村々がかがんで見える距離として、床面から30cmは上げることとした。結果、パネルの上下幅を200cmとした。左右については、南北に広がる武蔵野新田の分布と新田開発をしなかった古村のみとの境を判別しやすくするため、加えて上下幅とのバランスから、正方形となるように左右幅も200cmとした。

展示期間中、来園者の多くがこのパネルの前で足を止め、時間をかけて見学している様子を多く目にした。パネルや文字の大きさに対する意見も、見えにくいといったクレームもなかったため、展示の手法としては問題なかったと思われる。

ほとんどの来園者が、まず自身の住んでいる周辺を指さし

ながら、その地が江戸時代にはなんとという村であったのかということに興味を持っているようであった。また、「武蔵国全図」を見た後に、パネルと見比べている来園者も多く、その際には両図を比較して、実際の位置関係について質問を受けることもあった。ただし、展示室内の来園者同士の会話を聞いていると、新田開発について言及している来園者は少なかった。居合わせた際に展示の説明を行なってはじめて納得してもらえることが多かったのは、残念であった。

展示室の広さと展示ケースが少ないことから、壁に貼った2m四方のパネルは目立ち、武蔵野新田の概要を知らせたい、伝えたいという目的はひとまず果たせたと思っている。

■視点を替えた地図パネルの制作

今回制作した地図パネルは武蔵国にある数多くの村落のなかで、享保期の新田開発政策で成立した武蔵野新田の分布を、一目で理解できることを目的としたもので、多くの情報は入れず、村の位置関係と村の分類(古村・村立新田・持添新田)のみに絞り込んだものである。その基礎資料としたのは、江戸時代後期に編まれた『新編武蔵風土記稿』であるが、筆者はかつて、この史料の情報を利用し、切り口の異なった「武蔵野周辺の村落分布図(江戸時代後期)」という地図パネルを制作したことがある(江戸東京博物館常設展示)。



展示した「武蔵野周辺の村落分布図」

その際に注目したのが、村の面積、村高、家数の関係である。『新編武蔵風土記稿』には、村の面積を東西・南北にそれぞれ何町かが記されている。当然ながら各村とも方形ではないため、最大値と思われる。地図パネル「武蔵野周辺の村落分布図」では、東西・南北のそれぞれの幅を単純な図形化し、これを縮尺に併せて「迅速測図」上に落として制作した。

「武蔵野周辺の村落分布図」の中心点は、「迅速測図」を使用したことから、集落の密集地に置いている。その結果、村の位置が重複した場合に限り、中心点から若干ずらして配置した。なお、この図でも、武蔵野新田開発期以降の村の状況がわかるように、新田を青色、古村をピンク色とで色を分けて掲載した。

(このときは、新田とは村立新田をさし、持添新田と古村とを区別しなかった)。村高については、『新編武蔵風土記稿』に記載がないため、ほぼ同時期に作られた『天保郷帳』から引用した。



「武蔵野周辺の村落分布図」(部分)

これを見ると、村落間が空いていることに気がつく。もちろん実際の村の範囲とは異なるのだが、この図からは武蔵野新田開発後も、入会地などの境界未確定地が残っていたことが想定できる。また、新田村を中心とした一帯は、村の範囲が正方形に近いのに対し、左上の現在の狭山湖の南岸にある村々は、東西が狭く、南北に長い村が連なっているなどの特徴も見られる。

改めて「武蔵野周辺の村落分布図」を見ると、村落の面積の差違が一目でわかるようになっている。生産高についても、一人あたり3石代から9石程度までと、村によって相当の差違が見られた。畑がちで生産力が低いというイメージでとらえられてきた武蔵野新田だが、この図からもわかるように、古村より一人あたりの生産量が高い新田村もあり、必ずしも近隣村々と大きな生産力の差があったわけではないようである。

「武蔵野4郡の村落分布図」が村の位置関係を単純に分かりやすく捉えることができるように配慮したのに対し、「武蔵野周辺の村落分布図」では感覚的に村の規模が分かるような作成方法を取った。このように、同様の素材を利用しても、多様な見せ方をすることができるのが、制作する地図の特徴ではないだろうか。

■おわりに

近世に作成された絵図は形態・内容が一点一点異なるため、展示資料としては展示映えるが、正確な情報を伝えることは難しい。地図パネルはこれを補うものであり、また、地図に新たな情報を付加することで、見る人に様々な情報を提示できる役割を持っているといえるのではないだろうか。

今回は博物館展示の一例として地図パネルの制作についての目的と手順の一例を述べさせていただいた。

「AR多摩さんぽ」 航空写真とAR（拡張現実）を活用した展示

帝京大学総合博物館 堀越 峰之

■はじめに

帝京大学総合博物館（以下、本館と呼称）内には『多摩の歴史と自然』という展示室がある。この展示室は、帝京大学が所蔵する多摩地域の歴史・文化・自然に関する資料を中心に構成されている。その代表的な展示として多摩地域の航空写真を利用したものがある。「AR多摩さんぽ」と名付けたこの展示は、設置した平成27年当時では最新技術であったAR（拡張現実）の機能を備えるとともに高い更新性も兼ね備えている。本館では来館者の滞在時間が長い人気のある展示だが、十分に活用できていない現状もある。ここでは導入の経緯、システムの概要、成果と今後の課題について報告する。他館の皆様が同様の展示を検討する際に参考になれば幸いである。



『多摩の歴史と自然』展示室概要

■導入の経緯

そもそも市町村が設置主体となる歴史系の博物館ではない本館が、なぜ多摩地域の展示を行っているのか。それは想定される来館者や、本館の設置目的に起因する。

本館の設置構想段階で、来館者の多くは一般市民と本学在籍生と想定した。設置目的として、大学の教育・研究成果を集めて保存し公開すること、大学教育との連携を掲げた。特に大学教育との連携は大学博物館ならではのものである。多くの学生に大学の歴史や教育・研究活動を知ってもらおうと同時に、貴重な大学生活を過ごす多摩地域の歴史・文化・自然に触れてもらいたい、そして実践的教育の場として本館を活用してもらいたいという思いがあった。この考えのもと、多摩地域の展示を設置することになった。

しかし、本学が所蔵する資料は多摩地域の歴史や自然に関して体系的に収集されたものではないため、断片的な展示になってしまう。とはいえ、通史的に展示を行ったところで、他の公立の歴史系博物館と同じ展示になってしまう。

そこで考えたのが「地図」を利用した展示である。理由として、地図は展示物として多くの情報を内包しており、様々な展示に対応できる。あわせて、来館者が自分の興味関心に応じ

て地図から自由に情報を引出すことができるなどの利点があると考えたからである。さらに展示に更新性を持たせることにより、多摩地域に関する調査・研究活動を本館が独自に学生と協力して実施し、その蓄積を比較的簡易に展示に反映できるようにものを模索した。

その後、本館の展示設計・施工業者である(株)日展より上記の方針を踏まえた展示の提案がなされた。その提案が航空写真とARを活用したものであった。同社は、新潟県長岡市にある「長岡震災アーカイブセンター きおくみらい」の設置にあたって、同様の展示を制作した実績があった。その後、同センターを視察し、展示の設置目的を達成する手段として最適なものと判断し導入を決定した。

■「AR多摩さんぽ」のシステム

展示の名称は「AR多摩さんぽ」とした。来館者に多摩地域の歴史・文化・自然に関するスポットをあたかも上空から散歩するようにめぐってもらいたいとの思いからである。そして、AR技術を導入したことから「AR」と付した。システムは以下の構成となっている。

(1) 航空写真

航空写真については平成27年5月に新規で撮影したものを使用し、50cm×50cmの塩ビタイルに写真を印刷し床一面に敷き詰めた。縮尺は1/2500を採用した。これは展示室の限られた床面積で可能な限り広い範囲をカバーし、かつ住宅等が1軒1軒識別できる大きさを保つことができる縮尺である。

写真の範囲の北端は横田基地、南端は唐木田駅、西端は高尾山、東端は多磨霊園である。問題点としては、航空写真のため、等高線等の情報が入っておらず高低差の情報を読み取れない点と、土地勘が無い来館者の場合、駅や幹線道路などのランドマーク的な情報が航空写真上に落としこまれていないと、位置情報の理解が難しい点である。前者は地形模型を設置することで対応し、後者は開館後に鉄道の駅名等を設置し対応した。



航空写真の縮尺は1/2500

(2) AR (拡張現実) とタブレット端末

航空写真上にはARマーカーが設置されている。AR (Augmented Reality) は「拡張現実」と訳される。風景などヒトが現実世界で認知できる情報に、バーチャルなど別な視覚情報を加えて表示することで、ヒトが認知できる世界を仮想的に拡張する技術である。近年話題となったスマートフォン向けゲーム「ポケモンGO」は、AR技術の典型である。

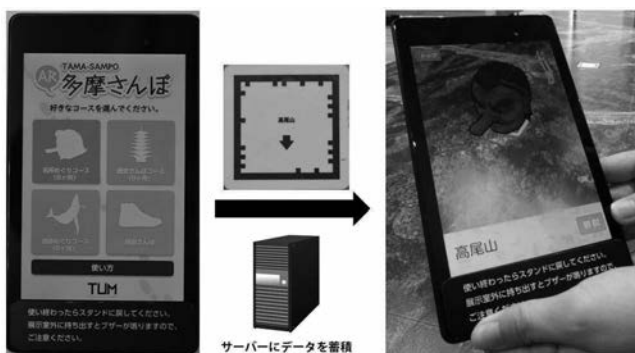
本館では、ARマーカーを独自開発した専用アプリをインストール済みのタブレット端末で読み込むことによって、画面上に3Dモデルが現れ、あたかも航空写真上に存在するかのような感覚を受けるようなシステムとした。さらに解説や写真等の情報も得ることができる。タブレット端末は「Nexus7」を採用し、盗難防止用のタグを付けて展示室内に設置し来館者が自由に利用できるようにしている。

情報の読み込み方法は画像認識によるものも検討したが、導入当時は読み込みの精度に不安があったため見送った。

ARマーカーは、多摩地域の歴史・文化・自然に関係する代表的なスポットを18ヶ所選定し、航空写真の該当する場所に設置した。現れる3Dモデルについては、デジタルコンテンツ専門業者に制作を依頼し、各スポットを象徴するものを作成した。高尾山は「天狗」、東京競馬場は「サラブレッド」という具合である。全ての3Dモデルを制作する予定だったが、3Dモデルの制作は1点1点費用がかかることもあり、予算等の都合から合計10個の3Dモデルを制作した。

18ヶ所のスポットの楽しみ方については、「さんぽ感」を演出し、来館者に目的を持って展示を楽しんでもらうため「名所めぐりコース」「歴史さんぽコース」「遺跡めぐりコース」の3つのコースを用意し、指定したポイントを順番に回ってもらうシステムを導入した。もちろんランダムにめぐってもらうこともできる。

ARマーカーは最大200件増やす事が可能である。情報は館内にあるサーバーに蓄積されるため、更新は情報さえあれば簡単にできる。博物館や学生が行った調査・研究活動の成果を、手軽に展示として公開できる。



ARマーカーを読み込むと3Dモデル・解説を表示

ARとタブレット端末システムの概要

(3) テーブルタッチモニター

84インチサイズの大型モニターを利用したデータベースである。航空写真上にプロットされたARマーカーの情報を一覧で表示できる機能を持っている。あわせてGoogleマップ、迅速測図等の閲覧が可能な「歴史的農業環境閲覧システム」(農研機構農業環境変動研究センター作成)が、Web経由で閲覧可能である。床面に配置された航空写真も含めて、これらの地図を活用すれば、明治期から現在までの土地利用の変遷等を知ることが可能である。

■来館者の反応

展示に対する来館者の反応は、概ね良好である。現在はWeb上でも気軽に航空写真を閲覧することはできるが、床一面に広々と敷き詰められた航空写真は、やはり目を引くようである。来館者はみな座り込んで航空写真にかぶりついて見ている。利用方法は様々で、タブレット端末を持ってARを表示させたり、自宅や親類、友人の家を探したり、小説や映画の舞台を見つけたり、それぞれの興味関心を持って楽しんでいる。本学の教育活動でも活発に利用されており、教育学部や文学部の講義を始めとして、本学の系列の小学校や幼稚園の活動でも活用されている。



帝京大学幼稚園による見学

■おわりに

来館者には好評の展示だが、いくつかの問題を抱えている。筆頭にあげられるのが、システムの異常があった際に、館内部のみでは対応できない場合があり復旧に時間がかかることである。デジタル系展示を導入する際には必ず起こる問題である。それ以上に大きな問題は、更新性が高いシステムを活用しきれていないことである。開館以来、ARマーカーを用いた新たな展示の更新が実施できていない。情報の蓄積をみせる事がキモであるこの展示は、誤解を恐れずに言えば未完成の状態である。今後は、このシステムを活かすべく多摩地域に関わる研究テーマを本館が独自に設定し、そのテーマに沿って博物館と学生が一丸となって調査をおこなう体制づくりが必要である。その調査の成果が蓄積され航空写真上やARに反映されて、初めて完成された展示となる。それを目指して地道な活動を継続していきたい。

地図資料から近現代の歴史をたどる 展示における地図や空中写真の活用

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 合田 宇宏

当館は武蔵野市で初めて誕生した博物館施設でありながら、武蔵野市歴史公文書の移管・選別等を行う公文書館機能を有し、さらに指定文化財や埋蔵文化財等といった文化財の保護普及事務を担うという複合的な施設です。館内にて常設展示を実施している第一展示室（武蔵野展示室）では、井の頭池遺跡群の分布、玉川上水に関する絵図の展示、御門訴事件に参加した村の位置図など、館蔵あるいは当館が作成した地図を多数展示に活用していますが、特に地図や空中写真を利用した展示としては、空中写真を用いて公開しているタッチコンテンツが挙げられます。

このコンテンツは「中島飛行機と武蔵野」と題したもので、戦時中の武蔵野町（当時）に存在し、太平洋戦争中にアメリカ軍の攻撃目標とされ、9回にわたる爆撃に遭った中島飛行機武蔵製作所及びその跡地の変遷をたどることのできる内容です。ここでは、①「空からみた中島飛行機」と②「地上からみた中島飛行機」の2つのコンテンツを用意しています。前者では中島飛行機武蔵製作所及び跡地の変遷について武蔵野市域で撮影された空中写真のうち、同地点を定点観測のように切り取ったうえで説明を付し、撮影年順に閲覧できるように設計しました。一方の后者は①戦時中、②戦後・アメリカ軍の駐留中、③土地返還後、④現在の4つの時点における同製作所及び跡地における地上から撮影した写真を、空中写真上に表示された各地点のボタンに触れることで見ていただけるものです。限られた展示スペースを有効に活用することや幅広い世代の方に中島飛行機武蔵製作所を中心とした戦争の歴史を知っていただきたいという思いから、このような展示手法を用いて地図資料を活用しています。

ところで当館では特に近現代の歴史に関する企画展示において、地図や空中写真等を頻繁に活用しています。ここでは、その活用例について、順に紹介します。

開館の翌年、戦後70年の夏に開催した企画展「戦争と武蔵野」は、中島飛行機武蔵製作所に関連する資料を中心とした戦争関係資料の展示として当館で初めて開催したものです。

この展示では戦争関係資料の現物資料に加え、中島飛行機武蔵製作所及びその跡地の変遷について、空中写真と地上から撮影した写真を用いた展示造作を制作し展示しました。空中写真と地上で撮影した各地点の写真をあわせて展示することで、①戦時中、②戦後・アメリカ軍の駐留中、③土地返還後、そして④現在に至るまでの変遷を視覚的に捉えられるようにしました。いわば、常設展示に設置したタッチコンテンツを立体化したというイメージです。文章ではなく写真から歴史的経過をたどることで、大人から子どもまで、その地点の様子が一目でわかるということで好評を博しました。この展示以降、当館では空中写真や地図をグラフィックシートに加工し、床面に広げて展示する手法が多く用いられるようになっていきます。



企画展「戦争と武蔵野」

続いて、同年秋に実施した企画展「武蔵野市の歴史と文化財～蕨手刀から凱旋門まで～」では、市指定有形文化財の「第11大区4小区吉祥寺村全図」をはじめとした武蔵野村に合併する以前の吉祥寺村・西久保（西窪）村・関前村及び関前新田・境村及び境新田の各村絵図（地引絵図）を展示に活用しました。具体的にはこれらの絵図を分割撮影し、データで統合したうえで市域全体を1枚のグラフィックシートに加工して、展示造作を制作しました。明治8年（1875）に作成された絵図から、明治維新後の武蔵野市域における土地利用の様子が読み取れるだけでなく、これらの絵図と現在の地図を比較すると、五日市街道沿いを中心に昔の地割の名残が多く残っていることがわかります。例えば、武蔵野市の中央エリアに存在し、五日市街道と三鷹通り・中央通りが交差する「武蔵野中央交差点」は現在でも鉤の手のようになっていますが、これらの絵図でも同様に記されています。また、三鷹通りと中央通りは吉祥寺村と西久保（西窪）村の村境道となっていたことがわかります。なお、この絵図と現在の地図を比較する映像も制作し、解説付きでより詳しく地図を閲覧していただけるコンテンツを公開しました。



企画展「武蔵野市の歴史と文化財～蕨手刀から凱旋門まで～」

平成28年(2016)の夏に開催した企画展「戦争と武蔵野II」では、前年に実施した「戦争と武蔵野」の内容に加えて、戦争と武蔵野についてより広域的かつ俯瞰的に考えていただくことを目指し、武蔵野市域だけではなく、近隣自治体さらには多摩地域に視野を広げた展示を行いました。この際に用いたのは米陸軍地図局が作成した「JAPAN CITY PLANS」と題された地図です。この地図はテキサス大学が所蔵しており、インターネット上に公開されているものですが、地図は戦時中の多摩地域における軍事施設や軍需関連企業の詳細が記されているだけではなく、それらの施設や企業へと延びていた鉄道引込線までもが記載されている貴重な資料であるといえます。この資料を使用した床面地図を制作し、軍需工場や軍事施設のあった地点上に、その地点の戦時中と現在の写真を比較できるスタンドを立てて、解説文とともに展示しました。この地図は大変に詳細な地図ではありますが、そのためデータ量も大きく、また多摩地域がいくつかの地図に分割されているため、パソコン上ではやや閲覧しにくいという難点があります。同展示では、多摩地域(主に北多摩地域及び南多摩地域東部)を俯瞰して見ることができるといふ点からも価値はあったものと思われま



企画展「戦争と武蔵野II」

また、これらの3つの展示を踏まえ、昨年4月には、当館南側の中央線高架下に開園した武蔵境ぼっぼ公園の開園記念イベント(主催:東日本旅客鉄道株式会社・株式会社JR中央ラインモール)にて、武蔵境ぼっぼ公園開園記念展示「地図と写真でたどる武蔵野市」を開催しました。ここでは地引絵図(村絵図)とJAPAN CITY PLANS、現在の空中写真の上に、当館で鉄道路線やランドマーク等を加筆するなどの説明を加えたパネルを制作し展示しました。展示ブース内でそれぞれを比較することによって、武蔵野市域における近現代の移り変わりを容易に辿ることのできる内容となりました。また、この展示と連動したクイズシートを来場者へ配布するなど、楽しみながら武蔵野市の歴史に関心をもってもらう取り組みを実施しました。

そして、昨年夏には企画展「幻となった武蔵野の未来図」を開催しました。この展示では「武蔵野都市計画」・「武蔵野と幻の鉄道」・「武蔵野市域をめぐる合併」・「武蔵野市の町名整

理」という4つのトピックを取り上げました。この展示は、武蔵野市がどのような経緯で作られたのかを知ることで、市民が今後のまちづくりを考える契機となることを目的に開催したものです。

なお、同展示は主に実現しなかった計画を取り扱っているため、展示資料の多くが紙資料、特に公文書という公文書館機能を有する当館ならではの展示となりましたが、その公文書に挿入されていた地図や、公文書に記載の内容を地図に起こして展示する手法をとりました。当館には公文書専門員(アーキビスト)が配置されており、歴史公文書に関する事務に従事していますが、この展示では展示担当者が公文書専門員とともに公文書を読み込んで展示設計を行いました。同展示について、少し詳しく紹介します。

「武蔵野都市計画」では東京都公文書館所蔵文書や武蔵野市歴史公文書を活用し、武蔵野町(当時)及び近隣市町村(小金井町・田無町・三鷹町・保谷村)に及ぶ武蔵野都市計画地域の指定について紹介しました。この都市計画地域は昭和14年(1939)に決定されたものであり、その前年に武蔵野町に開設された中島飛行機武蔵野製作所(その後合併し、中島飛行機武蔵製作所に改称)付近が工業地域に指定されていること等が見て取れます。また、昭和15年(1940)の「武蔵野都市計画街路及広場計画図」では、当該製作所付近を中心に幅員50mの道路が計画されていることも記載されており、当時の計画が当該製作所の影響下にあったことがうかがえます。

続いて「武蔵野と幻の鉄道」では、「実現したが、幻となった鉄道」と「実現せず、構想に終わった鉄道」の2つに分けて紹介しましたが、ここでも中島飛行機武蔵製作所及びその跡地の活用が大きな影響を与えていました。実現した鉄道として、①境浄水場引込線、②中島飛行機武蔵製作所工場引込線、③国鉄武蔵野競技場線(通称)を、米国国立公文書館所蔵文書や武蔵野市歴史公文書等を基に紹介しました。これらの鉄道については、実在したものの残念ながら写真の存在は確認できておらず、走っていた様子を知るには聞き取り等が情報源となっていました。しかし、公文書を辿ることにより、当時の様子を垣間見ることができ

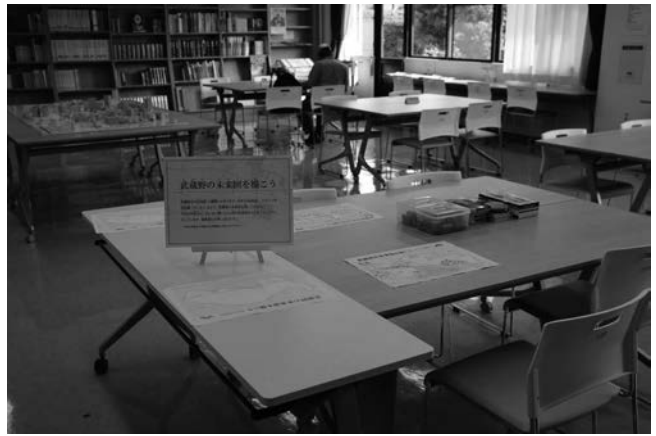
ます。次に、実現せず構想に終わった鉄道について、武蔵野市に浮上したスポーツセンター計画を取り巻く京王帝都電鉄(当時)と西武鉄道を中心とした鉄道路線の開設と延伸の駆け引きを含めて紹介しました。このスポーツセンター計画とは、中島飛行機武蔵製作所跡地に武蔵野市等が野球場やサッカー場をはじめとした総合施設を建設するといったものであり、戦後に計画され構想に終わった鉄道路線の多くがその敷地を通過するように計画されていたことがわかります。ところで、これらは実現しなかった鉄道であるため、駅名標や運賃表等といった現物資料は存在しません。文書から読み取れる情報から紹介するしかなく、展示としては非常に淡泊で関心を得にくいものとなってしまいます。そこで、歴史公文書をひもといて制作したのが29頁に掲載した「幻の鉄道・軌道路線図」です。この路線図は公文書に付された図面や手書きの略図を中心に、公文書の本文を読み解いて作成しました。当然ながら、公文書か

ら正確な駅の位置や構造、経路等が読み取れないものも少なくないため、図面上にもあくまでもイメージとなる旨を注記しましたが、武蔵野市域及びその周辺にどのような鉄道路線が計画され、または存在していたのかが一目でわかる展示パネルになったのではないのでしょうか。

ところで構想に終わった鉄道についての記述は、非常に興味深いものがあります。西武鉄道が計画したスポーツセンター付近を經由して、西武是政線（現・西武多摩川線）と西武村山線（現・西武新宿線）とをつなぐ新線では、スポーツセンターの観客輸送だけでなく、都心への砂利輸送や国際基督教大学の通学者輸送、村山線方面から多摩川河畔における遊覧客の利便性向上などの効用などが記載されています。一方、京王帝都電鉄もスポーツセンター付近を經由して久我山・吉祥寺から田無・東久留米へと延伸する計画を打ち出しますが、ここでは当時輸送量が落ち込んでいた府中以西の京王線を単線化し、そのレールを転用して開業させる旨の記述もみられます。

続いて「武蔵野市域をめぐる合併」では、昭和29年（1954）に本市議会本会議にて可決された2市3町の合併案（三鷹市・小金井町・田無町・保谷町と本市）及び昭和30年（1955）に同本会議にて可決された三鷹市との2市合併案を武蔵野市歴史公文書や三鷹市報を用いて紹介しました。ここでも武蔵野市歴史公文書から合併を目指した2市3町の略図を紹介し、視覚的に合併構想を展示しました。結果的にいずれも合併には至らなかったため、武蔵野市のかたちは武蔵野村時代より変わらずに現在に至ります。地図（略図）を展示に用いることで、文字通り合併していた場合の「市のかたち」が浮かび上がってきます。

最後に「武蔵野市の町名整理」では、第8次案まで作成された町名整理について、歴史公文書に付された図面を並べ、それぞれを比較可能な展示といたしました。町名整理案に反対する市民が議場に押し掛ける大混乱が生じるほどに難航した町名整理の紆余曲折について、紹介したものです。幻となった町名には市内各地域の旧字名などが用いられているものも多く、ここからも歴史や文化を感じられます。また、館内の市民スペースではそのうちの4つの案について、マグネットを用いたパズルを制作し、子どもたちにも楽しんでもらえる企画も実施しました。



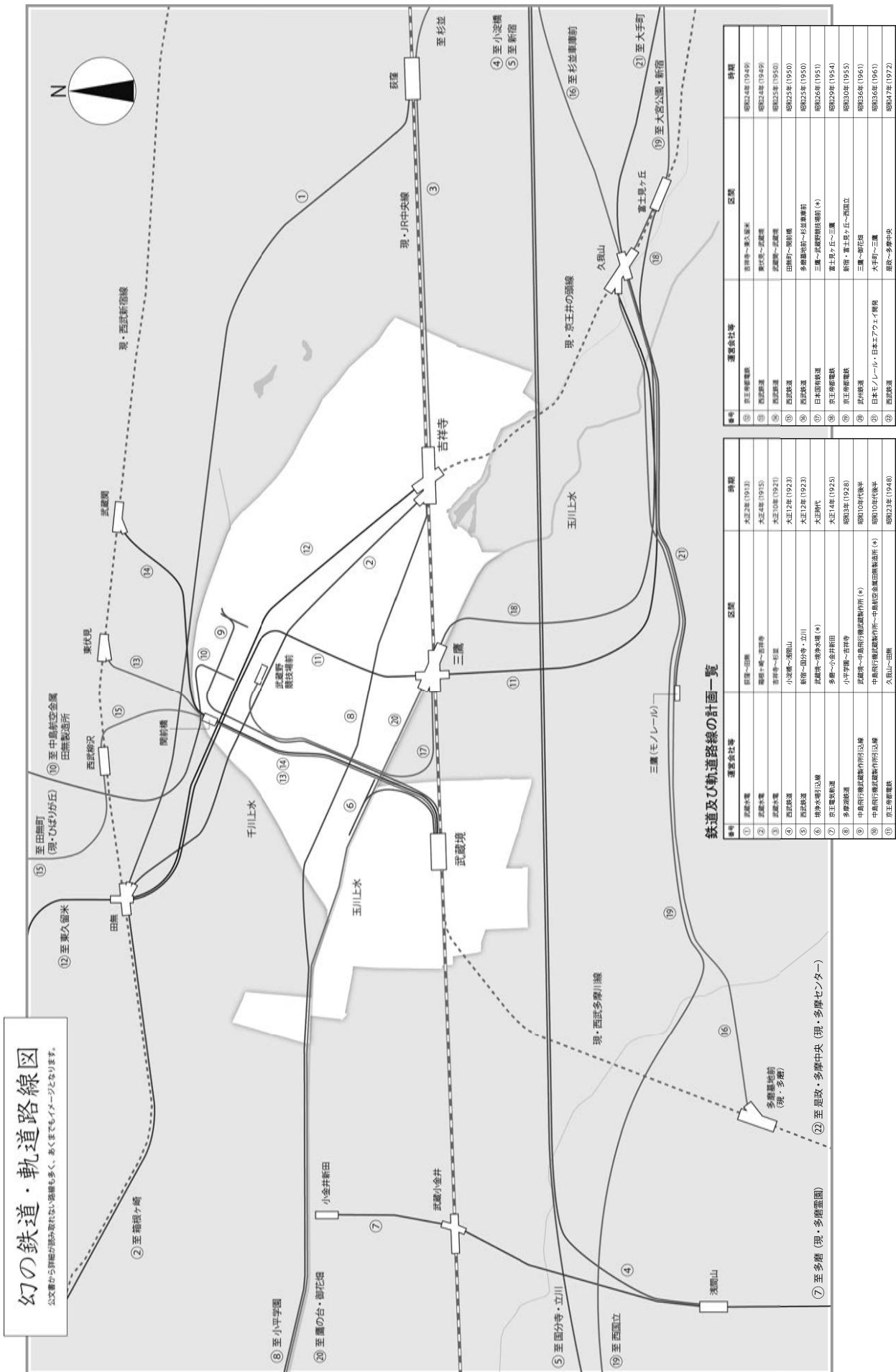
企画展「幻となった武蔵野の未来図」関連事業

以上のように、当館における企画展示では近現代をテーマとした展示を中心に、地図や空中写真を多数活用し、開館以来多くの方にご来館いただいております。

歴史が現在につながっていることを、視覚的に、また比較的容易に捉えることのできる「地図」や「空中写真」という素材を上手に活用し、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館では今後も様々な企画展示を開催していきます。



企画展「幻となった武蔵野の未来図」



幻の鉄道・軌道路線図
 公文書から詳細が読み取れない路線も多く、あくまでもイメージ図となります。

鉄道及び軌道路線の計画一覧

路線	運営会社等	区間	時期
① 武蔵野線	国鉄	三鷹～田園	大正2年(1913)
② 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正4年(1915)
③ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正10年(1921)
④ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正12年(1923)
⑤ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正12年(1923)
⑥ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正12年(1923)
⑦ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	大正14年(1925)
⑧ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑨ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑩ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑪ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑫ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑬ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑭ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑮ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑯ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑰ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑱ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑲ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
⑳ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半
㉑ 武蔵野線	国鉄	三鷹～吉祥寺	昭和10年代後半

区間の欄に()が記載されている路線は、かつて存在した路線です。

幻の鉄道・軌道路線図 (当館作成)

企画展「東村山の神社」

東村山ふるさと歴史館 小川直裕

東村山ふるさと歴史館では、平成29年度の秋の企画展として、9月30日(土)～12月3日(日)に「東村山の神社」を開催した。



展示風景

江戸時代には大小様々な神社が各地に祀られていたことが各種の記録でわかっているが、今回の展示では、ほぼ鎮守に相当する東村山市内の13の神社を対象とした。

市内には多くの神社があるにもかかわらず、平成8年(1996)開館の東村山ふるさと歴史館及びその前身の東村山市立郷土館(昭和40年開館)で神社をテーマとした展示が開催されてこなかったため、市内各地の神社の歴史や文化財については、これまで十分に紹介されてこなかった。そこで、市内の神社について、市民および市外の人々に広く公開することを目的として、新たにわかったことも含めとりまとめ、神社所蔵の文化財や、郷土館時代より当館へご寄贈いただいた神社関係資料を紹介する展示を行った。ある程度まとまって神社を扱った刊行物としては、昭和46年(1971)発行の『東村山市史』があったが、発行から時間がたっていたり誤りが目立ち、記載のない神社もあった。また、『東村山市史』刊行以降は神社に関する詳細な刊行物がほぼないため、今後の市内神社調べに寄与することも目的とした図録(頒価300円)をあわせて刊行した。

明治維新に伴う神仏分離令、その後の神社合祀等により、それ以前の神社の文化財や史料、建物が多く失われた現状があるものの、神社や氏子の方々のご協力をいただき、神社に関わる古文書(江戸時代の村明細帳・村鑑、明治時代の社寺台帳)、絵図、御神札、版木、彫刻、神社建築、棟札、鰐口、提灯、幟等のさまざまな資料から、神社の歴史等を明らかにし、初公開・新発見のものも含めさまざまな資料を展示することができた。

神道では、建物や神社で使用される物を定期的に新しくすることがよく行われてきたため、古くからの物が全て残っているわけではないが、神社は人々の祈りの場であり、人々が集まる集会所的性格を有しているため、タイムカプセル的な側面もあり、古い文化財や写真が残されている場合がある。当たり

前のことではあるが、神社の歴史やその変遷を明らかにすることは、その地域の歴史や変遷を明らかにすることでもある。東村山に限らず各地域で神社に関わる調査・研究が進展し、それぞれの地域での様子を把握するだけでなく、相互に対照することにより、建物や文化財の作者や、それぞれの地域の独自性や共通性等が検討できるようになっていくことが望まれる。

今回の展示を行い、判明したのは、神社に関わる人々の代替わりにより、氏子等の神社関係者でも、わからなくなってしまっていることが多くあるということである。多岐にわたる業務のなかで困難なことではあるが、神社に関する過去の歴史や行事等を調べそのことを記しておくのみならず、その時々々の状態を記録しておくことが重要であり、心がけていきたい。



「野口村絵図」部分 文政8年(1825)



稲荷神社幟(山岡鉄舟揮毫)

駅前遺跡の発掘調査を活用した普及啓発

小金井市教育委員会・小金井市文化財センター 高木 翼郎

JR武蔵小金井駅の南口では、現在再開発事業が進んでいます。この事業に先立って、本町六丁目遺跡の発掘調査が平成29年4月から4ヶ月間実施されました。縄文時代をはじめ江戸時代～戦時中の遺構・遺物が市役所前で発見されたことで、多くの市民の興味を引く事となりました。

調査期間中には、郷土学習の一環で市内の小・中学生を対象とした遺跡見学(5～6月)や社会科教諭への現場説明会(6月)、一般公開した遺跡見学会(6月10日・7月17日、計2,802名)等、普及啓発活動を行いました。

遺跡見学会でこだわったのは「体験」です。発掘直後の資料は小破片のため、一般の方は全体の形状をイメージできません。発掘現場に特設の展示場を併設し、市文化財センター所蔵の縄文土器や石器を現地に運び並べ、見て触れてもらう場を提供しました。実物資料の設置は、造形を認識するだけでなく、レプリカではなかなか味わえない本物を感じてもらうためには大切な事です。

土器を初めて手にとる見学者は多くおり、本物の質感や重さを熱心に観察し、また



土の匂いを嗅ぐ等大いに盛り上がっていました。さらには、検出した遺構を利用した「防空壕体験」は、大きな反響をいただきました。見学者それぞれで感じ方は異なりましたが、戦争下における地元小金井の生活の一端を遺構からみていただけたのではないのでしょうか。発掘調査の関連事業は続き、調査終了後には11月から2ヶ月間、市文化財センターにおいて本遺跡の速報ミニ展示を開催しています。



遺跡見学から始まった一連の事業の結果からは、発見された遺跡の時代が新しい旧いや、新聞の紙面を賑わすような目玉がなくても、遺跡が身近に存在する事実を知るだけで見学者は興味を持っていただけるということを強く認識しました。ただし、限られた素材・予算の範囲の中で、見学者が体験し理解を深めてもらえるような仕掛けを創出するためには担当者の企画力が試される所でもあります。

時代に即した事業を展開するために、市民の反応を直接感じ取れる機会は大事にしたいと考えます。今後も活用事業を通して、市内の遺跡については地域史を知って学んでもらえるよう、事業の開催に努めていきたいと思えます。

平成29年度活動報告

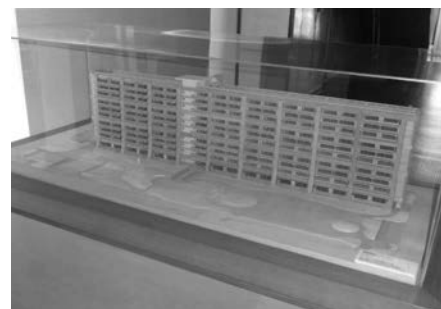
集合住宅歴史館 溝口 忠

■特別展「ル・コルビュジエと前川國男」への展示協力

平成29年5月30日～9月10日に開催された東京都歴史文化財団連携事業の特別展「ル・コルビュジエと前川國男」において、集合住宅歴史館所蔵の晴海高層アパートの模型が展示されました(展示場所:江戸東京たてもの園)。前川國男による設計の晴海高層アパート(東京都中央区:現晴海アイランドトリトンスクエアなど)は1958年(昭和33年)に日本住宅公団(現UR都市機構)が晴海団地15号館として建設した鉄骨鉄筋コンクリート造10階建の集合住宅です。3層6住戸分を1単位とするメガストラクチャーの採用により可変性も持たせた架構方式、スキップ形式のアクセス方式、従来の寸法にとられない畳形状など、戦後日本の合理性への追求が多くみられます。



解体前の晴海高層アパート



晴海高層アパートの模型

■集合住宅歴史館の来場者について

平成10年4月に一般公開を開始した集合住宅歴史館の来場者は、ここ数年増加傾向にあり、昨年からの1年間で30%以上増加しております。平成29年度来場者の業種別では学校関係が一番多く34.5%(前年34.4%)、次いで官公庁等24.2%(前年23.4%)、不動産・建設関係22.1%(前年22.6%)、その他19.2%(前年19.6%)とほとんど変化がありませんでした。来場者の満足度は「高い」と「やや高い」を合わせると約97%(前年約97%)の方から高い満足度が得られ、公開している全6施設の中でも最も人気がある施設となっております。

開館30周年の目玉

府中市郷土の森博物館 中村 武史

今年は開館から30周年の節目に当たる一年でした。昭和54年、市制25周年の記念事業として発進した「府中市郷土の森」構想は、8年間に及ぶ構築期間を経て、1987年4月の博物館誕生で形を成しました。まずは30年前を回想する目的で、当時の世相を交えた博物館船出の模様を簡単な展示で紹介することから記念イヤーが始まりました。多摩川の河川敷に建設され、広大な野外部分を併せ持つ当館の初々しい姿を新聞記事や写真で紹介し、懐かしさとともに数々の記憶を呼び起こしました。特に市の花「梅」を中心とする園内植栽樹木の成長は、時の流れとともに発揮された自然力を象徴しているようでした。

アニバーサリーの目玉としては、当館ならではの展示会を2本用意しました。1本目は定着したシリーズの「あしもとネイチャーワールド」です。「オレたち夏のキラわれ者」と言う、都市に侵出して人間社会との確執を生むネズミやゴキブリに代表される厄介者をテーマに、身近な自然を考察する内容でした。過去に扱ったことのない題材であると同時に、根底にあったのは、都市生態系の現状です。本来の生息地である森林を追われ、やむなく都市に移住した連中が新たな動物社会を形成していることにスポットを当てました。府中市街地にも、今や当たり前に出没する里山動物は、開館当初には目立たなかったことです。まさにこの30年で、造成地から自然の森に成長を遂げた当館園内と、「変化」と言うキーワードで一致するわけです。開館から今までの市街地と園内の自然環境が、大きく変わった実情をリンクする意味で30周年記念の開催に適合するものと考えました。巨大なゴキブリとネ



ズミの模型を製作し、深夜の台所にうごめく様子をリアルに再現した空間が盛況でした。

2本目は「徳川御殿@府中」。府中で行われてきた幾多の発掘調査の中で、2008～10年に行われた「御殿地」の発掘成果は特大の注目を集めるものでした。市の中心部にあるJR府中本町駅の東側は、徳川家康が鷹狩の際に休憩・宿泊した御殿の跡地と伝承されていました。ここで、古代の遺構や遺物とともに、戦国時代末～江戸時代初頭のものも発見され、なかでも三葉葵紋の鬼瓦出土は、伝承通りその場所が徳川御殿であったことを証明したのです。もちろん、開館から30年の過程には多くの発掘成果がありましたが、この発見は府中に限らず、全国的規模で発信できる内容と捉え、まさに記念の展示会に相応しいテーマと判断しました。歴史の街「府中」をアピールするとともに、考古分野の30年間でも最大の呼び物であることは間違いありません。

さらにもう一つの大きな節目がありました。開館から人気を博したプラネタリウムのリニューアル開始です。4年前に達成した常設展示リニューアルに続く一大事業となり、来年5月のオープンに向けて動き出しました。まさに30年間フル稼働した今までのプラネタリウムは10月にさよならイベントを実施し、長きに亘る労に感謝を込めて大勢のファンが集結しました。30周年は、ひとつの区切りであると同時に、常設展示&プラネタリウムが揃い踏みで再スタートを切った年でもあったのです。

もちろん、開館から恒例の「梅まつり」や「あじさいまつり」なども、この30年で磨き上げてきた自慢の事業です。当然これらにも周年の冠を付けましたが、やはり博物館は郷土に関わる資料の公開が中心です。記念イヤーならではの題材で、大きな特別展を2本開催出来たことこそが、一番のメッセージであり、30歳の祝いにマッチした最大の演出であったと確信しています。

平成29年度活動報告～2つの記念展について～

調布市郷土博物館 芝崎 由利子

平成29年は、慶応3年(1867)の大政奉還から150周年にあたる節目の年でした。当館では、このことを記念し、調布で生まれた新選組局長の近藤勇に関連した展示と講演会を開催しました。また、市内の古刹・深大寺に伝来する白鳳仏が国宝に指定されるという、かつてない文化的慶事に恵まれ、市を挙げての慶祝事業に取り組んだ1年でもありました。深大寺との共催で特別展とシリーズ講演会を開催しました。ここでは、平成29年度に実施した2つの記念展について報告します。

■大政奉還150周年記念企画展「近藤勇と調布の幕末維新」

本展示開催の発端は、京都市の主催で発足した「大政奉還150周年記念プロジェクト」に、多摩地域から日野市とともに参画し

たことでした。このプロジェクトは、幕末維新に活躍した先人たちとゆかりを持つ都市が相互に交流・連携を図るというもので、参画都市22箇所のスタンプを集める「幕末維新スタンプラリー」では、当館が近藤勇のスタンプ設置場所となり、遠方からも多くの来館がありました。本展示は、これにあわせて、平成29年10月11日から12月17日まで開催しました。市内に残された古文書を中心に展示し、近藤勇を取り上げな



大政奉還150周年記念企画展「近藤勇と調布の幕末維新」ポスター

がら、周辺の人々や甲州街道の宿場であった布田五宿の様子などを通して、幕末維新期の調布について紹介しました。特に、近藤勇が天然理心流3代目の近藤周助に養子入りした際の証文である「近藤勇養子縁組状」は、平成29年3月に市有形文化財に指定されてから初の公開となりました。大政奉還150周年のタイミングで記念すべきお披露目ができ、多くの方にお目にかける機会を提供できました。

新選組の中核を担った隊士を輩出し、支援者が多かった多摩地域には、新選組ゆかりの地や資料が数多く残っています。平成30年は近藤勇没後150年を迎えますが、近藤勇のふるさととして、今後も関係市区町・館との交流を図りながら、研究・事業に取り組んでいきたいと思ひます。

■深大寺白鳳仏国宝指定記念展「はるかなる白鳳のほほえみ～深大寺釈迦如来像と寺のたから～」

深大寺の白鳳仏として親しまれている「銅造釈迦如来倚像」は、7世紀後半ないし末の飛鳥時代後期の製作とされる白鳳仏の名品です。近年、材質技法などの調査研究が進展したことにより、改めてその重要性が認められ、都内の寺院伝来の仏像としては初の国宝に指定されました。

本展示は、平成29年11月1日から11日まで、深大寺本堂を会場として開催し、深大寺の寺宝や市内出土の仏教関連の考古資料などを



深大寺白鳳仏国宝指定記念展「はるかなる白鳳のほほえみ～深大寺釈迦如来像と寺のたから～」の様子

展示しました。短い会期で法要の時間は入場できずという条件でしたが、普段は入れない本堂内を特別に拝観できるということもあり、11日間で約7,700人もの方にご来場いただきました。

また、これに関連して、仏教美術史や深大寺に関わる専門家の先生をお招きし、7回シリーズの「深大寺白鳳仏国宝指定記念講演会」を開催しました。「深大寺釈迦如来像の源流」、「彫刻史研究の動向と国宝・重要文化財指定」など、様々なテーマでお話しいただき、毎回応募が定員を上回る人気ぶりでした。来年度以降、講演録の刊行を予定しています。

平成29年度の活動について

青梅市郷土博物館 鈴木章久

◎収藏品展「なんだこれ!?—昔の道具展—」

青梅市郷土博物館では数多くの民具を収蔵しており、今では使われなくなったものや、展示タイトルのように「なんだこれ!?!」と思うようなものも多く含まれています。本展示は、そういった資料を集めた展示会です。

また、本展示における工夫として、各資料が何であるかを考えるためのヒントが書かれたキャプションのみを設置し、各資料の名称や解説は、別置き解説シートで確認する方法で展示を行いました。このようにして、資料の形やヒントをもとにその資料が何なのかを考え、解説シートで答え合わせをするというクイズ形式をとることで、「見る」「読む」だけでなく、「考える」展示を目指しました。

本展示会は平成30年1月23日から4月15日まで開催しております。新聞で紹介された事もあり、多くの方々にご来館いただいております。



展示会の様子

◎馬場家御師住宅修理事業

青梅市御岳山に残る東京都指定有形文化財「馬場家御師住宅」は、武蔵御嶽神社の御師(おし)(神官)・馬場家の住宅で、現在も住居として使用され、また、祭りの場としても機能しています。

近年、屋根の腐朽や建物の沈下等が顕著となったため、東京都と青梅市の補助事業として、平成27年度から平成29年度までの期間で住宅の修理を行うこととなりました。

◎馬場家御師住宅について

住宅は、慶応2(1866)年に馬場家十代当主の馬場駿河が愛する妻・茂よのために建てたものと伝わっています。建物内部には、神社に参詣する講中のための宿坊や祭りの設備が整えられています。各客室の天井は高く作られており、書院造風の座敷飾りが施され、玄関構えと合わせて御師住宅の完備した姿を残しています。

建築当初の姿をよく残しており、また、建築年代も明らかで、江戸時代の御師住宅の建築様式を知る上で、貴重な建物であることから、平成元年3月24日に東京都の有形文化財に指定されました。

◎修理事業について

修理事業では屋根の葺き替えを行うとともに、腐朽した小屋組部材の補修・取替を実施しています。また、住宅本体の傾きや沈下、床廻り・漆喰壁の修理などもあわせて行いました。



葺き替えが完了した屋根

また、青梅市では、住宅の修理工事見学会を平成29年9月16日に実施し、悪天候にもかかわらず、市内外から多くの方々にご参加いただきました。

葺きたての茅葺屋根は大変美しいものですので、この機会に是非御覧ください。ただし、馬場家御師住宅は前述のとおり現在も個人の住居として使用されているため、見学は外観のみとなります。

平成29年度活動報告

瑞穂町郷土資料館 けやき館 関谷 学

平成29年度は、主に次のような特別展・企画展やイベントを開催しました。

○主な特別展・企画展

写真展「未来へ伝える瑞穂」(平成29年4月18日～5月31日)

過去の瑞穂町の姿や人々の営みについて理解を深めて頂くため、地域の方々から提供頂いた資料を中心に、往年の瑞穂町の街並みや、人々の生活風景などの写真を展示し、地域の方から提供頂いた古いカメラなども紹介しました。

企画展「瑞穂の小学校」(平成29年7月24日～8月31日)

瑞穂町にある小学校を取り上げ、その沿革などを紹介しました。特に近世の寺子屋時代の手習い本から戦前・戦後の教科書などを多数展示し、学校教育の移り変わりを紹介しました。また、校舎建設や学校運営に関わる様々な資料や、明治から昭和の頃に実際に学校で使用されていた机や椅子、オルガン、更に昭和20年代から50年代の給食レプリカなど、往時の学校生活を彷彿とさせる品々も数多く展示し、大変好評を頂きました。会期期間中には、ギャラリートークも開催しました。

特別展「殿ヶ谷の神輿」(平成29年9月10日～9月30日)

慶応2年(1866)建造の町指定有形民俗文化財「殿ヶ谷の神輿」が、平成28年度に大修理されたことに伴い、完成した神輿のほか、旧部材や修理途中の写真などを展示し、この神輿の歴史や修復の様子を紹介しました。来館された方々は、めったに見ることができない様々な資料や修理の作業風景を目にし、この文化財の歴史の深さを感じた様子でした。

特別展「楽器解剖展」(平成29年10月7日～21日)

普段は見えない様々な楽器の構造を知って頂くため、サクソフーンやトランペット、バイオリンなどを部品毎に分解して展示し、その仕組みを紹介しました。展示室には子供向けの簡単な楽器工作コーナーも設け、多くの親子連れなどに参加頂きました。また、「楽器の分解・組み立てワークショップ」や「楽器のお医者さんミニ相談会」といった関連イベントも開催しました。

収蔵品展「瑞穂町のくらしと祈り」(平成29年10月28日～12月3日)

娯楽や食、生業など、くらしの中の様々な場面で使用されてきた道具や、神仏への信仰や儀礼に関わる様々な資料を、新収蔵資料を中心に展示し、紹介しました。また、会期期間中にはギャラリートークを開催しました。来場された方々は、馴染み深い道具や初めて目にする資料に興味深げに見つめ、盛んに質問をされる方も多く、関心の高さを感じた収蔵品展でした。

特別展「GO! GO! NIAGARA大瀧詠一の世界2018」(平成29年12月17日～平成30年2月4日)

大瀧詠一氏は、瑞穂町を拠点に音楽活動を行ってきたアーティストです。氏の紹介を通じて、ナイアガラサウンド発祥地としての地域的魅力とその文化的価値を知って頂くため、地域の方々の協力を得てレコードなど様々な資料を多数展示しました。会期中は、遠方からも数多くの方々に来館頂き、隣接す

る耕心館での関連展示やイベントも大変盛況に開催することができました。

企画展「ひなまつり展2018」(平成30年2月18日～3月4日)

耕心館と合同で開催する、この季節恒例となった催しです。町民より提供いただいた雛人形や晴れ着、地域のボランティアの方々が作成したつるし飾りなどの展示のほか、つるし雛づくりのデモンストレーションや民話の語り、もちつき体験なども実施しました。毎回大変好評を頂いており、今回も専用シャトルバスを運行するなど非常に多くの方々に来場頂き、大変賑やかな催しとすることができました。

○その他の主なイベント

温故知新の会

郷土の歴史や自然に関する講演会や、子ども向けの体験教室などを定期的に開催しました。

囲炉裏端で語る昔話

常設展示室内に再現した民家の囲炉裏端を会場に、地域の方を講師に迎え、地元の言い伝えや昔のできごとなどを語って頂くイベントを定期的に開催しました。

親子折り紙教室

親子で楽しめる折り紙教室を定期的に開催しました。

イブニングトーク

夕方の時間帯に、落語会や朗読会を定期的に開催しました。

わくわく工作教室

各種の子ども向け工作教室を定期的に開催しました。

みずほはたおり探検隊

7月から11月にかけて、町の伝統的な絹織物「村山大島紬(つむぎ)」を題材にした機織り・染色の体験教室を開催しました。

第18回 狭山丘陵市民大学

東村山ふるさと歴史館、東大和市立郷土博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館との合同事業として開催、今回は「狭山丘陵の遺跡と地形」をテーマとして実施しました。



企画展「瑞穂の小学校」ギャラリートークの様子

最近の活動報告

五日市郷土館 関根 輝雄

五日市郷土館は、平成29年度の企画展とし「五日市のまちの繁栄を支えた商業～商店看板や宣伝広告にみる商人の心意気～」(平成29年6月15日～11月26日)と題して明治から昭和にかけて五日市の商業を支えた商売に関する資料(商店の看板、宣伝広告、チラシ、団扇、徳利、茶碗、新聞や雑誌の宣伝広告など)を紹介しました。

8月26日には、第15回ヨルイチ協力事業として旧市倉家住宅を使った「昔ばなしの語り」と秋川キララホールとの共催で、スーマーさんのギター演奏によるミニコンサートを開催しました。当日は、天気にも恵まれたたくさんのお客さんが来館しました。



旧市倉家住宅でのギター演奏

昨年度に引き続き行われる「秋川溪谷雛めぐり」では、2月上旬～3月上旬にかけて五日市の商店街を中心にお雛様が飾られます。この事業に合わせて五日市郷土館では、旧市倉家住宅などを利用して江戸時代から明治期に作られた普段見ることのできないたいへん貴重な雛人形を多数展示します。また、今年度は初めての試みとして、昭和2年に日本の雛祭りに合わせて日米親善のために旧戸倉小学校に送られた友情人形(通称青い目の人形)を展示します。



今年度の展示の様子

来年度は、明治150年の企画事業として、郷土あれこれに旧五日市町の医師野口浅次郎氏の12冊の日記から、近代日本人の生活像の一端を窺う特集原稿を掲載する予定です。また、館に寄贈された「社則」(嚶鳴社五日市支社社則)を初公開するとともに五日市の自由民権運動を紹介する企画展示を行う予定です。ぜひ、ご来館下さい。

平成29年度の活動報告

清瀬市郷土博物館 中野 光将

清瀬市郷土博物館は、平成29年に2つの大きな展覧会を開催しました。1つ目は、最新の映像技術を駆使したアトラクションを用意し、子どもから大人まで楽しめる参加体験型企画展として夏休み期間に開催した「最先端映像技術展」です。

この展覧会では、小・中学生に最先端映像技術を通して、コンピューターへの興味関心を高めることを目的として、人の身体の動きに合わせてコンピューターが自動的に反応するインタラクティブシステムコンテンツ及び360度のカメラアングル映像を自由に操作でき、高品質のVR(バーチャルリアリティ)の世界を体感できるアトラクションを提供しました。

郷土博物館としては、初めての試みでしたが、来館者は3,400人以上あり、アンケートにも、来年もまた開催してほしいとの回答が多く寄せられ、今後も、子どもを対象とした事業を企画したいと思っています。



2つ目は、平成29年3月に「清瀬のうちおり」469点が国の重要有形民俗文化財に指定されたことを記念して開催された企画展「清瀬のうちおり重要有形民俗文化財国指定記念展 祝い着も うちおりで・・・」です。うちおりは、洋服が普及する以前の衣生活や、養蚕や織物を行った多摩地域の家庭の衣料事情を知ることができ、我が国の衣生活の変遷を考える上で重要なものとされています。「清瀬のうちおり」は、主に自家用として用いられた「着物」と「布地」からなります。この展覧会では、明治後期から昭和20年代の普段着や晴着として着用された長着を中心に、羽織、半纏、チャンチャンコ、短着、襦袢、帯などの他に、衣類の繕いに用いられた裂、原料の糸などを展示しました。

今後も、博物館では「うちおり」を大事に保管収蔵するとともに、周辺地域の織物研究の一助となるように調査及び公開を行っていく予定です。



「オオムラサキ増やし隊」について

東大和市立郷土博物館 原島 真二

■オオムラサキとは

オオムラサキはタテハチョウ科の大形の蝶である。環境省の区分では準絶滅危惧種であり、東京都区部からは1971年までに、多摩地区でも丘陵や山地を抱えない市では1960年代までに見られなくなったという。

切手の図案にもなり、鱗翅学会が国蝶としたのは1957年、それだけ人気の高い蝶である。里山が主な生息地域のため、環境保全のシンボルとしてもふさわしい蝶だ。

本種は、幼虫時にはエノキを食べる。成虫になるとコナラやクヌギの樹液を餌とする。このため、ある程度以上の緑地面積を必要とする。幼虫が冬越しするのは食樹のエノキの根元の落ち葉の中なので、根元に落ち葉が必要だ。

■博物館事業として取り組む理由

東大和市立郷土博物館は、狭山緑地に隣接している。この林には夏ともなればカブトムシやクワガタムシが多数見られ、週末ともなれば懐中電灯を持った親子が林に入る姿が見られる。2キロほど先には大きな商業施設もあり、そこでは虫かごに入ったカブトムシが売られている。同じとき一方で、狭山緑地のクヌギにはたくさんのカブトムシやノコギリクワガタが見られる。狭い市域の中で全く別の姿が見られるのだ。

雑木林で見られる常連の虫たちにオオムラサキも加えたいというのが本事業に取り組む理由である。現在でも、少ないながら狭山緑地では本種がクヌギの樹液に集まる姿が見られる。生息環境に手を加えることで増やせると考えたのである。

■雑木林の会の支援を得る

活動にあたりボランティアで狭山緑地の保全活動を行っている雑木林の会に相談をした。また、植物に明るい会員の方にエノキの保全について相談したところ、テープでマーキングをしていただいた。これにより下草刈から実生の伐採が免れ今後、木が増えることに期待が持てることとなった。

また、越冬幼虫の保護のためにはエノキの根元に柵を設け、落ち葉の飛散を防ぐことが有効である。その資材も林から得ることとし、モウソウチクの伐採や柱の資材となるヒサカキ、シラカシの伐採の支援もしていただいた。

■広報及び活動内容

平成29年7月1日の市の広報とチラシなどにより活動のPRを開始した。新聞でも取り上げられたことで、市外からの参加者も得ることができた。

第1回の会議は7月16日（日）で、「オオムラサキ増やし隊」第1回作戦会議として実施した。参加者は、市の内外を含めて14名であった。作戦会議としたのは、参加者の中から取り組み方針や活動内容についての意見をもらい、決めていきたいと考えたからである。オオムラサキに関する資料を紹介し、文献の抜粋コピーを配付して今後の取組み・活動について意見を

いただき、筆者の経験なども説明した。また、狭山緑地の見学を行い、エノキの所在位置などを紹介した。

7月の第2回の活動では、オオムラサキの見学を主眼としたが、雨模様の天気のためオオムラサキの姿は無かった。8月以降、活動予定日に雨が続き、11月になってようやく資材の調達からエノキの根際への柵の設置ができた。たった2本であるが、オオムラサキの飛ぶ姿を夢想できる足掛かりになった…と思われる。

今後、越冬幼虫の調査やエノキの増殖、他地域におけるオオムラサキ保全活動の調査などに取り組み、オオムラサキだけでなくエノキを植樹とするゴマダラチョウやヒオドシチョウがふつうに見られる林にして行きたいと考えている。



オオムラサキ



完成した根囲いで記念撮影

勸工寮葵町製糸場の図面の発見

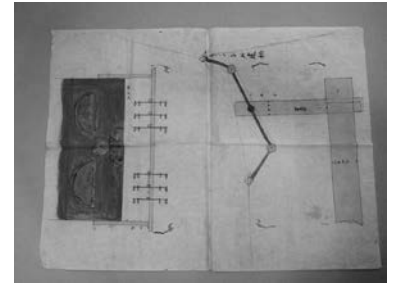
東京農工大学科学博物館 齊藤 有里加

東京農工大学科学博物館では所蔵資料の整理中、東京農工大学名誉教授故鈴木三郎寄贈未整理資料より、勸工寮葵町製糸場図面を発見しました。図面の存在は、同氏の著書『絵で見る製糸法の展開』（日産自動車株式会社繊維機械部、1971年）内で図版及び資料解説が掲載されていましたが、実資料の存在は知られていませんでした。今回2017年3月に東京大学鈴木淳教授らの協力を得て調査を実施した結果、図版と資料が一致し、掲載図版の原資料であることが明らかになりました。資料は、41点（4枚綴、17枚綴、19枚綴各一点含む）の図面で構成され、製糸器械の構造や、器械の配置などが詳細に描かれています。封筒には表に「教師イタリア人勸工寮伝習製糸器械絵図」、裏に「海老原章利」と墨書きされ、図面に海老原の割り印があり、同氏が作図したものと考えられます。東京農工大学科学博物館浮世絵展示室内において、資料を一部公開しました。（期間：2017年10月14日 土～11月30日 木）

勸工寮葵町製糸場(明治6年)はイタリア式が採用され、富岡製糸場に次ぐ官営二番目の洋式製糸場でしたが、資料が少なくこれまで詳細が明らかにされていませんでした。図面は、縮尺や寸法が記載され、綴状のものには煉瓦構造物が一段ごとに配置し記されるなど、繰糸設備の全般が理解でき、寸法を元に再現が可能なほど詳細に記録されています。イタリア式が

採用され、水車を動力とし、焚火利用の煮繭や繰湯加熱設備が備わっていますが、簡易な設備ではなく、工場として相応の施設規模を持つものであることが明らかになりました。富岡製糸場と並んで製糸の工場制工業化の起点となったイタリア式工場のあり方を、初めて具体的に示した重要な史料であり、また、鈴木教授は図面の作成者が、小田県（現在の岡山・広島県の一部）から技術伝習の目的で派遣された海老原虎太郎であると推定し、東京から地方に洋式技術が普及した過程を具体的に示す史料としての価値を持つ可能性が高いと指摘しています。

勸工寮葵町製糸場は、現在の虎ノ門付近にありました。現在はオフィスビルが立ち並び、外堀も埋め立てられています。今後はデジタルアーカイブ化を進め、画像を活用しどのように水車動力で製糸していたのかその解明に期待が高まります。（2017年10月東京農工大学プレスリリースより一部抜粋）



ケンレル建柄（上からみた繰糸台と糸かけの機構の図）

伝 檜原城主 平山氏重所用 五枚胴具足

檜原村郷土資料館 清水 達也

檜原村郷土資料館にて御霊檜原神社総代人久保田司氏より借用し展示しておりました「伝 北条氏照家臣 平山氏重所用 五枚胴具足」が、10月1日～12月24日までの期間小田原城天守閣特別展「小田原北条氏の絆～小田原城とその支城～」において展示をさせて頂きました。

平山氏重とは北条氏照の家臣で檜原村にかつて存在していた檜原城の城主で、豊臣秀吉の小田原征伐においては檜原村にある水の久保という所に陣を張っていたといわれ、小田原城が降伏した際に村内の千足にて自刃したと伝えられる人物です。

この甲冑は平山伊賀守氏重所用と伝えられる具足で、「新編武蔵風土記稿」には、檜原村の千足という地区にあった長泉寺



小田原城天守閣特別展「小田原北条氏の絆」展示室にて撮影

の境内で寛永年間（1624年～1644年）に出土したと記されているもので、現在兜鉢は失われていますが「新編武蔵風土記稿」には、62間筋兜と記されており、近年まで残存していたとも記

されています。残る鞆（しころ）は、覆輪を施した鉄板六段で紺色の威が良く残っています。胴は、前胴が失われているが鉄板横矧ぎの五枚胴具足で、覆輪を持つ。尚、胴裏には、横矧板1枚ごとに線刻が刻まれています。草摺は鉄板五段七間が残り、漆や威紐が残るものもあり、覆輪を伴う装飾性などから上級者の甲冑であろうと推察されています。



書籍『小田原北条氏の絆～小田原城とその支城～』より本文・写真引用

檜原村で現存しているこの甲冑は戦国期の残された数少ない遺品といえるもので、檜原村指定文化財（民俗文化財）への指定に向けて現在調整を行なっています。

企画展「小貫政之助～生きた時代の証言～」と記憶の収集について

(公財) たましん地域文化財団 藤森 梨衣

たましん歴史・美術館では、平成29年度春の企画展として、「小貫政之助～生きた時代の証言～」展を3月21日(火)～6月25日(日)まで開催しました。当美術館は、多摩地域の文化芸術を研究対象としています。本展では、福生市に暮らした画家・小貫政之助(1925-1988)について、親交のあった方々からの寄贈作品と借用資料を中心に、関連作家からのご出品と、同時代の作家を所蔵品から採り上げるにより、その芸術をご紹介しました。

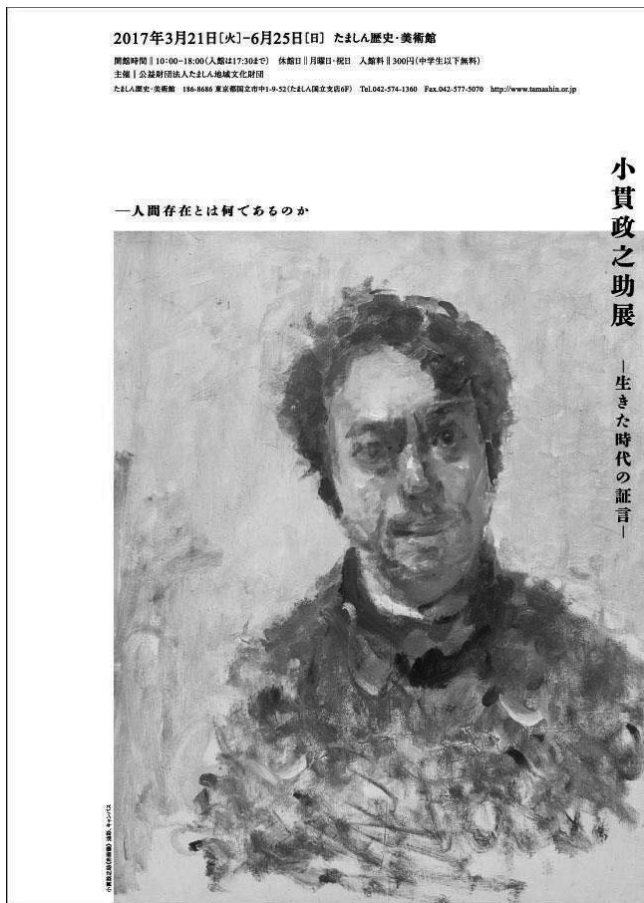
「自分の生きた時代の証言者であるために、時代の表情、心理、を表現したい」という意思が込められ、作品の内容を理解するヒントになると考え、副題に掲げました。戦争画や絵日記といった直接的な方法ではなくとも、絵画は、作家の感受性を通してその時代感情の発露になり、時代の様相があらわされます。自分の創り上げた芸術のなかに、時代の証言を残したいという思いが、作品から発せられているかのようです。

また、本展の企画にあたっては、ご親戚、親交のあった方々、お弟子など、縁のある方々へ多角的に聞き取り調査を実施することで、作家の人柄や人物像、交友関係、資料の行方など多くの貴重な情報を得ることができました。そのなかで、資料の芸術性を正しく理解し、懸命に保管してきた周囲の方々の熱意にも触れ、資料の収集と保存、研究と活用の重要性を改めて考える機会ともなりました。

近年、文化関係資料のアーカイブを構築する動きは活発になりつつありますが、この作家のように没後30年を迎え、関係者も高齢化するなかで、作品調査や文献調査はもとより、かたちの無い“記憶”の収集は、美術館活動の根幹を成す重要な課題だと考えます。

そして、展覧会は収集した記憶を記録へと変換し、つぎの世代の記憶へと繋げる役目を担います。本展では、広報にも力を入れ、案内看板の増設、インターネットの無料広報媒体も活用することで、10代～30代の若い世代の来館者の増加がみられました。鑑賞者からは、「この作家を初めて知り、感動しました」「芸術に真摯に取り組まれたこの画家を、多摩の誇りに思います」などのご感想が寄せられました。

今後も、地域の芸術家を紹介する「99歳の彫刻家・関頑亭展」や、資料公開展、生誕記念展などを継続して開催する予定です。日々、地域の方々の声に耳を澄ませ、地域文化を継承していけるよう各種事業に取り組んでまいります。



小貫は、政治・経済・文化が大きく揺れ動いた激動の昭和の時代を、絵筆のみで生きた画家です。鋭い描線、抑制された色彩を用いて独自の裸婦像を確立しました。展示構成は、「第一章 小貫政之助～人と芸術～」、「第二章 同時代の表現者たち～たましんコレクションより～」、「第三章 栗原一郎～師・小貫政之助の背中～」の章立てとし、補章として「黒岩重吾」「妻・妙子」を加え、初期の素描から版画、書、中期から晩年の油彩、資料として写真、書籍、詩集等を展覧し、表現の軌跡を辿るとともに、作品と生涯について一望しました。

作家が繰り返し述べた「生きた時代の証言」という言葉には、

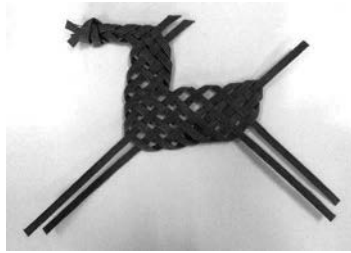


平成29年度の活動報告

町田市立博物館 村上 智美

町田市立博物館の平成29年度は、職員が“職人”になった1年間でした。

まずは展示ですが、例年のように5回の企画展を実施しました。その際展示内容の理解を深める目的で、展示作品に関連した体験講座を行っていました。本年はそこに加えて鑑賞するだけでなく、博物館で体験してもらうアクティビティを重要視し、「博物館で年中行事」という体験講座を行いました。これは、クラフトテープで七夕午を編んだり(図1)、UVレジン(レジン液を型に流し込み紫外線



(図1)

で様々に形成するもの)でクリスマスオーナメントを作成したりと、四季折々のイベントを博物館で体感・体験していただき、1年間に何度も訪れていただくための企画です。職員自

ら、竹や籠などを編む技術を習得し午の形に編むようアレンジする、あるいはUVレジン形成のコツを掴むべく試作する姿は、まさに職人のようでした。

平成29年7月に開催した「黄金の地と南の海から一東南アジア陶磁の名品一」からは、「マルのつく日は缶バッジ・デー」という企画を始めました。展覧会開催中の10日・20日・30日(ゼロ=マルの付く日)と丸い缶バッジをかけて、展覧会出

品作品画像をモチーフにした缶バッジを先着20名の来館者に差し上げるというものです(図2)。

担当学芸員の強い思い入れのある作品、おススメの一品など、バッジの円中にうまく収まるよう、なおかつ作品の魅力を伝えられるよう、楽しみながらデザインをしています。3ヶ月間に



(図2)

わたって開催している展覧会では、家内制手工業さながらに合計120個の缶バッジを手作りします。さらにバッジを5つ集めると、特大のプレミアム缶バッジをプレゼントするという、缶バッジ収集の楽しさと、リピーターになってください!という工夫しました。

また、平成29年7月からは、ツイッターを開始しました(ツイッターアカウント名@machida_museum)。画像やおすすめポイントを紹介することができる絶好の機会となっており、学芸員のみならず職員みんなで、博物館の魅力をアピールしています。フォロワー(当館からのお知らせを受け取られる方)も少しずつ増え、博物館のファンが増えている喜びを感じています。今後も引き続き博物館の魅力を発信していけるよう計画しています。

企画展「栄村に行こう!」- 姉妹都市関連事業の実施 -

武蔵村山市立歴史民俗資料館 堀部 由美子

平成2年(1990)に、武蔵村山市が長野県栄村と姉妹都市盟約書が締結されてから25周年を迎えたことを記念して、姉妹都市・栄村の魅力を紹介する企画展「栄村に行こう! - 姉妹都市25周年記念 -」を、平成27年度に実施しました(会期:平成28年1月15日~3月31日)。

これは、日本でも有数の豪雪地帯である長野県栄村の自然や文化、特に冬に使われる民具資料等から紹介するものです。その後、本企画展をシリーズ化し、今年度で第3弾目となります。

平成28年度には、企画展「栄村に行こう!! - 栄村村制60周年記念 -」を開催(会期:平成29年3月11日~4月9日、好評につき5月14日まで会期延長)。平成23年3月12日の長野県北部

地震被害から復興へと進む栄村の様子や、「図でみる栄村の歴史」コーナーのほか、なかでも、栄村の遺跡を紹介するコーナーでは、栄村より借用した縄文時代の土器や石器などの考古資料を展示しました。

そして、今年度平成29年度には、第3弾目となる、企画展「栄村に行こう!!! - 栄村の「ハレの日」の祝膳と郷土料理 -」を実施しました(会期:平成30年1月27日~3月31日)。

本展では、「3時間半で行ける秘境」をキャッチフレーズに、栄村の魅力をより身近に感じてもらえるよう、雪国栄村ならではの郷土料理やコメ作り、さらには、栄村から借用した膳碗資料を用いて、ハレの日の御祝い膳の再現などを行っています。



企画展「栄村に行こう」の展示風景(左:平成27年度、中:平成28年度、右:平成29年度)

2020年の姉妹都市30周年記念に向け、栄村の魅力を発信し、栄村へ足を運んでみようというきっかけづくりのため、今後も企画展を継続する予定です。

近年の展示活動報告

立川市歴史民俗資料館 高橋 学

平成28年度・29年度は秋季企画展として、それぞれ「しばざき・すながわの絵図～地図で見る立川の歴史～」、「立川の水路を探る～玉川上水から緑川まで～」を開催しました。ともに開催期間は10月下旬から12月上旬までのおよそ7週間でした。平成28年度の「しばざき・すながわの地図」展では、平成25年に立川市指定有形文化財となった「柴崎村絵図」、「砂川村絵図」「砂川村野取反別帳附砂川村絵図」に加え、「柴崎村野帳附柴崎村地図」（立川市指定有形文化財 昭和45年）をまとめて展示・公開しました。タイトルの「しばざき・すながわの地図」とは、おおよそ現立川市の南半は旧柴崎村、北半は旧砂川村であったからです。

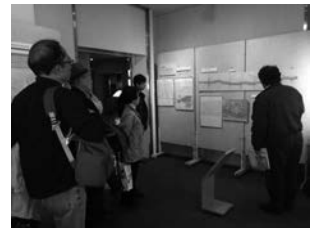
明治初期の地租改正時の地引絵図である「柴崎村野帳附柴崎村地図」、「砂川村野取反別帳附砂川村絵図」は、小さいものでも1辺3m近く、大きいものでは一辺5m以上あります。そのままでは展示することが難しいため、デジタルカメラで四方から撮影し、写真画像編集ソフトを用いて合成して、およそ1/5もしくは1/6に縮尺したパネルを作製し展示しました。柴崎村地図は6枚、砂川村絵図は11枚あるので、それぞれ2回に分けて展示しました。この展示は、絵図・地図を紹介することに主眼を置き、展示スペースの関係もあり、これらの地図・絵図からどのようなことが読み取れるのかなどには踏み込めず、今後の課題でした。

パネル展示した地引絵図には、地番の他に地目や道、川、水路などが記載されており、明治初年時の水路網を知ることができる。翌29年度にはこの水路網を展示に活用する「立川の水路を探る」展を開催しました。

サブタイトルにある玉川上水・緑川のほかに砂川、殿ヶ谷、柴崎、中藤・平兵衛の各分水、九ヶ村用水など江戸時代に開削された水路や源五右衛門分水や田用水など明治時代に造られた水路、玉川上水開削以降に何回も人工的に流路を改変されている残堀川を取りあげました。各水路とも現在の地図に流路をおとしこみ、流路変更があるものについては、推定を含めその地図に示しました。他に展示室からやや離れた廊下に関連写真を一括して展示しました。

関連イベントとして講演会「武蔵野の開発と玉川上水の分水～立川市域を中心として～」に玉川上水や分水研究の第一人者である小坂克信氏(立川市文化財保護審議会委員)を講師に迎えて開催しました。20代～80代の幅広い世代の方、およそ50名が参加し、3回開催したギャラリートーク(展示解説)においても、当館開催のギャラリートークとしては多いおよそ20名の参加者があり、玉川上水やその分水に高い関心があることがうかがえました。

平成26年度以降の秋季企画展では展示のほかに、講演会・ギャラリートークを開催して企画に「厚み」を持たせており、できるだけ今後も続けていきたいと考えています。



国立天文台の文化財イベント

国立天文台 天文機器資料館 根本 しおみ

国立天文台では、今年度は秋と春の2回、文化財イベントを行います。秋は文化財ウィークに合わせて、11月3日に台内の9つの登録有形文化財・重要文化財をガイド付きで巡る文化財ガイドツアー、さらに、4日、5日の2日間、太陽塔望遠鏡(別名アインシュタイン塔)の特別公開を行いました。

太陽塔望遠鏡は、登録有形文化財である建物自体が、一台の望遠鏡でもある、という大変ユニークな建築物です。この望遠鏡は、太陽の「スペクトル」を観測することで、太陽のことを調べてきました。「スペクトル」などという言葉はあまり耳にしません、天文学の研究ではよく出てくる手法です。太陽や星の「スペクトル」から、どんなことがわかるのか、今回は分光器やナトリウム光源装置などを準備して、お客様に「スペクトル観察」の体験をしていただきました。(写真)

春は春分の日(3月21日)に合わせて、昨年にも好評だった春分の日ガイドツアーと太陽塔望遠鏡特別公開(3月24日・25日)を行う予定です。

「春分の日」の決定に国立天文台が深く関わっていることをご存知でしょうか?国立天文台は天文学の研究だけではなく、「日本の暦を決める」という仕事も担っています。国立天文台の敷地の中には、暦の決定に関連した



直視分光器でナトリウムランプのスペクトルを観察

観測施設が点在しています。春の文化財イベントでは、国立天文台を別の一面からみていただこうと思います。

「日野用水開削450周年記念特別展～日野人が守り育てた緑と清流～」の開催

会期：9 / 30 (土) ～ 12 / 3 (日) 於日野市立新選組のふるさと歴史館

日野市郷土資料館 秦

「多摩の米倉」と呼ばれた程、かつては米作りが盛んであった日野。それを物語るかのように、市内には網の目のように用水が張り巡らされ、現在でもその総延長は約116kmに及びます。湧水点も124か所あり、日野市全体の面積に河川・用水など水辺の占める割合が約14%にのぼることから、日野は都内でも有数の水と緑のまちとして、平成7年(1995)3月、国土庁から「水の郷」に選定されました(都内では日野市と墨田区2か所のみ)。そして去年は、戦国時代の永禄10年(1567)に日野用水が開削されたといわれて450年に当たることから、当館では、これにちなんで、日野市立新選組のふるさと歴史館を会場に、特別展を行いました。

特別展では、日野用水の歴史的変遷を示し、用水開削以前の状況を示したことで、日野用水が単に450年前にできたということではなく、日野用水の開削によって、日野人の原風景ともいえる「辺り一面の田んぼ風景」(広域水田景観)が出現したこと、そして日野宿を含む現在の市域の北半分ができあがり、「日野は多摩の米倉」といわれたその後の日野市発展の礎が、この時、築かれたことを周知しました。

しかしその用水も、高度経済成長の中でいったんは汚れましたが、市民と行政の協力によって清流を取戻し、現在は貴重な自然の宝庫となっていることを標本や写真で紹介しました。

また会期中の催しとしては、あきる野市文化財保護審議会委員の渋江芳浩氏による講演会「日野市域を流れる用水の謎～その開削時期を考える」や日野用水をバスと徒歩で現地確認する見学会を行い、どちらも好評を博しました。

しかし昨秋は雨にたたられ、子ども向けの体験学習会として企画された「子ども集まれ!よそう森掘で遊ぼう!ー用水生き物探しー」は、台風のため安全面から中止となってしまいました。「JR日野駅直下、日野煉瓦造の山下堀アーチコルベルトに潜る!」見学会も、雨のため、山下堀アーチコルベルトに潜ること自体は中止となりましたが、その代替案として、JR日野駅周辺に残る日野煉瓦構造物についての詳細な見学会を行ったことにより、参加者は満足して帰途につかれ、臨機応変の対応と主催者側の誠意を見せることができたと思います。



多摩川鉄橋橋げたの日野煉瓦を計測する参加者

この特別展を通じて、用水が日野人にとっての「宝」として代々守られ、これからも守り育てていくべきものであるということ、市民の方々や観覧者の皆様に広く周知し、考えるきっかけとなったのではないかと思います。

平成29年度活動報告

帝京大学総合博物館 堀越 峰之

開館2年目となり、今年度は活動の幅をさらに広げることができました。ここでは平成29年度に実施した主な展覧会をご紹介します。

帝京大学薬学部創設40周年記念「医療のための薬学には新しい未来を - 帝京大学薬学部のあゆみと研究最前線 -」(平成29年9月4日～10月22日)

昭和52年に創設された本学薬学部の歴史と最新の研究成果を紹介する展覧会です。薬や薬剤師の仕事、貴重な生薬の標本、新薬の開発や新たな製剤技術の開発など本学薬学部の活動成果を凝縮した展覧会となりました。



「薬と薬剤師の仕事」の展示

受贈記念「神工鬼手 榎倉香邨の書 - 思索と挑戦の軌跡 -」(平成29年10月30日～12月25日)

本学書道研究所に現代日本のかな書道家を代表する榎倉香

邨(大正12年～)の作品が一括で寄贈された記念として開催した展覧会です。榎倉香邨氏の書業を追うことのできる初の展覧会となり、書道関係者をはじめとして多くの来館者があり、好評を博しました。

南の楽園マリアナ諸島の真実 あなたはゴム・サイパン・ロタ・ティニアン島を知っていますか (平成30年1月16日～20日)

本学教育学部中山京子研究室が主催した展覧会です。ゴムやマリアナ諸島、そこに住む先住民族チャモロの歴史や文化を紹介する内容です。研究室に所属する教員と学生が一丸となって展覧会実施のために必要な作業(展示ストーリー、ゴムでの資料収集、原稿執筆、会場図面作成など)を全て行いました。完成した展覧会場は、プロ顔負けの素晴らしいものとなりました。短い会期でしたが一般の来館者のみならず、ゴムからもご来館頂きました。



プロ顔負けの素晴らしい展示になった「南の楽園マリアナ諸島の真実」

最近の事業報告 新指定重要文化財の展示と活用

くにたち郷土文化館 竹内 竜巳

くにたち郷土文化館では、平成29年度秋季企画展「国指定重要文化財 緑川東遺跡出土 石棒展」を、10月7日～12月10日の期間にて開催致しました。これは、平成24年6月30日に緑川東遺跡から出土した、4本の大形石棒（附土器残欠3点含む）が昨年9月15日に国の重要文化財に指定されたことを記念して、開催された企画展です。平成29年（2017）は、国立市市制施行50周年および公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団創立30周年を迎えているため、まさしく節目の一年となりました。

くにたち郷土文化館では、緑川東遺跡出土石棒4本を、発見翌年の平成25年4月27日～5月12日に実施されたトピック展示「くにたち最新発掘事情」や、同26年のくにたち郷土文化館開館20周年記念秋季企画展「くにたち発掘～最新の発掘調査から～」にて度々紹介してきました。また、同28年8月13日からは、当館常設展示室にて通年公開を行っています。



石材を触る体験コーナー

現在石棒4本は、くにたち郷土文化館の常設展示室にて展示中です。国立市の新たな顔ともいえる本石棒の持つ魅力や学術的価値を発信できるよう、引き続き精進したいと思います。



平成29年度秋季企画展「国指定重要文化財 緑川東遺跡出土 石棒展」展示風景

本企画展では、石棒4本を特別展示室へ移動し、平成29年に新指定重要文化財となりました、本石棒および土器残欠3点を中心に据え、石棒が持つ学術情報や、重要文化財に指定された要因等の情報を発信した他、市内の遺跡より出土した縄文時代の遺物を紹介しました。また、近隣各所（青梅市T-52・杉並区光明院南・立川市向郷・調布市上布田・八王子市北野・東村山山下宅部）および市内南養寺、谷保天満宮より関連する考古資料をご提供頂き、出土状況の違い（単独での出土や被熱・破損を伴うもの、2本セットでの出土等）や関係性を紹介しました。

また、小冊子や年表・マップ等の配布資料を充実させた他、レプリカを用いた重さ体験コーナー、身近なものから重さを体験できるキット、石材を触る体験、実寸大の長さで印刷した石棒を持ち、写真撮影が可能なコーナーを各種設置しました。

平成29年度 秋季企画展
国立市市制施行50周年記念事業
公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団創立30周年記念事業

国指定重要文化財 緑川東遺跡出土 石棒展

開催期間：平成29年10月7日（土）～12月10日（日）
休館日：10月12日（木）、10月26日（木）、11月9日（木）、11月24日（金）
9時～17時入館は16時30分まで
観覧無料

特別展示室 観覧無料

講演会

- ◆会 場：くにたち郷土文化館 講堂
- ◆定 員：60名（先着順）
- ◆申 込：10月10日（火）10時より電話にて
- ◆参加費：300円
- ◆対 象：小～中学生（小学4年生以下は要保護者同伴）

■ 緑川東遺跡とくにたちの縄文時代
10月29日（日）13時～15時30分
講 師：松田 豊（国立中央博物館学術部）
高橋 和文（国立中央博物館学術部）
小川 康（国立中央博物館）

■ 謎多き大形石棒を学ぶ
11月19日（日）13時～15時30分
講 師：松田 豊（国立中央博物館学術部）
五十嵐 彰（国立中央博物館学術部）
中村 賢一（国立中央博物館学術部）

体験学習会

- ◆会 場：くにたち郷土文化館 研修室
- ◆定 員：15名（先着順）
- ◆申 込：10月10日（火）10時より電話にて
- ◆参加費：300円
- ◆対 象：小～中学生（小学4年生以下は要保護者同伴）

■ 粘土で縄文土器を作ってみよう

- 解説と製作 11月4日（土）13時～16時
- 展示会 12月2日（土）10時～12時

※申込受付終了となります。
会場：東京都歴史文化財センター 講義室

観覧情報

- ◆ 所在地：国立市下町3丁目
- ◆ 開館時間：9時～17時（入館は16時30分まで）
- ◆ 休館日：10月12日（木）、10月26日（木）、11月9日（木）、11月24日（金）
- ◆ 問い合わせ：0426-22-1111
- ◆ くにたち郷土文化館

くにたち郷土文化館
〒187-0001 東京都国立市下町3丁目 TEL:0426-22-1111 FAX:0426-22-1112
URL: <http://www.kuzaidan.com/province/>

平成29年度秋季企画展「国指定重要文化財 緑川東遺跡出土 石棒展」ポスター

奥多摩水と緑のふれあい館 活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館 加藤 勝康

奥多摩水と緑のふれあい館は、小河内ダム（奥多摩湖）の湖畔にあります。入口を入っていただくと床面いっぱいの多摩川マップと、吹き抜けの輝くオブジェが、みなさんを出迎えます。「水のふるさと」では、奥多摩の歴史・民俗を紹介します。「水が生まれる」では、大切な水道水源林の秘密を楽しく体験でき、小さなお子さんにも人気の場所です。「水が集まる」では、小河内ダムの秘密と、周辺の豊かな自然を知ることができます。そして「水が輝く」では、迫力ある立体映像で、奥多摩の自然を体感することができ、さらに「水が広がる」では、館のマスコット“クリン”と一緒に水の旅を体験し、水に関する問題について考えます。「パノラマショップ」では、奥多摩の名産品を取り揃えてお待ちしております。最上階にある「パノラマレストラン・カタクリの花」では、湖を見ながら、奥多摩の郷土料理や小河内ダムカレー（1日20食限定）が味わえます。

水はどこからやってくるんだろう？

どうして蛇口をひねると、いつでも水が出て来るんだろう？

川はどこから始まるんだろう？

緑のダムってなんのこと？

奥多摩ってどんなところ？

どんな生き物がすんでいるの？

こんな疑問にお答えします。

水と緑と奥多摩を再発見してください。

【ふれあい館の催し物】

4月15・16日はソプラノ歌手による「春のミニコンサート」

6月1日から7日までは「東京都水道週間」で鉢植えの花と東京水道水を配布、7月29日は「夏のフラダンスショー」8月1日から31日まで「小河内ダム写真展」9月10日の「水源郷土芸能フェスティバル」では、小河内の郷土芸能である国指定の重要無形民俗文化財の鹿島踊や東京都指定無形民俗文化財の獅子舞の公開、10月15日には「ヘブンアーティスト」によるマジックとコメディーパーフォーマンスの公演11月11・12日には「都民交響楽団」有志の皆さんによる秋のミニコンサート、12月16・17日には「紡ぎ体験」を開催しました。平成30年3月11日には「川野の車人形」の公演を行います。

年間を通して、催し物を行っていますので、多くの皆様のご来館をお待ちしています。



小河内の郷土芸能「川野獅子舞」

『食』を考える企画展

多摩六都科学館 研究交流グループ 筋野 美穂

多摩六都科学館では、2017年10月21日からの31日間、秋の企画展『今晩なに食べる？～人のカラダは食べ物でできている～』を開催しました。会場では、来館者自身が昨日食べたものを出発点に、どんなものを選んで食べるか・どのように食べるのかを考え体験する機会をつくり、自分のからだへの興味関心を持つこと、また自分なりの食の判断基準で「食べる」行動につなげることを目指しました。展示は単なる情報提供ではなく、クイズやゲームの要素を持った問いかけから、自分の日々の食生活や食品、栄養についてどのくらい知っているかを振り返るしかけをつくり、展示体験を通して「どのようなもの食べるのか」を考え、他の人とも共有できるようにしました。

「食べ物を選ぶ」ことはだれでも常日頃行っていますが、選ぶ指標に食品表示や作物の旬、栄養などを取り上げ、来館者自身がふだん何を基準に選んでいるのかを考えてもらうコーナーをつくりました。意外にも旬がわからない方もおり、選ぶ基準を意識することで、生活の中の気づきを与えることができたように考えます。からだと食べ物をキーワード



にしたコーナーでは「味覚」を取り上げました。「鯉節削り体験」などを通して、日本食ならではの「うまみ」や「だし」といったおいしさを感じる要素やメカニズム、幼いころからの味覚の大切さを伝えました。

あわせて、地域の「食」に関する魅力発信を行いました。スタッフが科学館の運営母体である北多摩の5市（小平・東村山・清瀬・東久留米・西東京）の農家や市役所などを取材してまわり、地域の食・農の紹介コーナーで特産物や特色ある取り組みを紹介しました。来館者からは特に庭先販売や直売所の紹介が好評で「実際に行ってみます」との反応が多く、地域の魅力を伝えることができたと考えます。

また会場外でも、今年度の春からスタートした当館のカフェ『六都なおきち』と一緒に地元の野菜を使った企画展連動メニュー『めぐみやさいの一汁いちめし』を開発し、提供しました。多くの来館者に味わってもらうことで、考えて・選んで・食べる、の実践もできたと思います。

これからも、多摩六都科学館だからこそできる魅力的な企画展を作りだしていきたいと思っています。



平成29年度活動報告—旧下田家住宅の活用について—

羽村市郷土博物館 北原 瑞貴

平成29年は、当館に移築復元している旧下田家住宅が弘化4年（1847）に建築されてから170年を迎えた年でした。そこで今回は、国指定重要有形民俗文化財「羽村の民家（旧下田家）とその生活用具」に関連した展示や事業からご報告します。

旧下田家住宅は、江戸時代末期の多摩地域の典型的な農家の姿を残しており、近世～近代の生活を知る上で貴重な存在です。昭和57年に羽村町郷土博物館建設予定地（当時）に移築復元されて以来、常設の野外展示として公開されており、内部を自由に見学することができます。

一方、住宅と一括で文化財指定されている生活用具1,210点は普段は公開されていません。近年これらの生活用具があまり展示されていなかったこともあり、今年度は企画展「くらしの中のへび」（平成29年6月3日～9月3日）や特別展「食事の道具—デザインと機能から見た羽村のくらし—」（平成29年9月16日～12月23日）などで積極的に展示しました。

また、市内7つの小学校と連携し、3年生社会科の「むかしのくらし」の学習に対応した見学の受け入れを例年実施しています。旧下田家住宅は重要な見学会場のひとつであり、現代の

住宅との違いを通して「むかしのくらし」を体験的に学習できる格好の教材でもあります。

住宅内には、普段か

ら昭和時代半ば頃まで使われていた道具類が展示されていますが、「むかしのくらし」の期間中はさらに氷式冷蔵庫や鏡台など常設展示には無い家具を展示して、より生活感が出るよう工夫を凝らしています。今年度も市内7小学校の3年生488人が来館し、学芸員の解説を聞いたり、家の内部や昔の道具を調べたりしながら、先人のくらしぶりについて学びました。

近く茅葺屋根の葺き替えなども予定しており、旧下田家住宅が改めて注目される機会となればと考えています。



旧下田家住宅

狛江市立古民家園（むいから民家園）の活動と課題

狛江市立古民家園（むいから民家園）

狛江市立古民家園は、市内に残されていた江戸時代後期の農家建築である旧荒井家住宅主屋1棟を移築・復元し、平成14年4月に開園し、その後、同じく市内に残されていた幕末の建造物である旧高木家長屋門を移築・復元し、今年で開園15年を経過しました。

施設の管理面では、園内に移築・復元された2棟の建物が、いずれも市指定文化財（建造物）であること、また江戸時代に遡る伝統的な建造物が市内にはすでにほとんど残されていないことから、指定文化財を後世に引き継ぐために必要な維持・管理に留意していくことが課題となっています。とくに、旧荒井家住宅主屋は、移築・復元後15年が経過しており、建物の一部の痛みが目立つようになってきました。茅葺屋根については、毎年差し茅を行っていますが、杉板による下屋部分は、平成27年度から3ヶ年計画で修繕を行っています。今後、いずれは茅葺屋根全体の修繕、大規模な茅の葺き替えも必要になると考えられますが、修繕計画の見直し等が大きな課題となっています。

運営及び事業展開上のうえでは、2つの柱に留意しています。1つ目の柱は、地域の伝統的な年中行事に関する展示や、機織・染物など伝統的な生活技術について学ぶ教室・講座など、地域の伝統的な生活文化に触れる事業です。なかでも年中行事に関する展示は地味ではありますが、現在では三月、五月の節供とも、大きな段飾りを飾る家や鯉幟を上げる家、月見に団子を作り供える家もほとんどみられなくなってしまいま

した。このようななかで、伝統的な年中行事の様子とそのいわれについて展示し、行事で用いる団子作りや繭玉飾り作りなどを実際に体験することは、かつての地域の生活文化を振り返るきっかけになるものと考えています。また、長屋門では、場所も狭く、点数的にも限られてはいるものの、地域で収集した農具などを展示しています。現在では、身近に農地が見られなくなってしまいましたが、かつて農村であった地域の姿や生業の様子を紹介するものとなっています。

今後は、建物自体も展示のひとつであるという当然の認識をもって、改めて事業展開のなかに生かしていく必要があると考えています。

2つ目の柱は、能楽鑑賞会や能楽教室、生け花教室など、伝統文化に関する事業です。内容は、地域に特化されたものではありませんが、古民家園といった環境のなかで、伝統文化に触れる機会を提供していくことも、民家園のひとつの役割であると考えています。

また、民家園では、毎年小学3年生の体験学習を受け入れているほか、夏休み期間中には、子ども向けの教室・講座を集中的に実施しています。体験学習や子ども向けの事業への参加をきっかけに、子どもたちが民家園に足を運ぶだけでなく、親子連れで来園してもらうことで、親世代にも、かつての地域の様子を知っていただく機会となるような仕掛け作りが必要と考えています。

平成29年度活動報告

国立ハンセン病資料館 稲葉 上道

今年度当館では、次のような活動を主に行いました。

企画展は、例年通り春秋2回開催しました。春季企画展「ハンセン病博物館へようこそ」（4月29日（土）～7月30日（日））と、秋季企画展「隔離のなかの食 一生きるために 悦びのために」（9月30日（土）～12月27日（水））です。前者は、近年、全国のハンセン病療養所で相次いでいる社会交流会館等の博物館施設設置を受けて、それぞれの療養所の歴史や生活を伝える各館の概要を紹介しました。付帯事業として、各館を対象としたスタンプラリーと、各館の活動報告会を開催しました。後者は、療養所で入所者の食がどのように用意され、そこにくらす人々にとってどのような意味を持っていたのかをテーマに企画しました。付帯事業として、ギャラリートークと、療養所の栄養士を講師に招き、近年の給食の提供にまつわる工夫や配慮について講演会を開催しました。

教育普及事業としては、教員を対象としたハンセン病夏期セミナーと、小学生を対象とした夏休み宿題応援企画を開催しました。前者は、ハンセン病について主に概説の講義を行いました。後者は、隣接する多磨全生園のフィールドワークを行い、各自で写真を撮り、キャプションを付けてフォトブックを作成しました。

回復者や市民が企画する、ハンセン病に関する座談会や展覧会等の開催をサポートするため、研修室やギャラリーの貸出

しも、例年通り行いました。

また、開館以来行ってきた回復者による語り部活動は、体調不良等により開催が難しくなったため、後継事業として「ハンセン病体験講話」を立ち上げました。当館では、従来2人の回復者だけが語り部を担ってきましたが、多磨全生園の入所者や社会復帰者に広く依頼し、各人各様の体験を話していただくことになりました。聴衆も、これまでは団体来館者に限っていましたが、個人で参加できるように改めました。回復者の体験談をめぐり、当館はもちろんですが、話し手と聞き手双方にとって、大きな変化が生じた年となりました。

資料収集の面では、主に多磨全生園内からの資料受贈、全国の療養所の入所者から体験談の聞き取り等を行いました。保管については、文書資料のデジタル画像撮影とリスト作成、ネガフィルムのデジタル化、金属製品や木製品の修復措置等を行いました。

調査は、重監房資料館と協同で、栗生楽泉園において門衛跡地の発掘調査を行いました。昨年度行った多磨全生園の土塁と堀の測量・発掘調査と合わせ、調査報告書の刊行を準備しています。



「学芸員養成課程展示室・実習室」平成29年度の活動

首都大学東京 91年館（学芸員養成課程展示室・実習室） 土屋 健俊

当館は平成24年に展示施設として利用を開始しました。名称のとおり、本学における学芸員養成課程科目の講義や、館園実習に先立つ学内実習「博物館実習Ⅰ」が開講されています。

今年度の「博物館実習Ⅰ」内の展示制作実習では、受講生を2班に分け、片方の班は東京都の島々、もう1班はアノニマス・デザインをテーマに、展示制作に挑みました。このうち、アノニマス・デザインをテーマとした班の成果をもとに、実習成果展示として、今回初めて学内外の皆様へ公開することにいたしました。

実習成果展示「作り人知らずのデザイン展-発見!身のまわりのアノニマス・デザイン-」（1月18日～2月2日）

実験用フラスコ、登山用ピッケル、足袋などは、誰がデザインしたか分かりません。しかしながら、これらは機能的に優れ、普遍的な形を持っています。このような製品を、作り人知らずのデザイン、すなわちアノニマス・デザインと呼びます。

「博物館実習Ⅰ」の受講生たちは、全5回という限られた講義数の中で、身のまわりにあるアノニマス・デザインを探し求めることから始め、解説の執筆やパネルデザイン、展覧会の名称やキャッチコピーの検討などを行いました。その後、その中

から有志を募り、講義時間外で実際に展示物を揃え、配置を検討するなどして完成したのが、本展となります。

大雪などの悪天候が重なったにもかかわらず、学生・教職員の他、多くの地域のみなさまにもお立ち寄りいただき、本展に関わった受講生にとっては、とてもよい経験となったのではないかと考えています。

その他、本年度は教員の最新の研究成果に基づき、常設展の一部展示替えも行いました。今後も常設展・企画展問わず、よりよい学芸員養成教育と、研究成果の学外への積極的な公開を目指して行きたいと考えています。



実習成果展示冒頭、腕時計や金魚鉢が展示されています



展示風景、中央左にはカラーコーンが展示されています

平成29年度の企画展示について

東京都立埋蔵文化財調査センター 小西 絵美

東京都立埋蔵文化財調査センターでは、平成29年度企画展示『東京発掘 江戸っ子のくらしと文化』を平成29年3月19日から平成30年3月11日まで開催しました。都心部の遺跡の発掘調査では、ほぼ間違いなく都市「江戸」の痕跡が発見されます。屋敷跡や墓地、大規模な土地の造成といった地面に残された痕跡に加え、そこに暮らした人々の生活道具なども数多く見つかり、その内容は非常に多彩です。「江戸時代」と聞いて思い浮かべるイメージは十人十色だと思いますが、遺跡からの出土品を通じて、今まで知られていなかった江戸の姿を描き出すことをこの展示の趣旨としました。

展示は大きく4つのテーマに分かれます。【Ⅰ. 江戸を作った技術】では、「台場を掘る!」と題し、品川台場（第五）遺跡における西洋式砲台陣地築造の土木技術を紹介しています。【Ⅱ. 日常生活の多彩さ】では、「考古版江戸世帯道具尽くし」、「江戸食べ物事情」、「壺塩屋ブランド大合戦」として、生活の幅が広がった江戸時代だからこそ使われた生活道具や全国各地から集まる珍味や調味料などを取り上げています。【Ⅲ. 豊かさがもたらすもの】では、「江戸のたしなみ」、「神よ! 仏よ!」、「子供の成長と遊び道具」、「江戸市中のペット」の4つのサブテーマを設けました。江戸時代には漆芸や金工といった工芸

技術が発達し、これらは「粹」や「見栄」といった江戸特有の文化へとつながっていきます。また、泰平の世がもたらした安定や豊かさは、子供を社会的な存在として認知し、動物を愛玩する習慣も定着しました。【Ⅳ. 成長する江戸】では、「拡大する流通ネットワーク」というサブテーマのもと、やきものを例に江戸と全国各地をつなぐ流通網の発達を紹介しています。江戸に流通したやきものは国内のみならず、中国や東南アジアなどの国外製品も含まれていて、国際都市としての基盤が既にこの時代に築かれていたことを物語っています。

企画展示の関連イベントとして、全3回の文化財講演会を行ったほか、9月10日に泥面子を作って遊ぶワークショップも開催しました。企画展示で江戸時代をテーマとする展示は初の試みでしたが、見学者には概ね好評だったようです。今回の企画展示は、知っているようであまり知らない「江戸時代」を身近に感じてもらう良い機会だったと思います。



平成29年度企画展示チラシ

平成29年度の展覧会報告

江戸東京たてもの園 丸山 はるか

江戸東京たてもの園では、30棟の復元建造物を移築・保存・展示を行うと共に、年間3～4本の展覧会を開催しています。今年度も、「多摩地域の歴史」「建築」「所蔵資料」をテーマの柱にした展覧会を実施しました。

■特別展「川崎平右衛門―武蔵野新田開発の立役者―」

会期：平成29年2月7日(火)～5月7日(日)

多摩地域の歴史を語る上で欠かすことのできない人物であり、小学校の郷土学習に取り上げられている川崎平右衛門の事績を、文献資料と図表パネルで紹介しました。府中市及び小金井市と共催し、出品協力や広報活動などの協力体制を組み、地域ゆかりの人物を取り上げることで、多摩地域全体の成り立ちや魅力をわかりやすく伝える機会となりました。

■公益財団法人東京都歴史文化財団連携事業 特別展「世界遺産登録記念 ル・コルビュジエと前川國男」

会期：平成29年5月30日(火)～9月10日(日)

※東京文化会館会場は 5月31日(水)より開催

国立西洋美術館の世界文化遺産登録1周年を記念し、設



ミュージアムトークの様子(「世界遺産登録記念 ル・コルビュジエと前川國男」関連企画、平成29年8月26日)

計者のル・コルビュジエ、そして彼に直接学んだ建築家・前川國男の作品や建築観を、模型や図面・写真などで紹介しました。また、当園復元建造物「前川國男邸」の特徴を再認識する、よい機会となりました。当展覧会は、東京都歴史文化財団に所属する当園と東京都美術館及び東京文化会館の連携事業として、館を横断した展示と関連事業を開催しました。

■「武蔵野の歴史と民俗―旧武蔵野郷土館収蔵資料展―」

会期：平成29年9月26日(火)～平成30年3月4日(日)

当園の前身にあたる「武蔵野郷土館」より移管された資料を紹介する展覧会を実施しました。展示では、同郷土館の成り立ちにつながる「武蔵野博物館」及び「東京郷土資料陳列館」を取り上げると共に、「土製耳飾」(調布市下布田遺跡出土：国指定重要文化財)をはじめとした考古資料、生業や生活、信仰、娯楽に関する民俗資料など、約250点を紹介しました。

関連企画として、立川市砂川地区伝承民謡保存会による「棒打ち唄の実演と体験」を実施し、展示資料「くるり棒」の使い方や労働の際に歌われていた唄についての理解を深める機会をつくることができました。



「棒打ち唄の実演と体験」の様子(「武蔵野の歴史と民俗」関連企画、平成30年1月6日)

最近の活動報告 今年度開催の特別展について

八王子市郷土資料館 佐藤 友紀

八王子市は平成29年に市制施行100年を迎え、また郷土資料館も開館50年を迎えることができました。

郷土資料館は、建設のきっかけともなった市内の陶芸家井上郷太郎氏の寄贈コレクション(考古資料)を中心に、約2,500点の収蔵品でスタートを切ってから50年を経て、今では約10万点を超える収蔵量を誇っています。

これに伴い、今年度は市制施行100周年・開館50周年を記念した特別展を2件開催いたしましたので紹介します。

【特別展①「学芸員のおすすめ! 蔵出し収蔵品展」】

(会期：平成29年4月1日～5月31日)

本館が開館以来50年という時間をかけて集めた膨大な数の資料。今回の展示では、これらの膨大な資料の中から、学芸員と展示ガイドボランティアがテーマを決め、「これは見て欲しい!」と思う資料をチョイスして展示を行いました。

主な展示物は「八王子千人同心の陣羽織」や「東大寺の瓦」、八王子に伝えられてきた多種多様な品々と全国的にも著名な井上コレクションの逸品など約80点を、一挙展示いたしました。

通常、本館の特別展は一定の時代やテーマを取り上げることが一般的で、今回のように時代やテーマにとらわれない特別展は初めての試みでしたが、結果として様々な時代・テーマの資料で構成された展示は、多くの方に好評をいただくことができました。



特別展「学芸員のおすすめ! 蔵出し収蔵品展」
テーマ「千人同心のよそおい」展示資料：八王子千人同心の陣羽織

【特別展②「八王子百年の彩り」】

(会期：平成29年9月16日～11月26日)

大正6年(1917)に八王子町が市となって今年度で100年。本特別展では、「市制施行のころ」「八王子の発展を支えた織物業」「戦後の発展とオリンピック」など、八王子市の百年の歩みを写真や資料を交えて紹介しました。特に各時代を彩ったカピタン織や多摩結城といった織物や八王子の名誉市民ら本市ゆかりの人々についての作品や資料、資料館開館当時のポスターや入館券など展示いたしました。

通常は展示室一室のみで開催しているものを、一階の常設展示場全体へと大幅に拡大し、約700点の資料を展示いたしました。

また関連講座として「映像でみる昭和の八王子」も開催し、学芸員の解説の下、資料館の所蔵する3本の映像資料(①米軍撮影の敗戦直後の市街地映像、②織物工場への集団就職幹旋のために織物組合と大手銀行で制作した当時のリクルート映像、③1964年東京オリンピック時に本市で制作した記録映像)を上映いたしました。

展示の様子は新聞・NHKテレビ「首都圏ネットワーク」・ケーブルテレビ等で紹介されました。また今回展示した本市ゆかりの医師「肥沼信次」が過ごしたドイツのヴリーツェン市(今年度、本市と海外友好交流都市となった。)の市長一行も来館し、展示をご見学いただきました。

見学者からは「八王子市誕生とその後の歩みがわかりやすい。」との声をいただくとともに、展示図録も好評でした。

今後も多くの方に郷土資料館に興味や関心を持っていただけるように企画・事業を展開していきたいと思っておりますので、ご期待ください。



特別展「八王子百年の彩り」展示風景

区市町村連携による共催展示の試み

福生市教育委員会教育部生涯学習推進課文化財係 田中 愛誠

<はじめに>

当室では、平成29年度に企画展示4本、特別展示1本を開催いたしました。本稿では、この中から企画展示「西多摩の埋蔵文化財」を取り上げて、その経過をご報告いたします。

なお、特別展示「福生むかし絵Ⅱ」に関しましては、特集「地図資料の活用」内において、『記憶画展示の可能性について』として題して寄稿しておりますので、あわせてご一読いただけますと幸いです。

<連携までの経過>

この展示は、青梅市、福生市、羽村市、あきる野市が、平成29年度埋蔵文化財担当者連絡会の幹事を共同で務めたことが契機となり実現したものです。

幹事会における担当者間の何気ない会話の中で「せっかく共同で幹事事を務めるのだから、この機会に埋蔵文化財に関する展示を実施してはどうか」という声があがりました。その結果、ぜひ共催展示を実施しようという運びとなり、各担当者が所属組織内での調整をおこなった上で、徐々に企画が具体化しました。



西多摩の埋蔵文化財展

平成30年 1月27日(土)～4月15日(日)

福生市郷土資料室

午前10時～午後5時 入館無料
月曜日休館(祝日の場合は開館し次の平日休館)
福生市熊川 850-1 電話: 042-530-1120
http://www.museum.fussa.tokyo.jp



企画展示ポスター

<展示について>

企画展示「西多摩の埋蔵文化財」展は、前述の4市が共催した展示(以下、「共催展示」とする。)であり、主に縄文時代中期の考古資料を中心に約82点を展示しています。

各市における同時代の代表的遺跡から出土した遺物を横断的に提示し、西多摩地域で発見された埋蔵文化財を知る機会としていただくとともに、同時代、近隣地域に使用された道具や装飾品に表象される事象の同一性、差異性についても思索を深めていただくことをコンセプトとして、展示構成を工夫しています。



土器をコンセプトにした展示コーナー

<展示までの道のり>

共催展示の場合は、通常の単一博物館で実施する展示よりも、展示までに多くの調整が必要でした。

通常は、展示内容が決まれば方法、場所などの制約を考慮して出品する資料が決定されます。共催展示でも同様ですが、共催展示では出品される他市の資料が各担当者に提示されたことが誘引となって展示内容、方法、場所、資料を再検討することがたびたびありました。また、解説パネルやキャプション作成においても、それぞれが持ち寄るといった方法をとったため、表現や内容の統一や調整をおこなうことが不可欠でした。

<終わりに>

今回の共催展示は、行政会議の幹事をともに務めるという機会に始まり、埋蔵文化財行政担当者が博物館展示担当者でもある稀有な状況から生み出されたものです。そのため、通常は連携展示のきっかけを作ることに困難さをともなうと思われる。

しかし、共催展示は単独博物館ではなし得ない、多様な内容の展示内容を実現できます。小規模な公立博物館では収蔵している資料には限りがあります。資料借用のリソースも限られており、こうした状況下で魅力的な展示を実現する方法として、今後さらなる広がりや方法論の発展が待たれるところです。

また、共催展示の完成させるプロセスで、展示内容、方法、場所について、新しい考え、捉え方に触れることで刺激を受け、自身を高める機会になったこともご報告いたします。



展示室の様子

市民に支えられて—平成29年度活動報告—

パルテノン多摩歴史ミュージアム 仙仁 径

当館には、現在「植物標本整理ボランティア」、「古文書解読ボランティア」、「定点撮影プロジェクト」、「多摩くらしの調査団」の4つの市民ボランティア組織があります。それぞれ専門性、質の高い活動を行っており、博物館活動を行う上で、なくてはならない存在になっています。活動期間も長く、定点撮影プロジェクトと多摩くらしの調査団は今年度で10周年、植物標本整理ボランティアは30周年を迎えました。

市民ボランティア活動が盛んな当館ですが、平成28年度と29年度は、これまでとは少し違った市民協働活動を行いました。「多摩市ツバメ調査」です。多摩市と市民、当館で「多摩市ツバメ調査団」を結成し、平成28年度に予備調査を、平成29年度に本調査を実施しました。調査では、多摩市を10ブロックに分け、メンバーに担当ブロックを決めていただいた上で、春から夏にかけて各地区を歩いて巣の有無や、雛の数などを調べていただきました。



調査団メンバー撮影

実は、多摩市でツバメ調査を行うことになったきっかけとして、30年前（昭和61、62年）の当館開館直前に、多摩市と市民で行ったツバメ調査があります。30年前と今回の調査結果を比較すると、どのような変化があったのか、またその変化はなぜ起こったのかがわかります。今回、調査対象をツバメに絞った理由は、ツバメは家やビルなどの人工建造物にしか巣を作らないため、地域の環境変化の影響を受けやすいこと、そして人に親しまれているため、今後の生き物調査の入口として適していることが挙げられます。

多摩市ツバメ調査では、長年様々なツバメの調査に関わってこられた市民の方に団長になってご指導をいただきながら調査を行いました。基本的にはメンバー各自で調査していただきま

したが、何回か一斉調査日を設け、調査後に集まり、報告会を行いました。また、ツバメの集団ねぐらの観察会も行いました。

2年かけて行った調査の結果は、これから団長に専門的に解析していただく予定ですが、速報として、歴史ミュージアム企画コーナーにて、「多摩市ツバメ調査から見た地域」を開催しました（11/17～2/27）。今回の調査では、様々なことが明らかになりましたが、その一つが、30年前より減っていると思われていたツバメの巣が、ほぼ同じ数発見されたことです。巣は市内にまんべんなくあるのではなく、30年前と同様に京王線聖蹟桜ヶ丘駅周辺に高密度に巣がありました。これは、天敵を避けるため、賑やかな場所をツバメが好むことと、市街地のすぐそばに多摩川が流れているため、餌を得やすいことなどが理由として考えられます。

その他にも様々なことが明らかになりましたが、このような調査は市民の協力なしには実現できなかったでしょう。市民パワーを強く実感した調査でした。今後も、市民とともに歩んでいけるような活動を実践していきたいと思えます。



展示物のリニューアルと施設の大規模改修

コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館） 森 融

八王子市は平成29年度に市制100周年を迎えました。100周年記念事業の一環として、当館では科学展示物の更新、プラネタリウムの改修、施設の大規模改修を行い、29年7月22日にリニューアルオープンしました。

改修の話が具体化したのは26年の12月頃でした。展示物は平成元年の開館以来のものが半分以上残っており、老朽化して故障も多く、お客様からも新しい展示が欲しいという声を多数いただいていたので、待望の展示物更新となりました。

改修にあたり、まず新規展示の基本計画を策定することになりました。当館の現状を分析し、いくつかの問題点をピックアップしました。①プラネタリウムがあるが、宇宙に関する展示が無い。②来館者に未就学児を含めた小さいお子さんが多くなっている。③館近くの浅川から発掘された230万年前のハチオウジゾウの化石のさらなる活用。

他にもいくつかありますが、これらを総合して「八王子から宇宙へ、“科学する心”をつなぎ、ひろげる」という基本理念と4つの基本方針を決定しました。①国際宇宙ステーションでの日本の宇宙飛行士の滞在など宇宙が身近になっており、当館でも「宇宙の学校」「コズミックカレッジ」の講座を開催していることから、宇宙に関する展示の設置。②未就学児も楽しめる展示の設置。③従来と同様の体験型の展示物。④ハチオウジゾウ、八王子隕石など、地域に関する科学展示の設置。この4つを基本方針とする基本計画を27年3月に策定しました。

その後、基本計画をもとにプロポーザル方式で設計を委託する業者を27年8月に決定。翌28年5月まで設計委託を行い、1階は未就学児も楽しめて、かつ物理現象を再現する展示「遊びカガク」など、2階は国際宇宙ステーションの1/10模型とミッションに挑戦するシミュレーター、小惑星探査機はやぶさのシミュレーター、四次元デジタル地球儀ダジックアース等「地球・宇宙・未来」コーナーとハチオウジゾウ等の「八王子を知ろう」コーナーです。市議会9月議会の議決を経て、28年9月に制作委託契約を締結し、制作がスタートしました。

プラネタリウム機器は平成20年3月にリニューアルしており、今回は前回できなかった座席とドームスクリーンを全面更新。プラネタリウム機器は恒星球の機器のオーバーホールを実施。

施設の改修は建物全体、電気設備、空調設備、給排水衛生設備、エレベーターの改修で、平成元年の開館以来、初の大規模改修です。27年11月から翌年5月に設計委託を行い、28年9月に契約を締結しました。

またこの間、28年3月から特別展「八王子隕石と小惑星探査機はやぶさ」を開催しました。これは、八王子隕石落下から29年12月29日で200年となるため、地元でもあまり知られていない八王子隕石について、郷土資料館とともに普及を行うものです。

展示ケースの調達から展示のレイアウト、借用品の手続きや運搬、保険契約などと並行して新規展示物、大規模改修の打ち合わせや契約事務等があり、多忙を極めました。

特別展は地味なテーマながら、大人に好評で、この期間、大人の入館者が前年度より増えました。

特別展の終了後の28年6月からは三博協の会長館の業務を多摩六都科学館から引き継ぎました。

そして28年の夏休みの繁忙期を乗り切り、全ての工事契約を締結し、28年10月から全館休館。事務室は市営野球場の事務室へ移転。館内の備品等は他所管の空き事務室ほか、小学校の空き教室等へ一旦引越しました。非常に量が多く、整理と引越しが大変でした。また、翌年度予算の策定期間と重なって大変だったことも記憶に残っています。

28年11月から職員7名のうち3名は期限付きで他の職場の応援事務に従事することになり、4名で事務を行い、サイエンス・ナビゲーター（科学指導員）3名は児童館へ出張して工作教室を行いました。また、学校向けのプラネタリウム学習番組の投影は、移動式プラネタリウムで学校へ出向く出張方式で対応しました。（ミュージアム多摩38号参照）

改修工事は隔週の全体会議と各工事との個々の打ち合わせで進めていきます。展示のキャプションの内容や館内カーペットの色、ドアの塗装の色、洗面台の色や型式など、実にさまざまな決定事項がありました。

3月には応援事務の職員も戻り、オープンに向けての事務がスタートしましたが、館内はまだまだ工事の真最中でした。

5月中旬に改修工事が終了すると、すぐに新しい展示物の設置が始まりました。そして館に戻る引越し、落ち着く間もなくオープン式典と開館の準備と続きます。

改修により館内の照明はLEDになって明るくなり、太陽光発電装置も設置され、月に1,000kw程度発電しており、電気料金も下がっています。トイレには幼児用の小さな洋式便器や低い手洗台を設置。元の保健室は授乳室として改修し、授乳用椅子、ベッド等を設置しました。

展示物も無事設置され、内覧会を実施。7月22日にリニューアルオープンを迎えました。式典の後、市内小学校児童のブラスバンド演奏で開館。にぎやかなオープンとなりました。

来館者は8月11日から16日は連日1,000人を超えるなど、8月末までの来館者は29,360人、前年度の1.76倍となり、館内は子どもたちの笑顔であふれました。

その後1月末までの来館者は約72,600人。7～1月の入館者数の比較では、リニューアル前の約1.35倍となっています。



1階展示 遊びカガク 夢ロケット



2階展示 国際宇宙ステーション模型とシミュレーター

地域に開かれた大学博物館として

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

東京都三鷹市の自然豊かなキャンパスにある当館は、国際基督教大学（ICU）初代学長であった湯浅八郎（1890-1981）の大学創設・育成に対する貢献を記念して、1982年6月に開館した博物館です。大学の一施設ですが、展示室・資料室はどなたにも無料で公開しています。主な収蔵品は、湯浅博士が蒐集した各地の民芸・工芸品、およびICU構内に散在する遺跡から出土した旧石器時代と縄文時代の考古遺物です。その他、美術品や歴史資料もあわせて展示・紹介しています。

常設展示に加え年に3回、収蔵資料を様々な切り口で紹介する企画展をおこなっています。平成29年度は、英国の博物学者ジョセフ・バンクスが18世紀に南太平洋諸国で調査・蒐集した膨大な植物標本をもとに出版された、豪華な版画集を紹介するシリーズ展示「バンクス植物図譜4」（4月4日～6月17日）、江戸時代以降の染織品や陶磁器にあしらわれた縞柄・格子柄に注目した「縞と格子」（9月12日～11月10日）、優れた素材として自在に加工され、衣食住の場で活躍してきた和紙の魅力に焦点を当てる「紙の仕事」（1月9日～3月9日）を開催しました。

また、企画展に付随する催しとして、ICU教員や各分野で活躍される専門家に講演を依頼している公開講座は、毎回たいへんご好評をいただいています。聴講は無料ですが、席に限りがあるため予約をお願いしています。

平成30年度は、漆器の提重や弁当箱の収納の工夫をご覧いただく「携帯の形・ひらく弁当箱」（4月10日～7月6日）、幕末明治の探検家・松浦武四郎生誕200年を記念して、武四郎が晩年を過ごした書齋を紹介する「ICUに残る一畳敷」（9月11日～11月9日）、藍染の織物や印判手と呼ばれるやきものなど、型紙を使って絵柄を染め付けた品を展示する「型染と印判手」（1月8日～3月8日）を予定しています。

一方、ICUでは学芸員の資格取得を目的とした学芸員課程を開設しており、当館でも大学博物館として館内で該当の授業・実習をおこなうほか、その他の各種クラスにも博物館を開放しており、多様な専攻分野の学生が来館します。

加えて毎年、近隣の小中学校にも案内をし、社会科や歴史の授業などに活用していただいています。地域に開かれた大学博物館として、今後も多くの方に楽しんでいただけるよう、幅広い活動をおこなっていきたくと考えています。



武蔵野市の古文書解読講座

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 米崎 清実

江戸時代のくずし字の解読法を身につける古文書講座は、各地の博物館などで開催される人気のある講座の一つといえましょう。武蔵野市教育委員会では武蔵野市の歴史や文化財への理解を深めていただくために古文書解読講座を開催していますが、武蔵野市の特徴は、昭和50年(1975)から40年以上にもわたり毎年、開催している点にあります。武蔵野市史編纂事業に携わって来られた故鈴木研先生と国文学研究資料館名誉教授森安彦先生に講師をお願いし、主に武蔵野市の文化財に指定されている古文書をテキストに、くずし字の読み方、市域の江戸時代の歴史を解説いただいています。毎年15名を定員として募集してきたことから、受講人数は延べ600人以上と、大変多くの方が受講されてきました。近年では、武蔵野市立中央図書館の視聴覚ホールなどを会場に、8月を除く5月から翌年3月まで隔週火曜日の午後の全18回の講座を開催してきました。対象者は、市内在住の在学者で、一度受講された方の再受講はできません。それでも毎年、定員を超える申込みがありました。受講者の中からは自主勉強グループも生まれ、長年継続して活動しているグループがある一方、近年では新しいグループも生まれています。

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館(以下、ふるさと歴史館と略記する)では、平成29年度から古文書解読講座のあり方を大きく変えました。その主な理由は、①一度受講した方から再受講できる講座を開設して欲しいという要望のあること ②近年の講座が平日の午後開催ということもあり、受講者が限られること ③古文書を担当する学芸員が配置されたふるさと歴史館が開館し、会場として使用できるようになったこと にまとめることができます。これにより特別講義編と初級編という2つの古文書解読講座を設けることにしました。特別講義編は、古文書解読講座の既受講者またはそれと同等のくずし字を読む技術を修得している方を対象とする講座で、森安彦先生に講師をお願いし、くずし字の解読技術の向上とともに、史料の読解力を養い、受講者自らが地域の歴史を調べ、理解する

能力を身につけることを目的とします。市立中央図書館を会場に火曜日の午後全8回開催しています。一方の初級編は、初めてくずし字に接する方を対象として、ふるさと歴史館の会議室を会場に、8月を除く5月から翌年3月まで隔週日曜日の午後に開催する全18回の講座です。

今後も武蔵野市では特別講義編と初級編という形で古文書解読講座を開催する予定です。一方、講座をめぐる課題は少なくありません。特別講義編の再受講は可能としていますが、受講人数に限りがあり、参加希望者のニーズに応えることは困難です。また、特別講義編、初級編ともにテキストの調達も課題です。古文書はふるさと歴史館とは別の建物に保管しているため、テキストを作成するには対象文書を保管庫からふるさと歴史館まで運搬し、デジタルカメラによる撮影を経たのち、テキストの印刷原本を用意しなければなりません。古文書をデータベース化し、容易に利用できるようにしなければなりません。もちろん、それは古文書の閲覧環境の整備でもあります。武蔵野市の良き伝統を受け継ぎつつ、ふるさと歴史館では地域に根付いた事業を継続してまいります。



東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車すぐ
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤の台団地行きバス「市立博物館前」下車徒歩7分
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩15分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字駒形富士山316-5	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分/コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から新道福島行きまたは富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩5分/JR青梅線「西立川駅」下車徒歩15分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環③「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス（イオンモール行き）または都営バス（青梅車庫行き、箱根ヶ崎行き）で「八幡神社」下車徒歩2分/多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩2分
バルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財調査センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5-7分
集合住宅歴史館 (独立行政法人都市再生機構)	八王子市石川町2683-3	042-644-3751	JR八高線「北八王子駅」下車徒歩10分、JR線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」、「田無駅」北口からはなバス第4北ルート「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みつ台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩2分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-221-1	0422-34-3962	JR中央線「武蔵境駅」から小田急バス「狛江駅」行き「天文台前」下車/京王線「調布駅」から小田急バス「武蔵境駅」南口行き「天文台前」下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王線相模原線「南大沢駅」下車徒歩5分
狛江市立古民家園 (むいから民家園)	狛江市元和泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分/小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車
武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市堺5-1-5	0422-53-1811	JR中央線・西武多摩川線 武蔵境駅から徒歩12分/ムーバス 境西循環0番「武蔵境駅北口」から4番「武蔵野ふるさと歴史館」下車
帝京大学総合博物館	八王子市大塚359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学」駅下車徒歩15分/京王線「聖蹟桜ヶ丘」駅、「高幡不動」駅、「多摩センター」駅より京王バスに乗りし「帝京大学構内」バス停にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢3-10-2	0422-33-3340	中央線三鷹駅南口または武蔵境駅南口より小田急バス国際基督教大学行にて終点下車/武蔵境駅からタクシー 10分

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No.39

発行日 2018年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2018年度会長 東村山ふるさと歴史館
東村山市諏訪町1-6-3 042-396-3800

編集委員 調布市郷土博物館 : 芝崎 由利子
瑞穂町郷土資料館 けやき館 : 北爪 寛之
奥多摩水と緑のふれあい館 : 加藤 勝康
福生市郷土資料室 : 田中 愛誠